

齋壇內岡直廬大人撰

(非賣品)

廿八年 備作和歌會月並及歌合歌卷

十月分

朝霧

月並兼題 故鄉鶉

歌合

深夜擣衣

月前鹿

紅葉映水



會則中改正目

一 切ハ必毎月十五日限リトシ期限後到着ノ分ハ斷然設詠トス
一月並兼題ハ一題二首以内トシ歌合執行ノ月ハ一題一首トス
一 歌合懸賞分ハ勝者ニ賞品ヲ送ル

但シ遠地ニシテ郵税ヲ要スル分ハ郵券ヲ送ルカ又ハ幸便ノ節幹事ノ許ニ申越スベシ其
通報アルマテハ預リ置クモノトス

一 會費ハ三ヶ月分前納トシ(十一、十二、一)(二、三、四)(五、六、七)(八、九、十)ノ四度ニ分テ
其初メノ月ニ於テ出詠ト共ニ納ムヘシ若シ會費到着セザル分ハ清記録ニ掲載セス且フ歌
卷モ送附スルコトナシ

但シ郵券代用一割増シトス又歌卷送附ニ郵税ヲ要スル分ハ會費ト共ニ三ヶ月分前納ス
ヘシ

一 會員ニシテ歌卷ヲ要セサル者ハ會費半額ヲ納ムモノトス

一 遠地ニシテ郵送税ノ添ハサル分ハ税先拂ニ送附スルモノトス

右會則中改正ノ條目ニ從ヒ十一月ヨリ斷然實行致候間固ク御守リ被下度又是迄會費并ニ郵
税未納ノ分ハ來月御納金節御送附相成度若シ期日迄ニ御送金無之方ハ郵税先拂ニテ御督
促申候間左様御了承被下度候也

朝霧

一〇點

山里に秋たつさまの見ゆる哉けふたちのはるみねの朝さり

三宅 律藏

あささりに行きかふ舟も立ちこめて遠くへたつる淡路しま山

石原才太郎

あさひ影さり立ちこめて海ぐらゝの島もたはるに見ゆる今日哉

難波 歌朗

どく起て出行くみちのむら里も見えぬはかりに立る朝さり

大塚 督

妹どわかむかひの里を淡くこく朝さりたちてくまをなし覺

鳥居藤一郎

朝さりのへたてのあれと山かつの垣はの菊の香社しるけれ

逸見 蓬村

朝霧のくらすの山のあけかたはまきの雫のれとのさひまさ

横田 知範

東雲にさりたちこめて賤か家の軒之の松も見えすなりけり

藤井直彦

東雲にたなひく雲をたちこめて明けもはなれぬ野への朝霧

竹内 澤治

うなむらか友よふ聲の聞ゆれと姿の見えぬ須戸のあささり

正本 久治

かへり見れハ今來し道もみえわかす行へをまどふ旅の朝霧

間野 敬明

朝さりも今これぬらん難波かたこさ行を舟もみえりめに覺

太田 政人

花みんと分けゆく袖のまゆる迄露よりふかき野邊の朝さきり
霧立ちてむかひのみるぬ明方に聲のみまるき海入の釣ふね
柴の戸を明けは袖もまゆるまでかをりみちたる軒の朝さきり
よしきなす高雄の峯の紅葉をあさきりふかくたちかくし屍
體かるうなむの聲をきこゆれと朝さきり深くたちかくしけり
あさきりへふもとをこめて立ぬれと空に見えたる峯の松原
賤かたく朝けの煙みえぬまでさきりたちこめしあきの山さきり
あまのたぐ朝けの煙わかぬまでさきり立ちこめしすまの浦さきり
ゆきまよふ人の心もくみやらてたちこめにけり秋の朝さきり
常に見る尾の上の松も此朝は霧にふかくもとさ、れよけり
朝さきりのとさす野原をみ渡せばかけみえなくに人の聲する
さし登るあさひのかけもみえぬ迄さきりたちこめし峰の松原
木曾の山朝さきりふかくたちこめて聲をまへにたどる旅人

難波慶子
山本竹里
田中績三
笹岡良風
皆木正義
宮川秀水
植田敬風
中島静廬
安原正直
則安靜の舍
大西知加
高田高藏
長瀬茂平

あさきりもはれんとす關山松のこするはのかに見え初に覺
峯までいたちものはらぬ秋霧に雲井はとれて朝日てるなり
朝さきりに沖つ島山かけさえて空よりも、まつのひとむら
大井川朝さきりふかしさし下すいかたの竿のねとそかりして
いかなれへ立へたつらん朝霧の妹かゝきねも見えわかぬ迄
もしはやく煙とのみも見ゆる迄すまの浦わまたる朝さきり
山里は朝さきりふかく立ちこめてあくるも知らぬ心地ころすれ
わらへらか聲かりする聲はして朝さきりふかしやまもとの里
あかつきよとく起き出て我行けて行へも見えぬ野路の朝霧
まの、ゆゑ鳥の聲のみさやかにて朝さきり深しひむかしの山
鳥なく尾の上のさきりのたちこめて白みかねたる明はの、空
いつる日の光りなきまで立ちこめて朝霧ふかし川ねものやと

末澤鴨渥
藤原安次郎
岡田長造
岡野桂園
堤 鉦太郎
菱川虎藏
藤原藤次郎
赤澤竹園
秋山錦溪
喜多島直養
録形覺治
國富直香
市村盛潔

旅人のいろかんものを朝さりの道の行手をなとおほふらん
 きのふけふ盛りなるらん紅葉をたらくみする峯の朝さり
 はのくゝとたてる浦わの朝さりに行へもわかぬあまの釣舟
 さ、波や志賀の濱松ほの見えてあささりわたるせたの中橋
 二〇點八、村からすねをらを出る聲としてあささりふかし秋の山さど
 七、うなむらか栗の實拾ふ聲としてあささりふがし秋の山もど
 六、海士の子かよはふこ舟もみえぬ迄深くもかをる浦の朝さり
 五、朝さりに田の面を見えすをちこちに引や鳴子の音斗りして
 四、あさ沙に綱曳やすらん立ちひるきりよりもる、海人の呼聲
 人、あささりはふもどをこめて立ぬれと峰の思はぬ空にみえぬ
 地、立てひるきりの中より明石かたあさひの影もみえろめえ
 天、山からすあけぬとつくる聲のすれと猶夜をのこす峰の朝霧

追 加

水谷 巖
 押 阪 榮 平
 伊 田 如 水
 遠 藤 正 心
 下 村 病 知
 荒 木 亭 々
 押 阪 カ ッ 子
 岡 千 春
 薄 田 協
 前 田 薇 水
 武 藤 國 光
 金 原 帷 明

箱根路之明てこゆれとしはらくは猶さりふかし不二の大岳
 一〇點 故郷 鶉
 ふるさとの小野の古巢の鶉さへ淋しき秋をかこちてやなく
 年をへし我ふるさをなつかしく音なふものは鶉なりけり
 古里のあさちか原の夕風ようつらなくこらあこれなりけれ
 故郷の垣根はあれてうつらなくさこの露に袖をぬれける
 古里の鶉もひかしのふらん吾よさけとやあこれけになく
 村雨に真秋かつちるふる里を我すむいへどうつらなくなり
 荒れはて、のらどなりにし古里はかねて鶉の聲のみろする
 ふるさとの荒れ畑の粟のはるくゝとちる夕風にうつら暗也
 人もなき我古さとの浅茅はらたのかもどやうつら鳴らん
 故郷は浅茅さらどあれつるもうつらなく音はかはらさり危
 すむ人のまればなりゆく故郷の尾花かくれようつらなく也

岡 直 盛
 三 宅 律 藏
 石 原 才 太 郎
 難 波 歌 朗
 薄 田 協
 大 塚 春
 山 本 近 子
 逸 見 蓬 村
 横 田 知 範
 藤 井 直 彦
 鉄 形 覺 治
 田 中 績 三

古さどの荒れたる庭の木かくれに空つらなを也秋の夕くれ
主もなくあれにし宿の小萩をらさひしさつけてうつら啼也
住みすてし我古里をけふとへハ秋をうつらの聲のみろする
ふる里のねのか伏ともあれぬれハさひまさるへて鶉なく也
あれこて、はや幾年かふるさとの月すむ庭にうつらなく也
草のくれうつらの聲のきこゆ也ふりにしさどの秋の夕くれ
故郷の尾花かもとよ床しめて我ものかはにうつらなくなり
風ならてとふ人もなき古さどの淺茅が庭にうつらなくなり
ふる里の庭のかやをら秋立てまつとふものハうつらなり鶉
住すてし我ふるさどをきて見れハ秋をうつらの聲しる也
さらぬたに淋まき物をふるさどにあればをへて鶉啼なり
とふ人もなくて荒にし古さどの秋をうつらの聲のみろする
八重もやら茂れるたのか故郷を今日とひくれハ鶉なくなり

宮川秀水
齋木芳流
秋山錦溪
内田龍峯
武藤國光
中島靜盧
藤原藤次郎
荒木亭々
菱川虎藏
金原帷明
下村病知
則安靜の舎
大西知加

一五點

住む人は何地ゆきけん古里は尾花しけりてうつらなくなり
すみす、て年古さどを秋とへハあれたる庭にうつらなく也
住すて、年ふるさどの我いははうつらなく迄あれこてに鶉
故郷のあれにし庭の小萩はらいまは空つらの床となりけり
住すて、年古さどのあれにしをなはとふものは鶉なりけり
荒れこてし我故郷を秋とへハ尾花のものとにうつらなくなり
ふるさどの庭の垣根に植たきし尾花かくれにうつらなく也
すみすて、年ふる里を來て見れハ淺茅かばらに鶉なくなり
すみすて、年ふるさどをとひくれはあれし垣根に鶉啼なり
遠人もたゑて跡なきふるさどは秋風さむくうつらなくなり
秋毎まかりて遊びしふる里の萩をらさむくうつら鶉なり
すみすて、年ふる里のあと、へは今ハうつらの床に成にき
すみすて、我ふる里をどひくれハ夕風さむくうつらなく也

長瀬茂平
末澤鶉渥
藤澤茂登一
藤原安次郎
鳥居藤一郎
岡野桂園
高田高藏
植田敬風
喜多島直養
山本竹里
市村盛潔
前田薇水
岡田長逸

年をへて我古さを秋とへん野らなるにはまうつらなを也
 淋しさにふる里とひて思ひさや秋をうつらの聲きかんと
 いにしへの庭もま垣もあれて、うつらの床と成にける哉
 すみすて、年ふる里はあれまけり尾花かくれに鶉なくまで
 秋ふけて我故郷をどひくれねなかもどにうつらなく也
 あれてし故郷を秋とへはあるしかほにもうつらなくなり
 すみすてし宿ともまらて古さとの真秋かもどに鶉啼なり
 住みすてし人やこふらん古さとのあれしかきねに鶉なく也
 古さとの庭の萩こらあれはて、あき風さむく鶉なくなり
 いたつらに年古さをきてみれ荒たるにわに鶉なくなり
 二〇點四、すみすてし吾故郷をあさとへん草村かくれうつらなくなり
 人、思てすも我古さにきてみれあるし顔ももうつらなく也
 地、古さとのあさとひくれわれてし小萩かもどに鶉啼なり

難波慶子
 太田政人
 水谷巖
 間野敬明
 正本久治
 竹内澤治
 高千春
 押阪カッ子
 押阪榮平
 遠藤正心
 安原正直
 赤澤竹園
 皆木正義

天、あれはてて月の見すめる故郷の尾花かくれまうつらなく也

追 加

住すて、年ふる郷に秋くれは尾花はに出てうつらなくなり

紅葉映水

一〇點 吉野川春のなまやまさららん水もしきよてらす紅葉を
 秋ふかくなりまける哉立田かはるこにも移るもみちその影
 もみちその水にうつれる色見れば立田の川の思ひやらる、
 五十鈴川さよさなかれの水うめて錦とばかり移るもみちと
 唐にさし織なす山の紅葉はたつたのかをうめわたすらん
 入日かけまた照かへすもみちはの下ゆく水に秋なかる、
 水底にたかしつめけん唐にしきうらよりうつる紅葉この色
 露霜よもみつる色のみなごにうつりてみゆる錦なりけり
 大井かへ流る、水もしきよと見ゆるはかりに映る紅葉の

國富直香
 岡直廬
 三宅律藏
 石原才太郎
 難波歌朗
 遠藤正心
 伊田如水
 薄田協
 大塚晉
 竹内澤治
 正本久治

行く水のみどりはきえて紅の錦あやれるさしのもみちの
 秋たてににしきとこかり山川の流れをうむる岸のもみちは
 白波の名にはたてども立田川もみちの色深くもあるかな
 吉の川水にうつれるもみちは、此世のはかの物と見えつ、
 こく薄く影をうつして水の色をよしきとみする岸の紅葉を
 色もこき小かわの岸のもみちは、水の緑りを染め流し見
 大井川なかる、水もくれないにはかる斗りに移るもみちと
 池水にうつる紅葉の影見れいにしきとの見も思ひける哉
 池の面にうつる紅葉の影みかれの水をこかけてよしき敷き見
 うすくこく隈なくうむる紅葉はの水に移るふ様をならぬ
 打よする波にも色の立田川さしのもみちの水にうつりて
 汲とりて家つとにせんすへも哉なかれに映る岸のもみちと
 龍田かわ涙も秋の色見えて水うこふかえもみちしよけり

水谷 巖
 岡田 長造
 國富 直香
 鐵形 覺治
 山本 竹里
 田中 績三
 笹岡 良風
 皆木 正義
 宮川 秀水
 秋山 錦溪
 植田 敬風
 中島 靜盧
 荒木 亭々

いかにして霜やたきけん水底のもみちは岸の物としもなし
 大井かはるこにもみちのかけみちて桿さす方にまどふ舟人
 水清みうつれる紅葉やまひめのおりし錦とまかふへらなり
 水うこよ沈む錦と思ひししのもみちのかけにろ有ける
 池水にかけをうつして紅葉それのかにしきをいかみみる蘭
 瀧の川なかる、水にかけ見えてさしの紅葉の色まさりゆく
 枝なから水にうつれるもみちは、魚もめて、や寄てみる蘭
 ゆく水ようつれる岸の紅葉はたの織りかけしにしき成らん
 立田川うつる紅葉のかけ見れいにしきを洗ふ心地こそすれ
 池の面にうつれる見れはもみちこの下ても今はろめ盡し見
 谷川の水のろこまてからにまき織るや高根のもみち成らん
 立田川さしのもみちのかけ見えて流る、水もにしき也けり
 初瀬川さしのもみちのこけれや水うこ迄もよしき成らん

菱川 虎藏
 金原 惟明
 下村 病痴
 堤 鉦太郎
 則安 静の舍
 大西 知加
 高田 高藏
 岡野 桂園
 長瀬 茂平
 末澤 鴨渥
 藤原 安次郎
 藤澤 茂登一
 藤原 藤次郎

判左結句わふるらんどいふ事格たのへりらんは終止言附屬の助辭なり打やわふるらんど

せんにこどもなかるへきを右も結句なをあるへけれと格たかへるにはまさりぬへし

左 聞くさへもかなまき物を小夜碓打つういかにかこつ成らん 難波慶子

右勝 小夜ふけて文よむ窓の月かけよさゆゆる碓のたどのまつけさ 操山女史

判右勝の勝たるへし

左勝 よを寒みいろさやすらん更る迄さぬたの音のうちまざる也 薄田協

右 誰か爲に衣うつらん小夜ふけてまくらにひく遠方のこゑ 長瀬茂平

判右結句猶あるへし左を勝とす

左 小夜ふけて歸らん妻を松浦瀉あまのさぬたの聲やうらむる 横田知範

右勝 ふきすすむ夜半の嵐のひまゝは碓たの音の絶すきこゆる 藤原藤一郎

判左あまりにことやうなる右を勝とす

左持 小夜ふけてさぬたのをとのせわまきは誰ためいろく衣成闇 水谷巖

小夜更てたかうつきぬの音ならん夢もむすこて眠れろり覺 皆木正義

判左二三の句俗言也右も二三の句のきぬの音といふこといか、どもに難あれは持とす

左持 秋風の身にさむけれとつれもなき夜半の碓を友とこころさけ 遠藤正心

右 さましくすなく音も寂れよ更てよ寒のさどにころもうつ也 押阪榮平

判左二三の句つれもなきはつれなきの意味にやつれもなきは用もなきの意なれは、た

つれなにか、右の上下わられたり又復ふけての上は小の字落るにやうはとまれかやま

れ勝劣をいせんはども侍らす

左持 小夜ふけてすみ行月又開ゆるはたか爲まうつきぬた成らん 植田敬風

右 碓かうつ碓の音もさよふけて秋かせさむしやまのへのさど 堤鉦太郎

判左右どもこどもなしよき持とす

左 小夜ふかみ誰を懸らんねもやちて賤の少女の衣してうつ 鳥居藤一郎

右勝 ゆきかよふ人もとたえて虫のねも更ゆく夜半に衣うつかな 宮川秀水

判左結句さゝゑす初句も小夜ふけてといえんにこどもなかるへきを右も結句のかない

か、音どありたしされど左はまさるへし

左 少女子かとはぬ業をはかたらひてしてうつ礎よへ更にけり

三宅律藏

右勝 うた、ねのねさめて聞けば月影のふけゆくよこも衣うつ也

未澤鴨渥

判左二三四の句き、ゑす右は難なし勝とす

左 入けゆけさやかに也ぬ月影にうかれてうつかをちの夜礎

調 千一春

右勝 誰か爲に衣うつらん小夜更けてかたふく月よ音のきこゆる

赤澤竹園

判左右ともめてたけれど右のかた猶まされり

左 小夜ふくるきぬたの音も物思ふ心も千をにくたけぬるかな

藤原安次郎

右勝 うた、ねに小夜更ぬらしえつかうつ砧の音のひとり嚮けハ

齋木芳流

判左初句れたやかならず右も結句猶あるへけれど左にはまさりぬへし

左持 ふけてなはしつまり渡る秋のよにえつて衣をたかくうつ蘭

石原才太郎

右 小夜ふけて峰の松風とたゆむまよくまざる衣うつこゑ

藤澤茂登一

判左右とも今少しいひたらぬ心地す依て持とす

左 妹か打さぬたのおとよ夢さめて来いの身つらき寒さなり梟

安原正直

右勝 櫻鹿の妻よよこゑをさくよりも身にろしみぬるよ半の礎は

岡田長造

判左四五の句つたなしみぎもいとよしとほそあらねどひだりにはまさるへし

左持 ひどりぬる淋しきよ半の秋ふけて衣うつねに思ひますらん

田中績三

右 月影のかたふくなへにねとささるてたるく聞ゆ遠きぬた哉

秋山錦溪

判左二の句夜半にとせてと叶はず四の句も衣うつ昔といへどねといふ事さ、なれす

右二四の句例の格たかへり依て勝劣としはらくいはす

左 小夜衣夜ふけてろさく夜ななくよ心ありつる妹やまつらん

難波歌朗

右勝 くる里のこひしき返も旅まぐら打おどろかす小夜さぬた哉

銀形覺治

判左夜ふけて夜ななく重りて聞くるし右もよしとよはあらねど左にハ勝るへし

左持 去のひねの心も千々よくたけとや更ゆく月よころも打らん

逸見蓬村

右 小夜ふけて隈なき月に家も見す衣うつねいづつてなるらん

中島静盧

判左初二の句いか、右三の句いか、持とす

左勝 小夜ふけて打音高きからころも何處の妻のすさひなるらん

正本久治

右 たれかため衣うつらんしつの女を更行く月に音のきこゆる 菱川虎蔵

判右結句何の音ともきこるす初句もたれやかならず左を勝とす 押阪カッ子

左持 をちかたの旅地の人にねえらんとよ更て迄もころもうつ也 大塚督

右 音にたちて千々にあこれの虫よりも尙ふくるよの礎なり鬼 内田龍峯

判左右ともいひたらす 武藤國光

左勝 さらてたにかなしき物をさよ更て砧のこゑの遠きこゆる 内田龍峯

右 さよ砧まきかへしてもうちぬるかふけ行月よ音のさゆるは 武藤國光

判左右ともきこえていへれと左いさ、かまされりや 間野敬明

左持 さよふけてかたふく月に衣うつ誰か物思ふすさひなるらん 荒木亭々

右 よやいたくふけ渡るらん遠きぬたすみ行く月に音まざる 荒木亭々

判左右とも六かし 金原帷明

左勝 秋風の身にまひよその月影にたゆむひまなごころもうつ也 太田政人

右 夢さめてねられさりけれ空さびみ更行月にころもうつよは 金原帷明

判右二の句のけれといふこといか、係なくてかくいふ格なし左もよしとにあらねど

格たかへるにせざるへし 伊田如水

左勝 さらぬたに淋しきものを月更て賤のいはりにころもうつ也 伊田如水

右 折もころあらまし物をさよ更て砧のおとのうちもたゆまず 下村病痴

判右はこの結なし左を難なまかちとせんか 山本近子

左持 月かけのかたふく迄も唐ころも音いろかじを打たねか子 山本近子

右 きりくす聲もたゑにし小夜中に誰爲にかはころもうつ蘭 則安靜の舎

判左四の句俗なり右も四の句かては反語なれといか、こも勝劣をわけつろふへくもあ

らす 喜多島直養

左持 十六夜の月かたふきて唐ころもうつ音さむし山もとのさと 喜多島直養

右 よをふかみ月にうかれて賤か女か衣うつらん聲のきこゆる 大西知加

判左右とも同じ候と也 竹内澤治

左 よもすから音のさやのよ聞ゆるの月をよすかに衣うつなり 竹内澤治

右勝 小夜更てつゝれさせてふ虫の音を聞きや賤はころも打らん 高田 高藏

判左右ともこの少しあかりたる調なから左結句らんとありたし依て右を勝とす

左持 小夜更て遠に砧のれどするハ賤の少女のわさにやあるらん 笹岡 真風

右 初霜はまつか手ふさにれきぬらんうつ音寒き小夜きぬた哉 岡野 桂園

判左二の句の遠にを遠々とありたし右二の句手ふさとはいかなることをやいふこも持

月前 鹿

左持 もどかましく思ひし月の雲これてさやかまなりぬ桿鹿のこゑ 藤原 藤次郎

右 桿鹿のこゑもさこゑて山の端に傾くつきのかけろのこれる 堤 鉦太郎

判左右とも勝劣なし

左 すこき送月かけそれて山のもまなく聲たかし妻こふるしか 市村 盛潔

右勝 小倉山ふけゆく月まわかくさの妻や戀ふると鹿ろなくなる 植田 敬風

判左結句つまりたりみきをかちとす

左勝 はま紅葉ちる夜の月に聲すみて山へさひしや男鹿ふくなり 横田 知範

右 小倉山尾の上は月のかけさえて夜風さむくまかろなくなる 菱川 虎藏

判左右ともこれはあかれる調なりされど右ハ月のさゆるといふこといさ、かれたやかな

らす冬ならてはいぬ語なり依て左を勝とす

左持 小夜ふけて月もかたむく山のこまかけはのみゑて男鹿鳴也 武藤 國光

右 厂金をさくたにいと、かなしきをかたむく月よ男鹿なく也 中島 静盧

判ともよろし位の同しはとなり

左持 こん人を待兼山の月すみてつまどふまかのこゑのみろする 岡 千春

右 狩人も今はかへりて更る夜の月よをしまぬさをしかのこゑ 國 富直香

判ともまたよろし位もまた同じ

左 さを鹿の聲のあこれなかく、よ月の光りのろへハ也けり 逸見 蓬村

右勝 てる月に峰の松風いと寒くあはれをうふるさをまかのこゑ 安原 正直

判左二の句中ハのつかひ様俗なり右ハ難もなければと前の三番よりハ



れりされど左にはかちとす

左勝 さやか成月に去われの棹鹿も妻とひかねて峰まなくらん 岡田長造

右 棹鹿のなく聲ちかく身に去みて月かけさよくする渡るかな 内田龍峯

判左より右は月を主と去たる心地す依て左を勝とす

左 山のはにはや傾きぬ夕月夜を去かなく音を聞くにせ去まに 山本近子

右勝 秋萩の去ける野へは月濟て妻と去かかの聲のさこゆる 則安靜の舎

判右少去より去

左 月さるて小倉の山の高根よりさやかにわたるす棹去かのこゑ 難波慶子

右勝 秋ふけて身に去む物ハ多けれどすみゆく月にさを去かの聲 下村病痴

判こはまた少去れちたり左のまたさをいはれたるか猶わかぬの右をかちとせん

左 秋のよの月消けれはれもむろに月をたつねてさを去かの暗 皆木正義

右勝 終夜つまどひかねて棹去かの月もなくなるこゑのあはれさ 藤原安次郎

判右はるかにかちたるへし

左 月さるていとあはれは深草の野邊につまどふさを鹿の聲 鳥居藤一郎

右勝 月かけのふけゆくさやま聲すみて雨里と遠くをしかなく也 秋山錦溪

判左またさをなり右の難しからたるへし

左勝 秋の夜の光りさやけき月かけにつまどひかねてを去か暗也 伊田如永

右 月かゝる梢の紅葉ちかて、あはれは鹿のかけもみゑつ、 金原帷明

判左またされ

左勝 雲拂ふ峰のあらしの音たえてふけ行く月に去か多くなる 末田政入

右 ねさめ去て枕の山の月かけにつまよこふらん棹去かのこゑ 岡野桂園

判左右ともことなしされどみぎの棹鹿のなくとわかた去左を勝とす

左持 すみ渡る小倉の山の月かけもなくやを鹿のこゑうかなまき 正木久治

右 秋の夜の月かけすみて奥山に妻と去かのこゑうきこゆる 齋木芳流

判左右とも同じはとをなり

左 いねもせて明石の浦の月みれはるもさやかま鹿の鳴なる 間野敬明

右勝 さらぬたに淋まきものを山里の月になくなる棹まかのこる 赤澤竹園

判左右とも難はなけれどみぎのかた少し風情ありてめてたま 水谷巖

左持 紅葉散かけさへ見えてさ鹿の月につまこ六聲のかなま 宮川秀水

右 山の上なきこゆる鹿のなく聲どもよさるなる月のかけ哉 判左歌めてたけれど四の句格たかへりこふるといはて時をす右はまたさるなりと

もに難あるを以て持とす 喜多島直養

左勝 さまいつる月かけ清き高根より妻とふまかの聲をちくる 荒木亭々

右 小倉山峰の木の間につきさるて聲もかなまを鹿なくなり 竹内澤治

判左よるま右はまた例のさるなり依てひたりを勝とす 田中績三

左持 おそれにも妻こひわひて棹鹿は物たもひけに月まなくかな 三笠山さまいつる月のわけさるてなく音淋まき棹しかの聲 判左は結句猶あるへし右はまた例のさるも持とせんか 笹岡真風

右 三笠山さまいつる月のわけさるてなく音淋まき棹しかの聲 判左は結句猶あるへし右はまた例のさるも持とせんか

左持 山里や夕月もるままはの戸に聞くもさひまさを鹿のこる

右 山日山尾の上の月にかけてさるてまかなく時を秋はかなまき 大西知加

判左初句のや文字發句などの調也二の句もつまりたり右はまたさるも持か

左持 すむ月のかけに向ひて立田山峰のをしかの聲ろかなしき 高田高藏

右 てる月ま花の色さへふりはへて小萩かもとにを鹿なくなり 操山女史

判左いひたらす右三の句いか、こも持とせん 薄田協

左勝 すむ月のかけも身にしむ嵐山妻とふまかの聲あそれなり 末澤鴨渥

右 すむ月にひかひてつまやこふるらんなくも悲しき棹鹿の聲 判こは右少まよるまきようなれと二三の句また格たへりてる月につまこふるらんひ

かつをにきくもかなしき云々とせんには一わたりさこるたる歌なるを口をしなから 勝と左とさためんか

左持 てる月の影をまたひて棹鹿の妻こふこるあはれなりける 三宅律藏

右 山のはをさやかにいつる月影に姿をみせてをしかなくなり 長瀬茂平

判こは同まはとなり 難波歌朗

左 月見ればかなまき物と秋の夜に又さをまかの聲のあそれさ

右勝 てる月のかけも更行く篠原よつまよふ鹿のこゑのあはれさ 押 阪 榮 平
判左結句きゝゑす右をがちとす

左勝 つまこふる鹿のねさむく聞ゆなり紅葉の山に月のてる夜は 遠 藤 正 心
右 小倉山月のひかりにもみちわけつまこふしかの聲さこゆ也 藤 澤 茂 登 一

判右三の句つまりてりきこゆ依て左を勝とす
左勝 月すみし夜のけまきのあはれさゑたへすとてや鹿の鳴聞 押 阪 カ ッ 子

右 すみ登る月をたつきま妻こふる鹿のこゑをもすみて聞ゆる 録 形 覺 治
判右四五の句きゝゑす左勝か

左持 ふくる程月てくまなくてりうひてさやかに愁し鹿の聲哉 石 原 才 太 郎
右 さなきたに月の光りのさ名にまを猶あはれなる鹿のこゑ哉 大 塚 督

判左初句俗也ふくるまにといえて之叶ハす下の句もどこのハすさやふかなしさを
かこのゑとありたし右はまたさゑなりこも持とす

愚 評 直 盧

廿八年 十一月 備作和歌會月並歌卷

藤原 小 校 學
藤原 如 雨

落葉城雨

兼題小對學

晴 霜

十一月廿八日 謝 芥 味 燭 會 貝 並 燭 卷

齋屋内崎直重大人對

(非賣品)

初霜

一〇點

つゆよりもいと珍ましく思ふ哉われし千草のまものこつはな
はかなくも園の白菊ささぬれはそやはつまものたき渡し覺
秋は、やくれはてにけん今朝へまも庭の落葉にねける初霜
枯れはてし尾花か袖の白露のけさおさかふるしものはつ花
有明の月の光りと思ひしをふみてころまればわのはつしも
心ありてたき渡しけん冬かれのたもかけもなしけさの初霜
有明の月影さえてうすらかに色みえろむるにわのはつまも
立よりてみれハ珍しこの朝け人えらさくの花のうへのまも
昨日ふ今日まも置ろめて白さくの花の上にもはなを見る哉
きのふ迄玉をかさうし白露もまもどなりたるけさの寒けさ
今朝みれば落葉ましろに初まものたき渡まぬまからさの里
冬はけさ立ろめにけんちり残る枯野の菊にねけるこつまも

押 阪 繁 平
同 同 同 同
押 阪 勝 子
同 同 同 同
鳥 居 藤 一 郎
同 同 同 同
喜 多 島 直 養
武 藤 國 光
岡 田 長 造
同 同 同 同
藤 原 安 次 郎
正 本 久 治

れきぬとは人ころまらね吳竹の裏に白くねけるそつまも
 うちかれし尾花に秋の末見えて初まも白しあしたのよはら
 朝風の身にしむ野邊よ来て見れば尾花かもとよたける初霜
 けふよりは四方の木のも紅葉せん置初めたる庭の初まも
 昨日よりふさし嵐のあと見えて今朝はしるくもをける初霜
 はつまものねさしかたみは白菊の花の上もみゑにける哉
 うら枯玄庭のま秋にめつらまはかりたけるけさの初霜
 紅よりつろふ色を白きくまかへてみするけさのそつまも
 きのみ迄千草の露と見まものをけさは嵐のまもとなまけん
 谷川の流れもけさはねとたへて初まもたけり板橋のうへに
 よもすから身にしむ風の色みえて初しもたけり山影の庭
 枯れ残る垣根の萩にけさはまたをられぬの花をさける
 此朝けをさいて見れば我宿の庭白たへまをける初まも

間野敬明
 水谷巖
 同
 宮川秀水
 下村病痴
 同
 赤澤竹園
 高田高藏
 植田敬風
 中島静廬
 同
 金原帷明
 末澤鴨渥

曉のさむさるれと知られけり庭の淺茅もたけるばつまも
 うなむ子か植かへをさし菊の上よけさ初まもの白く結へる
 朝戸明て立出みれをちこちの藪屋の軒にたけるそつまも
 けさみれば落葉にまものねさうめていよ／＼寒き景色也苑
 いろ／＼に咲よしきすの花は土も只一色もたけるそつまも
 ちりかゝる紅葉にたける初まもは錦の上のはなとこつまも
 かれのこるにわの尾花の袖の上よたき渡したるけさの初霜
 たきいて庭の白菊なかひればうれかあらぬかけさの初霜
 散のこる花かどろみし白萩の上よたきたるけさのそつまも
 夕より風さる渡るあしたにははつまも白しにわのまさこち
 紅葉にうもれしにわに此あさけ見ろむるまもの珍らまき哉
 紅葉ちる片山里の庭の面にけさめつらまをたけるそつまも
 夜を寒むみとくをさみれば我庵の軒ままろよたける初霜

長瀬茂平
 齋木芳流
 笹崎良風
 倉地敦親
 則安靜の舎
 同
 竹内澤治
 同
 荒木亭々
 藤井直彦
 前田薇水
 同
 田中續三

一五點

風さゆる枯野はいとも淋まきをけさねもしろくまもの置也
紅葉のちめあけたりとみるか内に早初まものれきにける哉
草の上の露の白玉まらぬ間もそや初まもどかはりけるかな
朝またさわつかにわける初しもはみる程もなく消てける哉
いつしかも野邊の千草は冬枯てけさ見え初るまものはつ花
風寒み人もどたえし橋の上に白くみえけりけさのはつまも
おさうめしゆるし成蘭朝日影さ、ぬにきゆるけさ初まも
小夜中に起出て、みれば初まもの月にもまかふ庭の寒けさ
ちりしける木のこか土まわくまもの白さや冬のはしめ成蘭
昨日今日四方の木のはも色付ぬ早初まものれさうめよけん
八千草のうつろふ野邊をわけ行て村々みゆる今朝のはつ霜
朝けたく葉屋の軒の煙にもきゆるはかりにみゆるはつまも
庭の面よまたささ残る白菊の花よも今朝はをけるはつまも

同 大塚 同 薄田 難波 藤井 荒木 鯨形 同 長瀬 末澤 高田 皆木
人 督 人 協 朗 彦 々 治 人 平 渥 藏 正義

一〇點

何となく野邊の淺茅も色付ぬけさふく風ままもやれさけん
起いて、有明の月と見る迄に庭れもしろさけさのこつまも
たくて田の跡り残したる稻の上も今朝初霜のれきてける哉
有明の月のかけかどみる迄にまはのねちどにわける初まも
有明の月の光どみるまてにまはのねちどにわけるこつまも
朝けたく煙にたよもきえよけり賤か軒にもたける初まも
朝またき霧の中みちわけゆけは秋の末野にわけるこつまも
うつろひし野邊の千草にけさはまも咲みたれたる霜の初花
天 今朝みれば積る雪かと思ふ迄こつしもしろし庭のさま
秋 朝またきこつまも白し有あけの月の影のとれもふはかりに
二〇點 有明の月かけさえて橋の上にうすくのこれるけさの初まも
木枯れ聲さへ絶えてさゆる夜の落葉にこねる庭のはつまも
木からしのささひ残せる紅葉にわけるも寒しけさの初まも

太田 間野 難波 同 正本 藤原 武藤 喜多 操山 岡 同 國富 同
政人 敬明 慶子 人 久治 安次郎 國光 島直養 山女史 千春 田 人 直香 人

うなむらか學ひの園よつとひきて教の草をつむろゆかしき
 あなうれし山よ柴こる賤か子も文のそやし道はたどりぬ
 大君のめくみにひなのてて迄も今は學ひに入らぬ子もなき
 様々に花ささいてん色みえてをしへの庭よりたつなてして
 明けくをさまる御代は學ひやにちこのつとそぬ山里もなま
 學ひやの庭のかきつよ撫子のすゑたのもまゝささうむる哉
 開け行御代の恵みに學ひ言のよそにおひたつなてしこの花
 いやまゑに皇國の光り添ふるなる花ささいつる園は此園
 末遂に國のそまらとなりぬへき若木もたふる園に有ける
 開けゆく御代のしるまはみゑにけり稚兒つとふ四方の學校
 若師もふみの園生にたひいてゝ教のつゆのか、らぬるなき
 賤の子も文の園生のをまへ師つまぬものなき御代の嬉ま
 さまゝに咲いてぬへき撫子も教のかせよなひかぬとなし

同 人
 難波慶子
 同 人
 間野敬明
 同 人
 太田政人
 同 人
 水谷巖
 同 人
 藤原高英
 同 人
 皆木正義
 赤澤竹園
 同 人
 植田敬風

朝な／＼學ひたははに開ゆなりたひささしるき難波のこま
 君か代の恵むたれひし教草つとひつよつむ子らうゆかしき
 朝にけよ色も香ひもまざるらんおしへの庭のなてまこの花
 教草となうるはしく咲にけりつみなたゆみ庭のをまなこ
 柚木こる賤か伏家のをさな子も學ひにさはふ世どう也ける
 幼子のきはひて學ふわさをまもみれば行末いと、たのもし
 稚兒も學ひのまどよつとひつ、道をいうまむ世とは也にき
 うつくまき花ささいてん明け暮る教つたつるにわのわか草
 稚兒の學ひどころは里ごとにいやます御代となりける哉
 開け行く國のまるしはをさな子の學ひ所のかすにころまれ
 賤か女も文のそやまにわけ入りて道ゆくふりを學ぶ嬉しさ
 竹馬にのる子もあらしまけりゆく文の林にわけのほりては
 たけ馬の遊ひにかへて幼子もふみのそやまつとそ御代哉

中島静廬
 同 人
 金原帷明
 同 人
 末澤鴨渥
 同 人
 長瀬茂平
 同 人
 笹岡良風
 同 人
 竹内澤治
 荒木亭々
 同 人

一五點

新女もすまじるおまも道まなふ文のはやまに入るる嬉しき
 直なるもよきもあまきも曲れるもさなき時の教なりけり
 ゆく先きも遠きを去へ路たどり筒學ひの窓に競ふうなる子
 うなわ子も文のはやまよわけ入て道を求るよとるなりける
 動きなき國のこしらも此園のかきつにころは根さま初けれ
 此園にたふる若木やする遂にくにを支ふるこゑらなるらん
 學ひやの庭にまげれる撫子のやかて千種のはなやさくらん
 大君のめくみの露になてしこのにはひこぼるゝこれの花園
 君か代をはきまつりつ、うなる子の文の林に遊ふゆかまさ
 露しけくかゝる恵みの庭もせにまはひいてたるやまど撫子
 君か代は教のにはのひろければやまは奥よも文とよむなり
 二〇點地、奥ふかき文のとやまにわけいらん道ふみ學ふてまめ也けり
 天、さきいてん色まつみえてちこ櫻教のうのにまけりあひに覺

藤井直彦
 同 人
 田中績三
 同 人
 難波慶子
 同 人
 間野敬明
 藤原安次郎
 岡 千春
 同 人
 鳥居藤一郎
 同 人
 喜多島直養
 植田敬風

追

一〇點

のちくいん人もあらまな千萬のわらへのかきり物やまはは
 空裏みうすくもりして紅葉のふるはまくれの心地こそすれ
 いたよける小笠の上にもふりなからぬれぬ時雨や木葉成らん
 立田川錦おりけりもみちはのまぐる、はかり風にちりては
 さらぬたにいと淋じき木梢にあめかどはかり紅葉散なり
 山住まなれまこの身も雨のことこのこちる夜と涙まかり覺
 音きよて時雨ふるかど出見れば庭に木のこの散よろ有ける
 時雨かど窓打わけてなかひれば峰のこのこの散よろ有ける
 吹きたろす峰のあらまに誘はれて時雨どはかりちる紅葉哉
 はら／＼と窓うつ音の聞ゆるは庭の落まのまくれなるらん
 夕されは高嶺のこすま吹風にまくれとてかりちるれちと哉

岡 直 彦
 横 田 知 範
 同 谷 人
 操 山 女 史
 押 阪 榮 平
 押 阪 勝 子
 鳥 居 藤 一 郎
 喜 多 島 直 養
 同 人
 武 藤 國 光
 同 人

飛鳥山あすをもまた夕風におめかどはかりちる木のこ哉
 木枯のさうふかま、にはらくと雨かど斗りちるもみち哉
 神無月しくるゝはかり小倉やま嵐につれて木のこちるなり
 小夜更けて文よび窓よれたてて時雨る、物はをちば也鬼
 曇らぬに時雨ふるると思ひしは軒のこすゑの落葉なりけり
 月のてる窓よ時雨の音するは峰の木の葉のちるまろ有ける
 時雨かどまどひて扇す袖笠にふるはこすゑの紅葉なりけり
 風ふけは時雨る、はかり音たて、賤か板屋をうつ落まかな
 木枯のふくかまにく、音高くみねのもみちはあめでふる也
 ふりまざる時雨とのみも思ひしを窓あけ見ればこのは也鬼
 神無月初瀬の山にくれなむの雨かどはかりちるもみちかな
 紅葉の風よきはひてちるさまはさながら雨の如くなりけり
 風さゆる夜半にまどうの音は去てふれる時雨や落は成らん

岡田長造
 同 藤原安次郎
 正本久治
 同 人
 間野敬明
 太田政八
 同 人
 水谷 巖
 宮川秀水
 藤原高英
 下村病痴
 赤澤竹園

村時雨ふるはかりなる音のして風にははの木のこちるなり
 時雨かどおもふはかりに我やとをれどなふ物は落て也けり
 時雨かど外面のかたをなかわれは木枯寒くもみちるなり
 吹く風に時雨すさゆく心地えてふりくる物はこのこ也けり
 あらし吹夜半にふりくるをどは去てぬれぬ時雨は木葉也鬼
 まくれかど窓押明てなかわれは風にちりくるこのこ也けり
 冬深えなりゆくまゝに山里はさながらあめでちるこのこ哉
 木枯の風よふかれて亂れちるこのこをあめで思ひけるかな
 雨戸打音をまくれまどまど迄風にきはひてちる紅葉かな
 村時雨ふるかとみれば霜かれのこのこの風の散まろ有ける
 足引の片やまはやし風ふけはあめでみたれてちるこのこ哉
 わられふる冬の山風ふきぬれはあめでひとまろ落葉まも鬼
 夕されはいつも雨も賤か家にもらぬ時雨や木の葉成らん

同 人
 高田高藏
 中島静庵
 金原雄明
 同 人
 末澤鴨渥
 同 人
 長瀬茂平
 同 人
 齋木芳流
 笹崎良風
 同 人
 倉地敦親

吹く風のさるふ去くれと思ふまで梢はなれてちるこのは哉
晴る、夜もあめかどはかり思ふ哉枕へ近くこのとちりつゝ
山寺の鐘のひ、さも去めやかよ雨かどはかりこのとちる也
吉野山峰の木の葉はちりにけり時雨とのみと思ふはかりよ
木枯にたえすふりくるこのはこる曇らぬ空の時雨なりけれ
まはらなる棋の板屋によもすから時雨る、雨は木の葉也
さのふより吹きすすみたる夜嵐に時雨の如く紅葉ちりけり
夢さめて庭の落はの音聞けは夜半の去くれとあやまたれ
たち迷ふ浮雲さらよ見えなくに去くれとのみもちる紅葉哉
村去くれふるかどれもひ出て見れば軒はに近くこのは散也
ふきすすふ朝けの風にはるゝと時雨るゝ斗りこのは散也
夜嵐にふきちらしたる落はをは時雨ふるかどれもひける哉
更くる夜よあめの降かど聞つるは軒の落はの音よ有ける

則安靜の舎
同 人
録形覺治
同 人
荒木亭々
同 人
藤井直彦
同 人
前田薇水
同 人
田中續三
同 人
大塚海誓
同 人

一五點

終夜このはちりくるたときけはさなから雨の心地こすれ
夕しくれ窓うつ音とたもひし之風にちりくる落てなりけり
木枯にさるふ時雨とをもひしは板屋ののきのをちは也けり
吹きたろす嶺のあらしに誘れて時雨とはかり紅葉ちる也
雨とのみれもふはかりよ音たて、もみち散なり山もとの里
村去くれ過に去後もたえすなはふりしきるなりみねの紅葉
ねやの戸よさえ入る月はてりなから時雨るゝ物は木葉也
夜もすから時雨るゝとのみ思ひしは風に散くる木葉なり
神無月しをれふるかと思ひ去は庭の木葉のちるに有ける
終夜まとうつ雨と聞きつるは峰のこのとちるに有ける
程もなく又時雨るゝと思ひ去は木葉ふりくる音に有ける
ふきおろす比良の嵐よもみちはのあめと降くる真野の浦里
夜もすからふれどふる屋の板はさしもらぬ時雨は落て也

難波歌朗
薄田協
前田薇水
竹内澤治
中島靜廬
水谷巖
難波慶子
同 人
鳥居藤一郎
操山女史
岡 千春
同 人
國富直香

時雨かどをもひまどへは村雲のさわく夕よこのとちるなり
月かけのてりろふ軒に音つれて曇らぬ雨どこのとちるなり

二〇點人、村時雨はれての後も音するは風にちりくるこのとちるらん
地、ふきすうふ風よ時雨の心地まてくもらぬ空よこのとちる也
天、時雨ふる音にたくひてたるまなく紅葉ちる也山かけのいは

追 加

色ろりし時雨のあめにならひけん昔たて、ふるよはの紅葉

冬季歌合題 遠山雪懸 川冬月

一正續

本歌身などふ物雨まよふ少くは秋風の色もよき地盤也
冬よも紅葉の音もよきまよふ少くは秋風の色もよき地盤也
時雨ふる音にたくひてたるまなく紅葉ちる也山かけのいは

逸見 蓬村

同 人

藤原安次郎

植田敬風

國富直香

岡直盧

水谷直盧

中島直盧

菅田直盧

菅田直盧

菅田直盧

齋垣内岡直盧大人撰

(非賣品)

廿八年 備作和歌會月並及冬季歌合歌卷

十二月

重 盛

月並兼題 閑居 霞

歌合兼題

遠山雪

川冬月

月前千鳥

恭賀新禧

併祈各位之萬福

十二月廿六日

明治廿九年一月一日

岡合源 千春
藤原安次郎
岡田長造

備作和歌會々員各位

重盛

一〇点 幾千代もくちせきるらん此松はきみと親とよ立えみをは
 春またてり逢し小松を流れてのゆく世は後に名を殘さけり
 心ねをたえもあへず岩の上おるる小松をたえれ也ける
 きみを思ふ心はいとく深ければくか返しても父をいそめぬ
 君あつあへ親をおやとま二つあき心をみち小盡まきるる
 而えれおもあら命を君の爲親のためとてえてまきみはや
 あまて世み親をいそめ雲の上は庭草嵐をふらぬまはれを
 すくからぬ親の心をさめんとでもろくも朽しこの小まの哉
 雲は上おとくあかせしをたれちねを諫す君の言葉なまけり
 くねをたる老木も似む一筋お立ちま小松は名を高くけり
 玉え死の都よりれま小松えし千代は八千代におはひぬる哉
 玉え死は都にあられま小松つをは惜ぬぬ人境よおなうける

横田知範
逸見蓬村
國富直香
田中續三
倉地敦親
谷本兌
赤澤竹園
藤原高英
金原惟明
堤鉦太郎
伊達半貝
伊田如水

いふしと此夢をはかみ藤川此なみよ小松此か々を籠るよ
 只ひとと誠此をいふおむねて早く小松をいれそてまけり
 聖ともいはせし身もわひぬらん親の心のまよふらぬ世を
 立ねはふ父は老木此かせありみあそれさまつも枯れ果よ鳥
 老木より留るす嵐にたえ兼てあそれさまつは枯れにける哉
 いるなれそるく見しき名を止置てさほり雪よ枯果みけん
 父けためあぬらさまつ枯れみまも操を千代お朽せまど鳥
 今暫し君まいまさそ見まつみお龍の御衣はひたさそまを
 世此中を君と親とみ境むくまど心一色にもれをさそかもへ
 小松た小枯をありせそ天つ日を父は老木もあほはさらほし
 人、あはれ此ゆつれ一本おれせそそ君か千年此かけなまじを
 三〇点地、千代をへて榮えんを此と頼みてま小松を随くおれおける哉
 天、ぬる雪みかればまよこ景色かへぬゆつれ操をあらそれお鳥

遠藤貞子
 水谷巖
 大塚督
 間野敬明
 太田政人
 植田敬風
 岡田長造
 武藤國光
 喜多島直義
 岡千春
 牧卷次郎
 藤原安次郎
 押阪榮平

追加

閑居歌

一〇点 夢此世をこれ多て住る柴れ戸を夢みせぬまてありれつ也
 人どえぬ見れや此軒おふる音此數も死さゆる玉ありそかな
 今は只さひしき庭と思ひまを垣根おみぬとぬあゆまかな
 里と係き腰か庵れいふをまいさくも降けけのあられ此
 世のうさ此へたてと植し竹垣れ小雀此上小ちるあ程きかな
 思ひきや世の音さかぬ宿なら庭れ小きくおあそ降とは
 訪ふ人も酒なる賤々あはらやを音りきて行玉あらせかな
 見ひすみえ人おぬのみ々霞さへま此ひてふるも庭れ静々死
 びるさへも柴此戸ぬさく人えなま軒の霞のまどはかりま
 世をさけま賤か庵まゆぬへく音なふものあらま也々々

岡直廣
 押阪榮平
 鳥居藤一郎
 田中續三
 藤原安次郎
 伊田如水
 足羽由清
 正本久治
 三宅律藏
 難波歌朗
 大塚督

夜もけあら人もとさぬ柴此戸を音つれて行く玉ゆられ哉
 世をきても物静かなる我宿をあらをふるまもあどろわれ覺
 世のちりをそげ去深山此庵も猶ねとめれ玉ゆるわられ哉
 ひかりそそ深き宿をを立まなくさめ顔みゆるわられ哉
 ま此庵をへま去垣たさくけうへま今朝ねとめれ玉ゆるわられ哉
 隠家のまつ吹るせのおと絶て小きくのうへま今朝ねとめれ玉ゆるわられ哉
 とふ人もなれば本かくれ此香宿を深とづれ顔みゆるわられ哉
 松風此聲しりまきて露かけ此柴此戸よりその理れなきけり
 人訪ぬ樹の板やみねと立てる理れぬる夜はふしうたせけり
 ひとをそむ我柴の室も隔てなくかどめれて行たまの理れなきけり
 獨居此ぬや此板ををこの夕にぬくぬくはわ程なきけり
 獨すむぬやの板ををぬまのむさま／＼ぬくぬくの夕かな
 冬さそを語る友なき柴此をみねとなふも此をあらそ也けり

石原才太郎
 難波慶子
 水谷巖
 間野敬明
 遠藤正心
 伊達半貝
 植田敬風
 高田高藏
 皆木正義
 藤原高英
 岡田長造
 武藤國光
 門田東一郎

たたつ瀬は音しりゆりて賤か家よくたくるまをを徹ぬる也
 而られふる音ともいらて柴此戸を人たどひくと思ひなる哉
 ろくれら此淋去此冬の夕くれれおかとつれてゆく玉ゆられ哉
 さつね来る人めも草もかれ去庵の庭おかとなふ玉ゆられ哉
 をさこれえに目さめて聞はひとまね此枕おひく小夜霞かな
 ろ去ゆしき浮世ををそよばす庵も夢やけり程ぬ小夜霞かな
 而程世へおとせまをけりま人もなき栗ぬきの賤か庵え
 横此戸をさく死慣ぬる椎のみと誤されてもきをあられぬな
 竹垣み世れうさぬしを任せてはあられ此音もよせみ聞ゆる
 二〇点人、静けきを心や住るかくれ家はぬをせけおをもてひまあり覺
 一〇地、此かれをむ柴の庵をまえ／＼も音なふものはぬをせけけ星
 天、あまの實をそや落えま／＼静なる軒此ひまふちるわ程れ哉

谷本寛
 倉地敦親
 笹岡良風
 喜多島直養
 逸見蓬村
 横田知範
 岡千春
 牧卷次郎
 篠山正喜
 太田政人
 押阪勝子
 國富直香

追加

166

三

やふ人もなき柴け戸を夕〜打かどろかすぬまのられぬ

月前千鳥

一〇点 浦風は聲静まりて月のけちち空をけす此みゆる夜半かな
二〇点 浦見瀉浮ね床つささにて夜ぬ〜しえなく友ち空をかな
見渡せば月けあやめも遠しる〜む波間みちやりなを也
そまけ浦月のけさえて淡路島かよぬち空をけ聲けさむけさ
月さゆる冬の夜寒をさむみるも入江けちとりまは暗にけり
大空に一むらさきと暗わたるかけけそ月けくるとなをけれ
瓦やく今戸けつた少月をえま水もと空保くち空をなくなら
わかまらた波路をるち少月さえて通ふち空をの敷も讀るゝ
そまけ浦なみ間み浮む月けをけをけをみ懸てち空を暗な
てる月け光も寒くさぬ渡をさ空をなくならそまのうら見ぬ
ぬ夜崎の岩かぬひたと夕月けはうらむてさやりなくなら

岡直廬
篠山正喜
牧卷次郭
逸見蓬村
喜多島直養
笹岡長風
倉地敦親
岡田長造
赤澤竹園
藤原高英
金原惟明
高田高藏

淡路島つきの世汐にむ約千とり友よひかえしきき渡るな

何となく心も寒く聞えけりつさみたれてなく千と里ち
村千鳥月けひ〜りみあ〜れ須磨此浦へをささ見たる哉
月さゆる隅田川を友をむて寒死夜す約千鳥なくあり
友をよみ妻をさひつゝ小夜千鳥いつことを去て月又なく聞
小夜ふけて月をみわさる海原を通ふちと里の聲けさやけさ
月かけてくぬなきてりも海原をかよぬ千鳥此聲けさやけさ
波風もぬぬれなら程も暫くも月の出しはもなくさどるあな
照る月にもよれる雲けけけならて浪け上わある千鳥也けり
一五点 ちれのこる芦れ葉末少月さへて川風をさちと空をなくなら
みとる死の磯うりなみの音をねて傾く月にちとどなくなり
沖の州み汐やみちけんてる月に磯へをささてさと空を暗な
月けも水けるえりさゆる夜け浪なくさけて暗ちとり哉

伊達半貝
遠藤正心
足羽由清
遠藤貞子
間野敬明
正本久治
難波慶子
難波歌朗
大塚督
水田谷一巖
太田政人
藤原安次郎
堤鉦太郎

かせ渡るよせ此夕なみ音をえて月影さむくすせまなくも
 小夜ぬけて月さえ渡るなみは江此其苦やふすとまなく也
 うつ浪此高し此濱のどもちせま友よひらねて月小なくも
 清見潟とせざる浪此おせぬけてかきふく月にちどまなく也
 すほ此浦さえたる月まほくかれて友をふちせり濱傳ふらん
 うつ浪此音をへふけて照月の明石けうら小なくすとまなく也
 夜ま此浦のま此苦や小霜さえて更を行く月小ちとりなく也
 二〇点人、ふれ此浦かせ音たえてぬけゆく月みすとりなく也
 地、まえ渡る月此光あけみえてなと路えるかますとりなく也
 天、月かたえそらふと得りて隅田川夕なちせまあさむむ也

植田 敬風
 皆木 正義
 武藤 國光
 門田 東一郎
 田中 續三
 國富 直香
 押阪 勝子
 岡本 千春
 鳥居 藤一郎
 横田 知範
 岡田 直廬

冬季歌合

追加

舟とめて我待をれはつさけれさま出此磯にちとりなく也

遠山雪 (懸賞ノ分)

左勝 朝日まのかくぞう外あけせま雪もてみるく不二の遠山
 右 白雪ふ埋もれて天境中く、おあさ此高嶺を見るへる置けれ
 右埋もてと云そえあらそれおけまといはて叶はと左を勝とせ
 左 此朝けふく汐のせも身はまみて絶此山白くゆきふまはま
 右勝 ふさあれし夜わせもけさ雪静まりて雪小明ゆくをすの山端
 夫も左右ともさまたる難もえへらねと右いさゝかまさらんか
 左 朝けあく煙此を小見ゆる哉をち此高根此まつ此去らゆき
 右勝 かまなへてかくるもれをす方の高根をゆき小顯れ小免
 夫も右をかさと返してふかたふかたの共れを小顯れ小免
 左勝 ぬみまけて花を尋ねまあとも無く遠山此をみつもる白ゆき
 右 夕あらし静ひさつ關今朝見れをち此高根みゆ死を降さる
 夫も左右とも上此歌みえ歌ら遙にねせれりされやいさゝか左まらん

横田 知範
 國富 直香
 堤 鉦太郎
 岡本 千春
 逸見 蓬村
 植田 敬風
 藤井 直彦
 岡田 長造

左持 さらしけやう旭たぢも切みらんあきの花咲くをちれま山 武藤 國光

右 炭のまの煙もけさはあやなはて遠方や海もぬれるまの雪 田中 績三

左勝 見渡せ雪まうつみて久方れくも井小まりぬみ一は白空海 喜多島 直義

右 いついかも降積る關さち方の峰の小まつみうらまらゆき 皆本 正義

左結 しら山なりてもどかみはるとは山やせんお事もなかるへきを右もゆれのあきだみ

よすれそとは山みままといひ依てひなりを勝とけ

左 ち方此峯は海なるおゆれを積りよく寒を成まてするらん 赤澤 竹園

右勝 旭たけよそを海をゆく句ふらな遠の高ねをわきにうまれて 藤原 安次郎

左三 け句のまをたり右をわさどそ

左持 吹風の寒もいとしまざりけりとは山此もみ雪けみへつふ 金原 惟明

右 いやどはさあき此高根にあき積て伯耆路寒くみえよける哉 倉地 敦親

左えなんもみけれと光つらよもあはえは右も結句けさそとえけりなどのまてたまふ

も持せぬ

左勝 しのめち横雲とけみなかえええ遠此高ねは雪よそ有ける 押阪 榮平

右 ち引れ山邊はるの小見渡せばあのおぬらら白白雪はふる 水谷 巖

左持 朝またき遠の山邊を見ゆさせえかのこ海たりま雪えぬり鬼 難波 慶子

右 ちは山は深雪ふるらま今朝を霜高根をぬま此寒くも有るな 遠藤 貞子

左 結句のまをたり右は結句身に持をみぬるなと有たまも持とけ

左勝 ちは山の木々を積りし白ゆきは都小まぬなりめなまけり 遠藤 正心

右 都よりかそかみ仰く比良の山ゆれ積けさええはさりまみゆ 間野 徹明

左持 久方此雲井はるかみみわるかか花かしまらぬ峯けしゆき 正本 久治

右 美吉野を隅なをゆたみすりもれ何處を果とみる方も那れ 伊達 半貝

右 ちもさしたるけ下の那を

左持 見渡せば花かどちもひまたふ哉や得さ山へ小りもる白ゆき 太田 政人

右 常も只かぞる也け氣と波山もさだかまみゆるけさ此白ゆき 鳥居 藤二 郎

左勝 眺むれを富士まもまゐる景色有ていと面白さと得山の白さ 笹 岡 良 風

右 袖さひきけさ此風のうれし死ををち此高根みつもる白ゆき 兼 田 協

左死 かねてもはへれと心とくをさ那ト右はきこ難し 大 塚 督

左勝 久方此をまよまひてとゆる哉よの高根みりもる白ゆき 篠 山 正 喜

右 朝日影いつるを待て眺むれを雲少はあらて由死のとはを 門 田 東 一 郎

左とろしちやと 有明たつ死の光やひややみんやは此高根につもるまら由死 難 波 歌 朗

右 途にもみ行尸はみゆる哉やほき多加根本わ死此死れよを 谷 本 寛

左も同じしはや也 伊 田 如 水

右勝 都人來てもみとかま山さやの高根にりもるゆ死のしろさへ 足 羽 由 清

左持 降る雪も朝な〜みゆほへてと得山しろくなまふたふ哉 石 原 才 太 郎

右 初雪やぬとそめぬぬん打いたす遠山ゆれ〜ゆきみゆれえ 三 宅 律 藏

左 ぬもをさあけれと前にはやせとぬへまされと優劣えあるへま 押 阪 勝 子

右勝 我の庭もゆれをぬる程ん白雪を遠山まれもつもるものゆえ 國 富 直 香

左 亦も亦もさなま殊ふひあり此御歌を歌比詞ともをはえはへ程す

川 冬 月

左勝 早瀬川にまらり波此音ふけて月さぬ見たるる及のさそけさ 岡 千 次 春

右 ゆ死かよふ人もかれは〜いさ程川水の音さぬて氷る月かけ 逸 見 蓬 村

左右とも〜して申そひねは〜へいねとひなをたけ高〜

左 落葉せま柳は〜とれかけみぬて河瀬みこはる月のさむけさ



右勝 寒風川をまじなく音も身もなみて波間ふこ得る冬のよの月 植田敬風

左落葉せしといふ詞なま依てみきをかすと 横田知範

左 夜舟みく能れ音ふけてはみた川浪間ふか得る月れさむけさ 堤鉦太郎

右勝 千鳥かく佐保川かせ身もまみて浪間み水もふゆれとの月 喜多島直義

左 水もまよる難はなきれとこきんさくあゆまへ 金原惟明

左勝 千早ふる宇治の川浪ねとてぬてあしをてらむ月の寒けさ 三浦春樹

右 夜もわたるかけ茶流まそあま日川氷を月のまらみふあて 笹岡良風

左 右はいとむりかし死ねなまなま左を勝とせ 水原谷

左 川水は流の上をてまわさるうけさやかなるぬゆれよれつた 田中績三

右勝 水どりのさざり川瀬お月さえてゆれさきにやどる影の亮々さ 伊田如水

左 右れうな少ま寒けなり 鏡川うつる月うけいどさえて浪みうかひしたまかど境見ゆ

右勝 はや瀬河なかるく水は音なぬて水もみきはに月をうつろふ

左を係結たへへ右を勝とせ

左勝 水鳥の羽音ききさへ身みしみてよどの川瀬みあなる月うけ 皆木正義

右 誰とてあ共おなら先ん人もあらま野川お氷る冬れとのつき 難波慶子

左勝 水と右れうを係結たへへ依て左を勝とせ 武藤國光

右 夜を寒みとどれ川瀬は音さぬてみきえまあはる月れかけ哉 岡田善長

左 左右ともささる事もえへらねと左れた少ま打あかりたるあうさね 押阪榮平

左持 大井川流るる水もこほるまてぬ見たる月のかけるな 藤原安次郎

右 水を涙も今こほらん斗りま月さえ渡る夜半れさむけさ 藤井直彦

左持 夏の日れあつさえらひま宇治川よてむらゝ宿る冬れ夜の月 間野敬明

右 かとほるえ漕さゆく能のおせさえて汀はみはる冬れとの月

左二の句猶あるへま右音羽河といひて又能れ音と云ふを重ていへ依て持とせ

左持 ぞこ死までぬし今宵此月々けえ夫はる小川小宿をぬる哉
 右 てる月を見るさへ寒き冬なるを猶も川瀬おかけ此やど置て
 左持 玉川はみつもこほりて肌寒くもえりさるふゆれと此月
 右 ぞみさ河汀おうつるのけさへも氷里て見ゆるぬゆれよの月
 左 玉川はみつもこほりて肌寒くもえりさるふゆれと此月
 右 宇治河は細代は浪はあへり高きたひひきれてし号は是此月
 左 左また係結さへ依て右とらさといは
 左持 初まほもる水音さえて寒きも瀬をみ流るゝふゆれと此月
 右 ゆくみつも河岸は柳もら果実を霜みやされる月の寒むけさ
 左 左四此句韻をみこほれるなどありみし右二此句おたやうならも持とと
 左持 ちちとすする小川の岸のさへなみ小清く宿れるふゆのと此月

遠藤 正心
 太田 政人
 遠藤 貞子
 正本 久治
 倉地 敦親
 門田 東三郎
 赤澤 竹園
 薄田 豊協
 水五 謙
 足羽 由清

右 すみた川清きなかれも氷るらん光さぬ小まぬゆのよのつ死
 大 塚 督
 左勝 さやう小も宿れる月を流さまど佐保此川りらみゆりどち免
 鳥居 藤一郎
 右 冬れ夜も月此光はるえらねと川をみあれてみゆもさぬぬる
 石原 才太郎
 左持 砕けてえかけもどめぬ荒川や出入るゆき此そら小氷れる
 篠山 正喜
 右 なかれゆき水もさへぬてかし鳥は趾あらえなる冬のと此月
 難波 歌朗
 左右ともきへえず
 左勝 冬れ夜は河瀬はみつもどちりれて氷を研くゆきやけ死
 谷 本 寛
 右 大井川さひし死ころえぬゆれとの月ははみしとら次り後士
 三宅 律藏
 右のらえ何とも死へぬす左もとまどおはへぬと右小はまさとぬへま
 左 谷川の岸の柳もかれえててつさるけのさむくも有かる
 押 阪 勝子
 右勝 角田川清死あかれのを志捨て小やけき月此影をうけぬ
 伊 達 半其



齋垣内岡直廬大人撰

(非賣品)

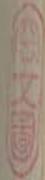
廿九年
一月

備作和歌會月並歌卷

炭竈

兼題新年朝

雪中早梅



雪中早餅

兼 墨 藤 辛 博

炭 竈

一目 謝 芥 味 煙 會 且 並 煙 卷

廣世内岡直胤大人題

炭 竈

一〇点

かき山小炭木こそたき冬くれえあさる四そくも立々ぬり哉
 雪ぬれは今を時とや山かりの炭やくけふ里さて寝ふる見ゆ
 と寝ゆふえ雪け此雲やまかぬまで煙ぬきそぬみねの炭かま
 年をひきえるま此先えあふえれを雪と里けふる小野此炭竈
 賑えへる世小すみあまの煙此み雪此なか小も立此ゆるかり
 炭あま此口やあきけんたす昇るけふるおくもる小野山の峰
 はみあまの煙たぬせそ大原のさとえそあら霞むはかど小
 さなひける雪けの雲と見るま玉煙たつあまみね此炭かほ
 さぬ渡る月もおろるお見ゆる哉炭やくらまのけふるさち筒
 炭あま此口やあくらん小野山此あさりおぬらく煙さつなま
 山人此こさゆをそさもたられ覺さひまけふる峯此炭あほ
 山ふかき雪け此雲たぬなひくと見え炭やくけぬも也けり

横田知範
 同 人
 高取長貫
 鳥居藤一郎
 同 人
 太田政人
 同 人
 同 野 敬 明
 同 人
 難波慶子
 同 人
 水谷 巖



奥山はみねをりある炭のまのけぬまは常少たぢの保る也
をまへて雪をぬれども大原や煙にまるとぬのそみるほ
自妙の雪えつもれと小野やほの炭やくけふまをぢゆる也
降り積る雪の中も炭のまだけけふたなひく小野のやほ里
炭窟は細死なふをいれちかてあえれ此世を送るやほひと
山巖のからき見えども見ぬ煙ゆきは死みぬのそみるほ
冬さむき雲はあをまて炭のほけぬまをしろく立保る也
けさみれえをし保れやほま真白まて雪みくほなま峯は炭窟
炭のほけ細死けふまを立保る雪けぢをもとをひける哉
たぢの保る煙もけさはたえ／＼み雪になまゆく小野は炭窟
やほしりの細き魚の死もしられぬたぬ／＼けふま峯は炭窟
小野やほけ雪けぢ空み一すぢは炭やくけぬり立保る見ゆ
うほくも保嶺少一すぢのうれたるも炭やく窟けぬま成らん

同 人
難波歌朗
石原才太郎
三宅律藏
押阪榮平
押阪勝子
馬場温夫
同 人
伊田如水
遠藤正心
遠藤貞子
國富直香
岡田長造

ぬち保る煙のそみるみたれなま嵐ふ死そふ峰はすみかほ
山まま保る煙はみゆるなま谷は炭のほまをまきらすし
ゆくと山雪けの雲とたもむまはまゆか炭やくけふり也けま
炭のまの雪まいろそぬうまけふり霞ども見ん小野は山もと
白妙はゆぢ中とま一すぢはぬり立保る小野のほみま
たぢ保る小野の炭やぢ夕けぬり末も雪けぢもと成らん
山のおくまやくそみ窟は煙こそ雪けぢ空けまもとみえけれ
立保るけぬまをひしく遠山は雪みほきるまをぬのそみ窟
深山木を穂まつもまつゝ賤の男もそを焼けふまけぬも立也
降り積る雪の中もそは窟のゆりとまらるま峰はけふまを
そみをやく窟は煙をし保山雪けぢくも保るまをそみる
常よりも寒をほそらんあさ夕おけふりまえせぬ谷はみ窟
雪ぬまき遠山はけみけぬりまつ嶺のそみ窟はまやさくらん

武藤國光
同 人
河本郡平
澤本金吾
喜多島直養
同 人
田中績三
同 人
笹岡長風
丹下正繩
同 人
谷本 兌
同 人

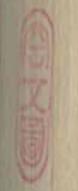


七重八重雪煙をつもるかく山にたのほみまの煙たつらん
村まくれをれて此後に小野山にけなみやく電のけ煙をなつ也
遠の峯をな引渡るをみ電のけ煙をえくるもふかひぬる哉
見わたせを遠は嶺ある雪間ををけふもたつ也をみや焼らん
霞かとおも煙はかりみすみ電け煙をなひを小野に山里
炭をまけ煙をもなきは中へに見はえを電煙雪の積をて
人かけの見えぬみ山を炭をまの細きけふも電煙はれおける
櫻すみやく小野山に電煙をを雪けけくもとみふかひ小鳥
をま引け峰またてたるをみらぬのけ煙をさひまを冬に山里
小野山の空をさなひく白くもはそみ焼く湯のけ煙を成らん
ははれなる賤くさつきを見はまける煙も細き峰のすみかま
雪はれて山をさすの係るをみらぬ煙を色こく也まを電煙
こくかひみさく炭電のけ煙をを雪けけ煙と見えぬかか電

門田東一郎
銀形華山
末澤鴨涯
小竹歌郎
同
中力一二
藤原高英
内田輝太郎
長瀬茂平
赤木美陽
末國正民
中島静庵

冬を春得てはまかりなり山里を炭やけ煙をたな此なり筒
奥山にみねれあらまのなをととややく炭かまの煙たなひく
とをこめま外山あらまのなをととややく煙おきはふ小野の炭電
横雲はるるど見しえ炭をまけ細けふの立おをける
山里にまゆかあつきれあらえれて哀れおそ見る峰に炭か湯
あつらしは細けけふの登れとも淋まをまざる峰に炭か湯
あつむれお只白あへは雪のうへお煙さひしき小野に炭か湯
ふる雪み心せかれてい捨てらん煙もしるき小野のそみる湯
くれゆく雨おをひきて炭を湯のなをさひし死冬の山里
年さむ死えるまもみねて山へえやく炭をまの煙たのなを
とふ人のたのほし山に此ころはさえにふつ也嶺にそとか湯
白妙小ゆ死ふつとる遠山おけ煙をなひなり樹にけみま
冬されえ峰を真まろ雪をて炭やくなをまのなる也

同
篠原吉爲
倉地茂郷
同
則安静此舎
同
赤澤竹園
同
植田敬風
同
久山壽野子
同
藤澤茂登一

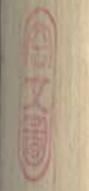


雪ふかみ道もうちれま小野山小誰のさくらん峯にそみるほ
 炭かほけけぬり高くも登るなり末を雪けけくもとなるらん
 すまかほけ煙み空おたなききて冬を去ひまき小野け山きと
 炭かほけけふりはしるく山里に空まも高きとなきけけけ
 炭籠けけぬまきはふ夕には雪けのくもとやまたれけけ
 人氣なけ深山のたみけすみるほけ細る煙をあらえれまける
 白雪けけも雪をそれと見ぬねとも煙みまきき峯にそみるま
 小野山み時雨けくもの寝るまど見まは炭やくけぬまを
 立に存る煙小それとしられけ雪にうもれしめねけ炭かま
 白雪けふまつもりさる夕くれも煙みまきき小のそみるま
 ぬる雪み道えどかねと一まをけ煙小けるけ入瀬のそみるま
 をむ人のたままともなき山けかみ立るけふまを炭や成瀬
 立出るけぬりも細く見えま雪をまけけるみねの炭かま

金原惟明
 原田元直
 小林盛章
 皆木正養
 藤井直彦
 同人
 金原惟明
 末國正民
 赤木美陽
 中力一二
 門田東一郎
 篠原吉一
 倉地敦親

みやま木は雪ふうもれて炭かまの煙小まるさ大それたさど
 炭あまけ孫そきけぬりに賤の男々世渡るまほけ哀をそま
 白雪ふうもれはつれと炭かほけけぬまにまき小野け山里
 越えてくる春けやなりま近なれえけぬまを霞む峯け炭かほ
 筑波山真一ぬみみえて炭かほの煙をゆけぬあらははまにけ
 炭籠けけぬまなるらん春もな不遠山のはふつきけかそむえ
 二〇点人、冬なるらと孫山の端け霞めるを賤く炭やくけふまなるらん
 地、いと細くさゆるけふりふまけけりあえれ炭やく賤く心も
 天、春もぬた遠やほけへの霞先るは嶺みそみ焼きぬまなるらん
 追加
 そまかまけ煙もけそまきまぬ高嶺真白に雪けふれま
 一〇点 吹く風もかのりとあけて初日かけ匂ひ出ぬる香さけ長閑さ

國富直香
 藤原安次郎
 操山女子
 逸見蓬村
 同人
 岡田千春
 岡田長造
 岡田千春
 高取長貴
 岡田直廬
 逸見蓬村

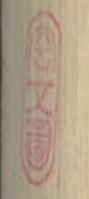


君の代は長閑けき年や、まゝは嶺御園に田鶴は今朝は初こゑ
 てしのなる初日と共にとけきは年さつ今朝の心なまけ
 さすへる年此朝日は明くけ御代は光れまそひも
 保のくくと明るみ空もれとかまて今日新玉のどよまきま
 新玉はとまのはまめは朝日おけ心もせらみえれわあるかな
 今朝はもや人の心もあらたぬの年をむかへてうれまかり
 新玉のどまははしめとまめはへて君の代祝ぬ今朝は嬉ま
 にはどりなぬ先とり立出て年を迎ふるあゝうれまも
 てまの保る旭はひか長閑くも年のまめとなりおける哉
 新玉代年たつけさはうなる子此遊ぶをかさもれどけかり
 初日影ぬた山のを出なくにしるしれみ旅なひくのどけさ
 かつ日影とと坂昇るおはそらおみ代ゆゑなる色えみえ
 限るな代御代の姿と見はまける豊坂のはるけさのまつ日お

横田知範
 同 人
 高取長貫
 操山女子
 太田政人
 水谷 巖
 難波歌朗
 石原才太郎
 三宅律藏
 押阪勝子
 馬場温夫
 伊田如水
 遠藤正心

朝まさきをひ若水にれどなる千代の心もうちぬるかな
 浮雲を箱根れやまみをさほりてははる初日かけ長閑ま
 安らけぬ年やぬらぬ四方の海けはは汀にとるなみもま
 てまのはる初日かけは長閑さは治る御代のまもま也け
 新玉は年のまま先お大みまゆゑかおなひくけまの嬉し
 吳竹はひととれはどおま出る初日うまぬ年まきみけ
 あら玉の年ささへり君の代のひらま長閑は朝日をそなり
 新玉は年たけけさはつ風おなひも御旗はけはのどけさ
 新玉は年たけけさはつ風おなひも御旗はけはのどけさ
 新玉のどまたつけまは遠近は屋毎はけおきまおけ
 明き御代はむかりはてま地ひて登る初日はかけのまどな
 とへみまて夢路を去年はへたてにてけぬ新玉の年えぬ
 うなる子も老も嬉まかお玉は年たけけを迎へつるかな

國富直香
 同 人
 岡田長造
 武藤國光
 河本郡平
 澤本金吾
 喜多島直養
 同 人
 田中績三
 笹岡良風
 丹下正繩
 倉地敦親
 同 人



新玉のとも立かへるゆけははは神代なからの心地をそれ
老の身もけきを忘れまはぬ哉治る御代のとしのはまめを
新玉の年のはまめは朝空に千せせをこめて田鶴をそくなる
ゆけ玉は年をちかへる今朝えしも空さへいとも亮か也を
立かへる年のまめは初をらみにつる旭はかけのれどけさ
どぞの音も起出て見れ物皆のゆけままをさる年をきに鳥
新玉の年をちかへるゆけままを千代を清く田鶴をなくなる
空清み松よく風はしつゆをて年たすへる今朝はのどけさ
新玉はとま光をほけくどあけゆく空もゆつみえにけ
れどけさを何ふたとへん新玉は年をちかへる天つ日けけ
新玉は年をゆけさはえみまもみ國は空をゆつゆふくらん
立かへる年のおまぬの大をらにたのあき渡る聲のれどけさ
明けも治る御代はつ日るけあふもけさあそ樂しがりけれ

篠原吉一
同 眞 人
谷 本 五 寛
門 田 東 三 郎
末 澤 鴨 涯
小 竹 歌 郎
中 力 一 二
藤 原 高 英
赤 木 美 陽
未 國 正 民
中 島 靜 康
同 人
篠 原 吉 爲

久方け雲井はるりおなを田鶴は年をつけさを祝ふをらん
ゆけ玉は年をつけさの心こそうれまき物れをさなりあれ
年たてまいつる朝日もうらうらに先あらぬゆる空は色をあ
れどけくも年をちかへる大空に朝日ははりてたつなき渡る
わけ初る日けねれりと長閑きは豊々を御代のまると成關
新玉は年をゆけさはえまそぞの聲も嬉しくきかえけるかな
年をてま千々此物もをらさなれなく難の大をちかえて
新玉は年たつけさの嬉しさをたえまこゝろに止めてまかな
ゆけ玉の年をちかへる空みままのはる光のどけきゆさひまはかけ
新玉は年たはしめのあさはけまをゆくゆき雪はままのぬ
なくまつた聲もたこえま新玉は年たあまこれのどかある哉
日は御旗さくくさけてあまをまも年た始を祝ぬぞれま
新玉の年たちかへるあしをまも千代を清くたのそをなくなる

倉 地 茂 郷
赤 澤 竹 園
植 田 敬 風
同 人
久 山 壽 野 子
藤 澤 茂 登 一
下 村 病 痴
金 原 惟 明
同 人
原 田 元 直
小 林 盛 章
皆 木 正 義
藤 井 直 彦



一五点

門松みどり此内ふゆとみして御酒くみかそそさの嬉さ
むもそなき御代は歳と仰く哉としたりるさばあゆむ日影を
老の波くるどもえらて新玉の年さつけさそうれしかるけり
身小つむる老も忘れて新玉の年さつけさそうれしかるけり
天地もゆけゆく年どもろ共ふあられたゆりぬるけさ此長閑さ
新玉代年さゆけさそむらつをみ登る日かけもれどか也けり
新玉代年たけけさそ老の身も若かへりたるささちこぼすれ
あし田鶴も年たつけさをみとほきて舞う雲井小聲は聞ゆる
新玉の年たけけさそあまの娘もあまの娘もあまの娘もあまの娘も
新玉代年さゆけさそや朝日けけけのささつけさ
千年ぬる庭の松さへ何となくとしたけけけのささつけさ
諸人のこころもなまそ新玉代としをむかへてのどなるるる
新玉のどなたつけさの初日けけけの御代の色そそええ

同人
藤澤茂登一
久山壽野子
則安靜比舍
末國正良
長瀬茂平
同人
藤原高英
河本郡平
武藤國光
岡田長造
藤原安次郎
伊田如水

二〇点人

新玉れとしつけさそ何となく人此みよるも代とけかり
あら玉代年たけけ今朝は嬉さそは老もうなぬもかはらそそ
れれか身の老ゆるとえらて嬉さそえとえたけ今朝此心也
地、身み積る老は數さへわきられて年さ後今朝は先さうれさ
天、とえたてえ心からにやさえ昇るあさ日影は昨日にも似ぬ
追 加
何となく老のあさるも時めくはとえさかへるあまた也
雪 中 早 梅
鶯れこあもちもるる雪はあらし梅は下ひもえやとけまけり
白雪れふるきゆりたけ梅はな春のささそ咲いてにけり
春まらさ梢のゆきえふりけれとゆあまを句ぬうめの初はな
近ける春をもあなて梅のえな雪のうちとえさきそめみけり

太田政人
岡千春
同人
難波慶子
赤木美陽
間野敬明
岡直廣
横田知範
高取長貫
操山女子
太田政人



春を涵みて雪此中よりふさつ三つ梅はえつ花咲そめまけり
 ぬりつもる雪の中と梅の花春をもまたてさきそめおけり
 ふりりもる雪此中にもさきにけり春をとなほの垣は梅か枝
 ぬりりもる雪此中にもさきにつまき春を隣はう光みはぬなり
 春涵み死雪のうりめいさねと梅は初を薫り出小けり
 白雪のぬりり中みひもとて春とさき小梅ををるなり
 春涵みさ梅のさくとは白雪此中とりもるるををりお捨てり
 梅か枝も心小春やいぼくふん雪ちるまどおかををりおめけり
 雪の中小薫りゆかまき梅は花をるをもまたてはころひに免
 降る雪小色をさそひて梅は花をるをもまたて咲きみはひ免
 白雪のぬる木の枝小四つ五つはるをもまたて梅さき小をり
 二つ三つ雪は下枝小さきおめてるもまたて梅は梅のさけり花
 遠ららぬはるをも涵みてさき小けり雪よをり梅梅のはり花

難波慶子
 石原才太郎
 馬場温夫
 遠藤正心
 藤原安次郎
 岡田長造
 同人
 河本郡平
 澤本金吾
 喜多島直養
 丹下正繩
 倉地敦親
 未澤鴨漕

垣根涵て春えさぬら一雪此中お梅のはつえささ死おはぬ也
 ふりちつみいつれを花を白雪此春はさなる小にはふ梅か香
 ぬりりもる雪もいとて梅は花春をとなほよさき初みけり
 春涵たえさ死ねくれんと梅は花雪の中よりかをりおめけり
 ぬりつみし雪此ををりと思ひいと冬木は梅はさなる也けり
 雪風みたくくさけさかをる也えるの隣はう光やさきけん
 ふりつもるぬ雪此中春涵み咲をめおけりう光はは花
 白雪はまらふる年此ませの内み先さ死をむる梅のさつはな
 我宿の冬木はうめのさきまをりおくる雪も花とみそみ光
 鶯も涵みうちどけぬ雪の中小春涵みさへをみはふうめか香
 時ならてさき小けらえな梅の花雪の上ふくおせかをるなり
 ふりつもる雪此中とりかをる也えるのとなほの梅はえり花
 梓弓をるまたて咲く梅はぬはゆ死此中おも香やはかきる

赤木美陽
 末國正民
 倉地茂郷
 則安靜比舍
 赤澤竹園
 原田元直
 皆木正義
 藤井直彦
 植田敬風
 同人
 倉地茂郷
 篠原吉爲
 中島静廬

一五五



つひ雪を拂ふ朝のせつをるなりをるをもまらて梅や咲たん
 はるをまゐてはあつむを先と梅の花梢に雪も香まにはひ筒
 つひゆきの下枝に梅はさき捨てて冬ものどけき心地社すれ
 ゆれば中よこそあゝの梅を咲かたりま近はるのまを成關
 ちくひその年比初音小後れしとゆきの中よと梅はさきけん
 春をゆきて梅の初花さきぬとは知らてやゆれば降懸るらん
 をへて世みさだた梅は花なれを雪もはひて咲初みけん
 ささかけて句へるもれを梅は花ねたくも雪は降うりむらん
 二〇点人、何事もいゝみ行く代に習ひつゝゆきふる年まうめはさき
 地、もるもなは遠里小野はうめは花ゆれば中よりまはひ出小鳥
 天、雪比中にさき咲初ぬらまゝいりしと春待窓み梅か香をばる

追加

君か世はもるをやいとくう先は花雪比中よとさだ香ひりゝ

赤木美陽
 藤原高英
 倉地敦親
 丹下正繩
 高取長貫
 岡千春
 逸見蓬村
 同人
 中島靜盧
 岡千春
 末國正民
 岡直盧

山崎文庫
 山崎文庫
 山崎文庫



齋垣内岡直廬大人撰

(非賣品)

廿九年 二月 備作和歌會月並歌卷

兼題 政、子
早春柳

山家殘雪



三月分月並題 余寒 遠村霞 關路歸尸 一首宛
 春季歌合題 富士山 夕雲雀 一首宛

會則中改正ノ件

歌合ハ二題共勝ヲ得タルモノニ賞品ヲ與フルモノトス
 毎月月並題ハ天ヲ得タルモノニ賞品ヲ與フルモノトス
 右三月ヨリ實行ス

藤原山岡直造大人宛

政子

一〇点 夢のとれぬぬ誠のありそやえ鏡少らへまはみやまをけん
 吉野山よりふえ人をみひとひし哀は身もおもひやまけん
 夢みてま我えららの幸を身みうつせや送るまをかみみ哉
 のさの世小清をなかるゝ源は死みらたそけのいさを也けり
 遙を鏡ゆめとかへしは後の日のれれか姿をうりまけるひな
 かまくらの山松よそふなよ竹けくまき動えくちせさりけり
 千年遠て契りてゝへし鏡をま曇らせまやはははさらめや
 男子よもまさる雄やし死心もて天か下れはふすみそ光は袖
 かほくらの基さだめまいさをしそ君の力をへはなまけり
 今も術かほくら山みれこりけり鏡よかへしゆめのいさをは
 今も術かほくら山よかへやなま鏡よかへまゆ光のいさをを
 かまくらの山よ老木はさくゝ花時を得らば小句む出さけり

藤山正喜
 押阪榮平
 間野敬明
 難波慶子
 藤原安次郎
 岡田長造
 岡田長造
 津川渡
 喜多島直養
 谷本兼寛
 澤本玉松
 河本郡平
 倉地敦親



一五點

さきのころる海倉山はくら花老なからみも榮はぬるかな
女郎花いとをしくもかま倉小千秋も枯ね名を埒立てける
時くれば心まくら山又散けこる花も小不ひ此心ちある空哉
かまくら山少残れる櫻木代老てをらを世小ははむり
心して子をそくまは源此さよきなられえさえまま代を
うりかえて一本さける女郎花のほくら山は香みははむつ
あはれ世代花にかぞれてはどききそら海倉山少鳴更ある也
うま倉代時光く秋もをそなへまあまて世小社顯えれにけれ
をられ木代花をく春も當此あるならせはたれらま少海ま
武士のいつは川なみ打たえてはま君なららにをを空り少ん
未遊みうみとなるへさみなもどく知て結むえある小志也けん
思ひ代やぐみどかへまをれ夢小未代榮をまらま見んとえ
人の見よをれさち夢を海そくみ我身の上よりつしりる哉

金原惟明
末國正民
藤原高英
金原惟明
中島靜盧
同 川 人
宮川秀氷
植田敬風
同 齋 入
久山壽野子
喜多島直養
押阪勝子
大塚 督

一〇點

過去日のゆめれまるしは海を鏡まはく高まりまをら此山
鎌倉山みのみれさくら花はくひさまくも世み句むり
は程か程のばらなき夢を身小取て結ふ縁を奇まかまける
今もなほぬまのま境野をて程も也うま倉山の峯代つれかけ
後代幸う後りやまけんます鏡まつは程か程代夢小かへまは
鏡もてくへし夢まは鎌倉のや海みはなまをくをりなまけれ
新あるかまくら山小時を得てて死みぬれたるはな心程哉
かみもてかへみま夢のう死橋元世み名も高くぬ渡り筒
ぬえ玉の夢みかへまえ時を得て幸も海すも代くみ成程ん
二〇點 天 程 時を得て香小こをにはへうえ櫻鎌倉やまよさき代こまつ
流れては世よもさせね君か名もさ源のあれえなまけり
散りたある老木代さくら時を得て鎌倉山をねははぬるかな

藤原安次郎
岡田長造
武藤國光
國富直香
岡 千 春
小山黍園
同 人
高取長貫
同 人
横田知範
同 人
間野敬明
難波慶子



茂りのぬ松は葉大し小人まればか海をら山をてらそ月あけ
佳調人、松風のこゑもたはてとまをち向うまら山よのゑる月あけ

地、枯れもせてはる老木は焼さくら鎌倉や海小時光きよけ
二〇 天、てる月の天をみしあどに時鳥たかくるをのるあはく新山

追加

山鳩れささち木を出えより翼どなまてそひまきみはも

早春柳

一〇点

花鳥は春はいろ音はいとをちをまつひくものそやあき也鳥

さすかばみ柳引れをめて賤ら家門は柳もいぬけきおけ

山川は雪けおみりさまたよまをををあひくきまは青柳

春かまどたゆらと見れをばみ江の柳の糸もいぬけつさお鳥

いづつ月かも柳の糸は色つぎぬきあても風鳥をるうよぬけし

國富直香
岡手春
武藤國光
宮川秀永
中島静盧
岡車直盧
篠山正喜
押阪子勝子
馬場温夫
正本久治
間野敬明
難波慶子

今朝見ればやまきの糸も春風ははやぬきをめて細引おけり
吹風はゆた寒けれとはるさちて柳はみりりえそめおけり
淡雪はぬれとも時をまりかはみ川へはやなきもえ出てお鳥
穠澤は池はあはまはとけそめてもゆる柳はまゆはうつれり
ゆたもぬぬ柳の糸も初東風よなひくを見ればのとけらる鳥
春雨はふりそめまよ門は邊はやまははゆを作し出お鳥
あし春は日敷もあさ池は邊よ色めぬをめし青や死れいと
のひあさる日足よつれて青柳はにやも長閑に春を死れけり
春風のぬくやははれど見かねどもなひ死初る柳にそまる
春淺死池の面もてあを柳はをかたうのまてまゆつくるらし
梓弓はさきしことを青や死れいとよまてを先はまりける
鶯の初音とも春はきてはりれそめさるあをやさのいと
さけふなふなひくるとへの烟社はりれはめさる柳なるふ光

大塚督
笹岡良風
同 人
丹下正繩
同 人
津川渡
河本郡平
倉地敦親
皆木正義
赤木美陽
金原惟明
原田天直
同 人

あは浅き春みにはのあを柳はみとぞ深くもなりにける哉
若なきへもあともみえぬ岡下は川邊はやなきは初けり
初らそみ立もあへぬ我宿のそのぬのやあけふりを先鳥
春はまな浅里川は死しのへおなひくけふはやなき成らん
あつさ弓春さりくれば加茂川はさまのあを柳けふを先鳥
春風よりすみと見えて烟れるえ遠方野邊はやな死あるらん
えるもなは浅ととりある柳原系とりかくるこはどなをぬる
年立てえ門のやな死も時先死てをそみ代中にけぬを先鳥
ぬるみゆく野澤は水は浮草を岸のやな死は影まやあるらん
昨日今日かけひは死らふとけをめて春光さに鳥庭はいと柳
川は邊のやなきの糸を手をさひてとくれえ結ぬ春のまつ風
またあき死春の霞ふさをもれてえやもなせむる岸はあを柳
春あさこすあをぬた死烟霞はとなひく柳は糸もはとけき

谷本 寛
高田 高藏
澤本 玉松
高田 高藏
内田 龍峰
同 人
谷本 寛
藤原 高英
赤木 美陽
中島 静盧
倉地 茂郷
藤井 直彦
同 人

春風は池のあをともとけふなり汀はやな死うちをぬるつゝ
さほかえみ一つ枝をあらふ青柳は糸にも春はみは初みけり
春立てえをさかへしつゝ結ぬともとくとも分ぬあを柳は糸
我らと柳は糸も春をせむ千代をさかむてなむさせめけり
なへて木はぬあもえなくみいとはやも柳手はあをみ初鳥
春はぬさうをみどりおも川は邊おなひく霞やゝな死成らん
水とく野澤の風あをを柳のなひくやえるにまるとなるらん
春の風ぬきを先ぬればはるは端の柳はいとみゆるめさみけり
春もまゐらむ死霞はふく風おなひをとみまえやあ死ある鳥
六田川霞なれは岸のへのやなきのいとせえる先死まけり
霞たつ野澤は岸のやなきをさかむけぬまとはらむぬそ先は鳥
結ひるま水えとて六田川死まのやなきをぬつ死あさる
結ひるま水えとてかえ添のやな死の糸もいろの死あけり

喜多島 直養
河本 郡平
久山 壽野子
同 人
未澤 鴨涯
植田 敬風
同 人
皆木 正義
宮川 秀水
同 人
武藤 國光
國富 直香
同 人



春霞さなひさを先去我かどけやな死た糸も初さみとせせ
のどるふも句み朝日小打らすみ門田のやなき春めきふけり
色あきき川邊のやなきいとほやも春くるけぬの風小亂れつ
見ぬそむる柳れまゆれ浅みとままた佐保姫もらなる成らん
どけけある池の水よりけえぬまきしのやな死はも初小鳥
もぬそむる柳に月れかけさぬて冬れはか念れ心地志遣れ
うす霞立田れ川のうは岸おつゝくやなきの先もはるまみわ
春風ふ池のこほりもどけ初て長幽ふみゆるきまはれをや死
風さぬてぬさむき難き春の色ふ立ねをれぬはななき也ま
青柳れいとのそりれれどけ初てまつ新なるえをまるか
春くれえ風のまふく池れへふなひさせめけり青柳れいと
太空を雲けさらぬとゆけけへは念なきの糸え春先さふけり
今朝見れえかけぬのこはとどけ初て軒端れ柳春先死よけり

堤 鉦太郎
同 人
高取 長貫
同 人
小山 黍園
同 木五人
馬場 温夫
正本 久治
間野 敬明
難波 慶子
操山 女史
藤原 安次郎
岡田 長造

二〇点

もえ出ん千々は草木はぬたま死ふ先うちけぬる青柳のいと
うちゆらく影ふれどけ死風とえて春しとむるあを柳れ糸
梓弓はるまゝあさ死山もとふえやくもなひく初を柳れいと
春風ふ池れうそりひとろそめて波れあやある岸れいとやき
見渡せばかれみ見たてて隅田のはつゝみの柳春めさまけり
六田川かそみとるまを柳れいともれどか小春は來に覺
池水もぬるみあそれ岸れ邊にもゆる柳れうちけぬりり
深うぬ春れいぬあそみぬよけれ浅とよまふ野路の柳も
吹風はなはさえなう初をやきれ糸おそ春れ色はみえける
琴曳れ山のぬつゝせ音たぬて里はのやなきはるめきふけり
春くれは里れ小かえれ糸やあ死いとほりもに初小鳥
住調 人、遠山の木立は去年のぬゝなか川へれやなき春めきにけり
地、下草はぬさもゆとも見ぬなく小垣根の柳けふてせめけり

末國 正民
同 人
末澤 鴨涯
中島 靜廬
喜多島 直養
横田 知範
岡 千春
操山 女史
藤原 安次郎
岡田 長造
武藤 國光
藤原 高英
横田 知範



天、春風はぬれをめまよををさし系も静かに打なむ死に
人、追加

山家残雪

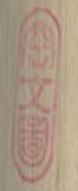
一〇点
山ふかみ冬も去りあへぬ柴の戸も垣根も尚も雪のふける
何事もたぐれぬなる山里は春もいまもゆたのふたれる
春風もときてぬらん山里も庭花もまなくぬたふりて
春来ても幾日よなまぬ山里はかきこもものある白ゆた
都ひと珍らしゆらん山さとし去年はゆたふもたあるまら雪
山里の垣根をかそみめしむとなはえそ寒くのふる雪のな
人とはぬ片山かけは住居もさうくひそむけと雪えはこれ
奥ふた谷はいはりをもとひとれを向ひの嶽も雪そのみれ
朝かすみをた浅けははきぬやむは雪にはるとも見えぬ山里

岡田千春
岡田直廣
岡田正喜
岡野敬明
大塚督
岡田長造
武藤國光
堤鉦太郎
笹岡長風
同
丹下正綱

一五

山かけの里も春日はかけうせくとこゆく小雪をたこれ
せまか家の梅もならひて山の端に残れる雪を花々と見る
ゆと近くなく鶯はこゑをそれとむかひの嶽もたある白ゆき
吹風はゆさすければ山里まかのあまさらみゆた残れる
去年は雪は何をみぬるか山里の嶽をみればにきぬ残るとも
何事もなくれかちなる山里えらそみれかきに雪そのこれ
世みうと深山は里は春風はさそふしらくはける白ゆた
何事もたぐれぬなる山里えかそみもあへそ雪をたこれ
白梅のさゆしとみしえ山本もゆた消えけたる雪もそ有ける
消えはふる雪も境見ぬれ山里えいりゆたなるとなるへき
山里のかそみの中もみゆる散かたはゆたふみけくるしら雪
かけるふのもゆる春日も山里は冬れるみりの死ぬ雪々な
長閑も我そむ山はかけみつゝ木下かけふのふるまら雪

同
津川渡
倉地敦親
末澤鴨涯
同
赤木美陽
同
中島静廣
金原惟明
倉地茂郷
藤井直彦
藤原高英
谷本寛



一五點

山里小なは死江のゑる白ゆきも霞とのみそみゆるけぬるな
大方此春や深みしやまさともなぬりそくを雪をなかりけり
足引の峯々さなれるやま里に此ころと雪をはるとまもなま
鶯のさぬいちをやき山さと小なはうちやけぬ去年の雪らな
雪死ゆる日を満りの戸此明をれぬ都のはるをかもはゆる哉
春風はねとつれれそきさま此戸は尙ぬる年の雪そとぬぬる
國栖人は御贄さへけて歸るなまま雪ふる死みよし此へ與
やゆるつる垣根のゑる雪みれえう此花ちりま心地社すれ
山里を春代なるはと也小けり死えのへぬ雪を花とみしゆふ
梅は花小はむそめけり山里も雪と境死ぬぬえりやたつらん
谷川此死まはれ柳もえつとも尙ゆ死えぬやまのしたいは
山かつるゝたふく軒れけけみれも梅はまつ枝小雪を殘れる
春來とも雪なはきはぬ山里にまつり垣根はれどさむけなま

内田龍峰
未國正民
澤本玉松
横田知範
高取長貫
同 人
小山黍園
同 人
押阪榮平
人
操山女史
同 人
藤原安次郎

一〇八

梅の香を尋ねて今日と思はそも谷間小のゑるゆきをみよ哉
山里のかげめる中ふめつらま氷てのゑる去年のまゆき
早もぬひのもゆるを待て山里の垣根は雪を死ぬそめふけり
炭かほのけふるの末を霞めども雪ゆるふやま小野の山さと
やま里は小川は氷とけぬれどぬたきぬあへぬ去年はまら雪
春風もあよひかぬけんたぬの戸みまたきぬ残る去年は白雪
世に中の春おれくれて山里はぬたまら雪は消えはぬりさる
春風もどひけましけんよあうと死遠山里のみゆるまらゆ死
山さとばかりすみなからぬ白雪は消えぬ限は春としもなし
ひかつをは霞の奥となまぬれとまら雪死ぬ峯もあかりけり
みとし此へ花のなまらん山さとの櫻の枝まゆきをばこれる
光なきぬまはれぬ死はうくひすはなけとも未とけぬゆき哉
さを花もをりにねくるゝ山里を雪さへえる小きぬ残るらん

同 人
岡田長造
國富直香
同 人
堤山鉦太郎
津川八渡
喜多島直養
河本郡平
同 人
倉地敦親
久山壽野子
植田敬風
同 人



下もぬの若なもあるを山里はひりまて雪れきぬれこるらん
 鶯此處を聞て山さともすみならふゆき境れこれる
 またささく花どや見らん鶯たなくあるなま、れこる白ゆき
 やゆさとの雪の八重かさどけ境めて隣も近きな里にける哉
 年たすて日數程へま山さどふ去年れかたみか雪れ、これる
 春さても去年ふらはらぬ山里を木かけふさむく雪れ残れる
 青柳のもゆる春日よやまさともいゆゆて残るみ雪なるらん
 霞めども春どしもなし山住のしそれいほりみ残る去らゆき
 春風もぬぎもまけん山里木かけまのこる去年れ白ゆき
 春風にうこりぬ雲を遠山れ里まれこれるゆきみやあるらん
 山里木かけまこれる白雪はむま、さける花どみ境みめ
 山里にれこれる雪ゆ春めきて冬のゆきみとなまけけるらん
 とふ人もあき山里は春もなほめりしきゆてのふる雪かき

宮川 秀水
 中島 静庵
 金原 惟明
 藤井 直彦
 藤原 高英
 原田 天直
 同 人
 谷 本 寛
 久山 壽子野
 末國 正良
 皆未 正毅
 同 人
 宮川 秀水

二〇点

山里へ春れ日かけもろそ霞るゝるか死ねおゆきそれあれる
 梓弓はるの日數はつもりゆ、尙ゆきどけぬみやまへれさと
 人どえぬみ山里えゝるとも知そや去年れ雪の、これる
 何事もかくれかちなる山里はどくるもかそき去年のしら雪
 都ちえ長閑にかはむ春もゆぬ雪のなるをさ、にけけいは
 梓弓はるはくれども山さとえ尙ぬるとしれゆ死そこのれる
 都へは梅れさかりと死、けるを吾山さやゆ死境のこれる
 山ゆけのくち葉ままてふ消残る雪社去年れゆきみまにけれ
 山里えかすとならふ風さえてむ、のこるみねれ白雪
 ちくひその春くと告るあはそれと尙雪どけぬ山ゆけれ庵
 さく梅のかを身おまむ山里は寒けれある去年れ雪々な
 佳調 人、春風ゆ々よえさるらん山里は去年れまゝなる雪れ、あれる
 地、めりらまやなるゆてふ成ふ鳥遠山さどまれある白ゆき

喜多島 直養
 久山 壽野子
 難波 慶子
 武藤 國光
 間野 敬明
 正本 久治
 馬場 温夫
 押阪 勝子
 岡 千春
 同 人
 横田 知範
 難波 慶子
 久山 壽野子



天鷲の初音さうんときてみれを雪をぬれあるみやゆへのぞ
追加

ふみわけん人もまれなる山里は春さへにえみ雪のれこれる

山里まはるる雪の初音さうんときてみれを雪をぬれあるみやゆへのぞ
追加
ふみわけん人もまれなる山里は春さへにえみ雪のれこれる
山里まはるる雪の初音さうんときてみれを雪をぬれあるみやゆへのぞ

馬場温夫

阿直盛

阿直盛

阿直盛

阿直盛

阿直盛

阿直盛

廿九年
三月
傳作和歌會月並歌卷



齋垣内岡

齋垣内岡直廬大人撰

(非賣品)

廿九年
三月

備作和歌會月並歌卷

余寒

月並兼題

遠村霞

歌合題

富士山

關路歸厂

夕雲雀



和歌募集

今般左ノ規則ニ從ヒ廣ク和歌ヲ募リ以テ金玉集ヲ刊行シ聊斯道ノ發達ヲ補ハント
ス爾後毎年卷ヲ追テ續行スヘシ
本會員諸君ノ出詠ハ勿論精々他ノ有志者御勸誘アラソテ請フ

一書名 花

一題 雪月花鳥 但鳥ハ時鳥トシテ以テ四季トス

一 一題ニ付十首以内ヲ半紙半面ニ認メ出詠スヘシ

一 一ヶ月ハ五月廿日限リトシ六月下旬ヲ以テ發行スヘシ

一 出詠者ハ會費トシテ金七錢詠草ニ添ヘテ前納スヘシ若會費添ハザルトキハ
沒詠トス

但郵券代用一割増ノ下

一 撰拔ハ岡直廬大人ニ乞ヒ凡ソ一題一首以上ハ登載スヘシ

一 書冊出來ノ上ハ非賣品ニ付出詠者ニ限り無代價ニテ配布スヘシ尤出詠者ニ
シテ書冊ヲ要セザル分ハ會費半額トス

一 書冊ヲ郵送スル分ハ別ニ郵税四錢ヲ前納スヘシ

一 詠紳ハ本會幹事ノ中へ送付スヘシ

明治廿九年四月 備作和歌會

餘 寒

一〇点

春をまゝ淺茅ヶ原のやどなれや北山おぬま身おぢまぬぬる
立ちへり春を不寒くみよしの山かせさえて雪はそなる
昨日まで春とおもひしころをも冬おへし淡雪のふり
うら霞たな引なかり風さぬてゆき花ちるるも有るあ
うくひすはなへ音もたぬて昨日今日風さぬ返り淡雪はふる
春ならはなは淡雪のぬるくるは去年の寒のなみりなるらん
冬ならは心おとくと思へともけるのさまたはさへ難さるあ
春をぬと人はいへとも風さむみ炭さまぢぬるはやの埋み火
山里を向みせさむしきさらさけ空も霞まてゆきそふりける
春さても池のうをらひとけもせは空をえあへて淡雪はふる
梓弓をるえたてとも空さむく浦ぬくもせの身おぢまぬけり
春風はさぬるへまけん池は面おうとさ氷をけさもみるかな

武藤國光 喜多島直義 難波慶子 押坂勝子 倉地敦親 正本久治 押坂榮平 篠原吉一 築山球龜 伊田如水 笹岡良風 田中績三



一五點

みよしの山は霞たあさみと春とまもなくあはる谷みほ
棹ひめは霞のそてやさぬぬらんぬた肌寒さくるたあさかせ
さゝさなく竹たまらさの朝霜も春を不寒さぬしの見たり
朝東風を北にかえりてゆ種まく千町は小田もあはる春かな
春の野は若菜花ひへもるまを又さならへて淡雪たふる
春あけら日影もさびく風さぬてあらしけ末まみぢれふる也
春風も身にしみぬるは久らぬの雲井は境らや雪けなるらん
ふも風もぬたさえかへり若菜のひ衣手さむき春の野邊かな
ぬ死すて一去年たふる衣重ねてもまも袖さむき春の山かせ
さえあへる春は寒さうくひもいぬと初音をもらさゝり鬼
えるたてと猶風寒みうくひもいぬと初音をもらさゝり鬼
遠山の峯の白ゆきゝえぬ間まなほえる風たさぬあさるかな
山は端をかきみもあへすさ返り春風さむく淡ゆたふる

二〇點

津川 渡
高取 長貫
横田 知範
國富 直香
植田 敬風
宮島 省堂
岡田 長造
宮川 秀水
久山 壽野
馬場 温夫
丹下 正綱
堤 鉦太郎
入江 勝胤

住調

二月の空もゆたけけ、あるらんかそみなりらよ月代寒けさ
けぬも亦死ぬきさらぎの空をぬて山のせ寒く淡ゆきのぬる
春さても風猶さすみやゆきとけ垣根の梅もさきわくれけり
春さても霞たあさみもらそみか山風さむく身にそまみぬる
人、梅か香けかをる庭にも死たけふ又さえあへて淡雪のぬる
地、春のさる霞たあさみもかかねても猶肌さむきゆるけぬかな
天、梅もさ死若菜も萌ゆる春は日おなど肌さむき風のふららん

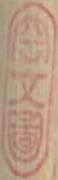
追

加
けふもぬた霞の衣ぬきとせぬいつゆてゆるわらし成らん
遠村も春死みけらま少女子かすみの中おまらなりひみゆ
はとゝは死霞た里は春の死ていとゝらそみおみえす也けり
犬はゆる聲もかすみて聞ゆなま柳花みくみさとやあるらん

一〇點

遠村も春死みけらま少女子かすみの中おまらなりひみゆ
はとゝは死霞た里は春の死ていとゝらそみおみえす也けり
犬はゆる聲もかすみて聞ゆなま柳花みくみさとやあるらん

藤原安次郎
岡崎 芳樹
皆木 正義
岡本 千春
藤原 高英
大賀 正夫
遠藤 正心
岡山 直麿
藤原 高英
大賀 正夫
倉地 敦親



今朝みまどかほみわさまで妹も住む遠れ里えいよ遠れ
 幾重もあなををちれ山本の里のけふもこかそみ成らん
 遠方れ里は霞みりまれてこそあもいほえみえそな里けり
 面さかそみ立かくまゆよま鳥のこあけ開ゆる遠れ家むら
 立こめて遠村里れ見ぬゆてふかあもけきかそみ渡れ里
 今もやうすまぬ山もなかに幾渡路えるかみ見わさまの里
 なかめやるをちれ里わも霞むなまいつこも同ま春は立少し
 はどははを見るよしもな死村里えぬかき霞ふへさてられ
 花れいほをゆみこめつ遠れえいと長閑な霞見ぬれ
 旭さす遠れ小野れうするそみ花ゆつはどは見えぬける
 ちちつと霞なひきて青柳のむらむらと見え見ぬ渡るなま
 牛飼れ聲へとはく聞ゆなりゆそみあめたる山もどはれど
 見渡せは遠村里れ八重をそみ一重はしつゆあけなる程ん

篠山正喜
 押坂繁平
 遠藤正心
 馬場温夫
 築山球龜
 伊田如水
 笹岡真風
 田中績三
 津川高渡
 澤本玉松
 高取長貫
 植田敬風
 宮島省堂

一五點

あけけなく烟の末もふきまいて打かほむなりをちれ村さと
 牛ひ死てのへる童は遠村里八重れのそそのなかい里けり
 見渡せは遠れ里わおかしなへてのそむや春のしるま成らん
 あさけたを里見れけけふり末消てあむくはをちれ霞なるらん
 かすのふもなき驚れ聲えまて打かそみさるをちのむとすら
 牛引てのへる里らへも見えぬまて打かそみけりをちの村里
 今はよこそあもみぬそ成ふけり霞わたれるをすれ一すら
 佐保姫のかほみ袖よのくれ見する野もみえし遠れ一むら
 朝けたくけふりもみえず成みけり遠れ里見は打かほみつ
 打むれて若菜ゆむ子れ聲さへも霞なくさるやまもど終さど
 すむ人読ありとまもなきをす方れ里れ烟やかそみなるらん
 んどこくも見ゆる煙をち方れ里わよなひくかそみ成らん
 常よみるをち乃一村けぬえさやかほみ乃申ふ死えはてお龜

岡田長造
 喜多島直養
 久山壽野
 難波慶子
 皆木正義
 岡崎芳樹
 藤原安次郎
 武藤國光
 岡千春
 宮川秀水
 間野敬明
 谷本寛
 金原惟明

二〇點



佳詞

あさ日さそ梅ははやしも不のみぬて霞たなむくをす乃村里
人、春ふらり成行ほすみをち方流里えかそみ流たちうくしつ
地、あすさ弓えるも深くやな里ぬらん霞に死ゆるをちれ一むら
天、夕け多く烟なららふかそみつ暮るもさひえをちれ山里

追加

家毎れあさけけぬ末死ぬて霞ふてむるをち流ひとすら

關路歸雁

一〇点

天津厂れのかこまちみるへる哉りけも關路聲むせひつ
よ境にみん人もなこそは關路さく花をもむとふへる厂金
古里れたと里はいつか白川せせさち流空をかへるけりかね
今えとて花をみそて立わさる霞のせ死れの里のみあなる
厂流ゆく雲井をみれとのけもなし聲も霞かせ死流うへなる
荒れはま今は石大流は關なれと名ばかりて歸る春乃か里金

堤 鉦太郎

丹下 正綱

河本 郡平

國富 直香

岡 直麿

宮島 省堂

藤原 高英

河本 郡平

喜多島 直養

篠山 正喜

正本 久治

夕月は須磨の關路をてらしつゝのへるや雁乃數れよまる

さく花を見すて歸る雁か絲もあなりて過ぐる逢坂乃せき

七重八重のすみの關乃櫻花さくおもほさてのへるの里かね

一五点

古里は春をこひてあふ坂は關をこしちよかへるかまかね

故郷をえ乃ひていそくの里か絲え關路外山をえやこゑ又幾

取さあのらかをる夕は厂かねえ霞かせきやこえうのるらん

あすさ弓春乃花野あふさかせきまをこねてかへる厂金

風もちる花はうき世をいとふらん關路を越て厂のあへるえ

過ぎかゑも關もどさの御代取ま心安くそ厂やのるらん

あま明は月と聲ある心地してのすみか勢さよさるかまかね

かゑるとも契まかへる厂かねの又さる秋あふ坂のせき

霞もつ花のみをこをふすて越のせき路よかるる厂かね

意り取不破は關守のゆふへこゑし乃の音よ厂流のるまは

皆木 正義

金原 惟明

澤本 玉松

津川 有渡

田中 績三

丹下 正綱

笹岡 良風

岡崎 芳樹

大賀 正夫

難波 慶子

久山 壽野

宮川 秀水

岡田 長造



關比戸を面をるもゆたて歸る尸いのにこひまき越路成らん
 をしむへ死花をみそて立わさる霞か關みかゝるかりかね
 何方をさまてかへるか白川流せきさをあぬて尸あきわたる
 一聲を月と影のりて春の夜のかきみか關をかへるかりかね
 月のけもくらぬ霞のせきあれと空ゆくる里は留らさるけり
 故郷小尸はのへてぬ玉章のもまはせき屋の名乃みどりめて
 二〇点 足柄乃せきは霞よとすられてあえまどふらん春乃のりかね
 佳調 人、都へは花のさかまも白川のせきさをあえてかゝるのりかね
 地、ゆく尸流かけこそみえぬ聲のみえ霞の關もへたてさりけり
 天、をまほる身ともまらてや白川乃關路えるかみのへる尸金

追 加

而坂乃關路をわさるかまかねをいと越路や戀まかゝる蘭

春季歌合 富士山

藤原安次郎
 植田敬風
 武藤國光
 國富直香
 横田知範
 高取長貫
 押坂勝子
 馬場温夫
 岡千春
 篠原吉一
 岡直廬

左 千年ふる雪もきえて日乃本よとてるえふしは高根也けり
 右勝 朝ひこふのやく雪乃不二流ぬや曇り影き世乃光能るらん
 左詞侍さこちくし右雪流光はえたり
 左持 日本の富士よぞ外ましら雲乃かゝる尊ときをさ能るぞけり
 右 外國の人もあふかん白妙はふしとりのかきやまのあけまは
 左右とも同じ流と能る
 左 動き能きわが大御代は礎とのみ吞てけんふし流しはやま
 右勝 世乃ちまのなるともみえし久方乃雲れ上なる不二流高根は
 左結句猶あるへし右を勝とい
 左持 千早振神代のはまふし流は動かぬまのし切め也けり
 右 ゆるきあき國のはしらとあふて截雲まきゆる不二流大岳
 左二は句神代はまのとおまふしと左右とも位と能るし
 左 見る毎よめ切らしき哉ふしねはあやしき迄又姿かはまは

高取長貫
 横田知範
 國富直香
 武藤國光
 植田敬風
 岡山千春
 宮島省堂
 藤原高英
 岡田長造



右勝 村山をふもとに取て大空み高くそむる不二社のみやゆ 宮川 秀水

左ささるぬえも取去右えそのなをま勝乃勝なるひま

左持 富士乃根亦常もゆれる白雪は神はみまへ消けや有らん 河本 郡平

右持 外國に秀つるくみのみてぬえもぬえのぬ仰ぐ人やあるらん 喜多島 直養

左右ともことなるぬえも取去持とい

左持 旅衣いともちれまぐぬえも裁ちぬえもてなきままは神やゆ 久山 壽野

右勝 さまははる朝日まはゆぐぬえも裁ちぬえをひゆる雪はふまぬ 難波 慶子

左初何さぬす右はこと取去勝とい

左 高砂の島ひとまてもあふまぬゆるなき代はふまは神山 押坂 勝子

右勝 ことばみ姿かはらぬ不二はぬを御代の印とあふけ世乃人 大賀 正夫

左高砂は島をとて出されと聊いひさぬぬえうち右のみとも取去勝とい

左持 神代より萬代かけて雲たうへぬ高き境ひゆるふまは神山 倉地 敦親

右 駿河能るふまはぬぬは神代も動ぬ御代はたかき成る左 間野 敬明

左右とも又さしぬるけちめも侍らす

左持 ことばは雪は白ゆふのけ巻もあなまかしこと不二は神山 篠山 正喜

右 雪はするぬる不二乃高根乃姿こそうてかぬ御代は印能るらぬ 正本 久治

左 雪は白ゆふはささらあまともいさくのいひぬらぬことす右は難取けれと若し持

とす

左勝 ゆるさなき御代乃ぬめしと大それ又仰くも高し不二は神山 押坂 榮平

右 幾千年變らぬ御代は稜威をは富士はみてもしらしける哉 遠藤 正心

左 左右とも又さしぬるけちめも侍らす

左勝 浮雲は不二乃ふもとあぬれとも仰けは見ゆる巖はしれ事 皆木 正義

右 此を此浦安くは流しぬめとてさてるもぬのし不二は大岳 岡崎 芳樹

左 左右とも又さしぬるけちめも侍らす

左持 あけぬきは箱根は雪みは底まみん雲は聳ゆる富士は高き 篠原 吉一

右 千早振國乃そのぬはまは流は高きうるも雪は流みさる 馬場 温夫



左右ともいしむりのまき歌あり

左持 なへて皆仰き見るの取千早振神乃ほけてふ不二流はさけ 築山球龜

右 村山をふもぎ、取まゝ富士は吾大御代流をのぬ也なり 藤原安次郎

左勝 雲は上に登ゆる不二は高松ははりければ空は雪やふりけん 谷本五寛

右 朝日さぬ富士乃み雪を仰き見れば高根かるまも句ひぬる哉 伊田如水

左右は結句猶あるるま左もよく句ひつゝ又されまるとかは初ら終といさゝのは念ふさ

左持 如月の空うちらゝせのほみつゝ雲小峰ゆるゆきは不二はね 笹岡良風

右 仰き見る度にはのちくあゝすして雲間に高き不二流大けけけ 金原惟明

左勝 大空少高くそひえて白くも流念えずかゝれる不二の神やゆ 丹下正繩

右 富士乃峰と雪は衣をきりれともすきの、原にれととさり龜 田中續三

左 外國又取らぬ取さか取天皇はくまのみまゝと不二の芝をま 津川雲渡

右 千早振神代参のらのしちゆきの侍もりし山の名こそ高けせ 堤鉦太郎

左右ともはさ六のし

左持 神代まゝまゝしみ雪の残るらん雲井ましろき不二の高松は 入江勝胤

右 はるくどこし甲斐有て不二のぬを仰きみる社嬭のまけせ 澤本玉松

左右ともさこえぬまはわぬはといをもしろしとも承らす右はことよさくはれこれと

追 追

加

雲はるくまひは高さのろはるかど先ろかどろくふしの神山 岡本直廣

夕 雲 雀

左持 夕雲雀うらまぬくらやしめゆらん暮までも聲の猶聞えけせ 堤鉦太郎

右 久方の雲井はるかき聲はしてゆはさは見ぬ夕ひはりかゝる 大賀正夫



左右ともことゝ取し持とす

左 花のどこと忘まはてけん夕はり尙ららさかき聲のきこゆる

右勝 春の野も遊(く)さして歸るさの道かもしろく雲雀取くなり

左初句猶あるへし右はことゝ取し勝とす

左持 夕月のやのみはゆめし空も取はねくらばなきて飛く雲雀哉

右 すみ取まを床をは取せて飛火野の空よさえける夕ははぞ哉

こもまた左右ともことゝ取るむねも取ま持とす

左勝 夕けぬく烟の末もかすみゆき雲雀なく音のいともどけき

右 取かき日とみ空も取きて夕雲雀野邊乃宿まも忘れはてけん

こも左右ともことゝをなまされと左いさよのうけ高き也

左持 めけるふの長さ春日もあきながら暮れ行く空も雲雀なく也

右 春の日を取や短しとかもふらんくるよもしらて雲雀取く也

こは左右ともことゝのりたけも同じはとなり

大 貴 五 夫

岡崎 芳樹

喜多島 直養

築山 球龜

河本 郡平

谷本 正寛

篠原 吉一

難波 慶子

藤波 花子

左勝 夕月はよか(け)きめ(る)空も尙くも乃(こ)りても取く雲雀かな

右 昔乃(は)ぬは長き春日とく(れ)たけのふしか(せ)ま(る)く雲雀取く也

右はぬくはをたれと左は高きしらへはは遙(よ)及(ひ)かたき

左勝 里川もかけをうけ去て夕はは(を)浮ふとみまは(は)か(は)る也けり

右 猶あかる雲雀のこゑのきこゆ取ま(は)野末(は)日影(は)ち(は)けり

左右ともことゝみあ(ま)ま(ま)と左の(は)勝(を)取(ま)し

左 山のはまにける日影をよろよして尙わけやまぬ夕はは(を)哉

右勝 くれろめ(は)高根の花の雲の邊(は)夕日(は)ほ(ひ)て(は)は(ま)取(く)也

左四の句い(る)右を勝とす

左 夕ま(は)ま(ま)牛(ひ)く子(等)は(か)へ(ま)ても雲雀の聲の尙(の)こ(ま)なる

右勝 山の端(は)日(は)かけ(は)落(て)夕(は)は(ま)一(き)は(た)か(き)聲(の)き(こ)ゆる

左右ともめて(ま)し(ま)ま(ま)右(き)は(ま)高(き)こ(え)侍(る)

左持 さ(き)花(を)よ(き)も(取)し(ゆ)夕(は)日(霞)む(み)空(も)は(は)り(多)く(也)

藤原 安次郎

笹岡 長風

岡田 千春

高取 長貫

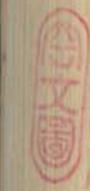
藤原 高英

横田 知範

皆木 正義

武藤 國光

植田 敬風



右 物のくゞと霞みて暮るゝ山畑の只みれの床よ雲雀取く取
左右ともまな同じはと也

左持 野るみれば霞の中よ聲たてゝひ波りなく取て春はちふくれ
右 ぞみれさく野床の影えくれ取ら取は空高くひ波り取く也

左結句取はるるし右二乃何々たゞし持とせ
左 取く聲はたしかおそれと聞ゆれと霞みてみえぬ夕雲雀のる
右勝 雲わけていやと保さかる夕雲雀只こおののみ聞をかまけり

左右とも詞つきをさ取しされと右のかさ結句少しさゝたるどこはあまや
左 空高くあかるひ波りと夕されは子をや思ふのこゑの落くる

右勝 夕日影あちて乃ちもこゑはして霞む野未みひ波りなく也
左ひひさま六のし右はいとさけ高し勝は勝なるるし

左勝 夕雲雀こゑは取まともくもはてあまはみえを取まにける哉
右 ねくたんと取はこゑもな之はてゝ取保ひ波り取く夕くはの空

左さこえてとわれとさまたるふまを取ま右と下は句ことよ六のまをさせとはつ左を勝とせんか

左持 さわらひれをゆる高根小日之落てまをま之上る夕雲雀の取
右 夕けさく賤の伏屋流うそけふと棚引く空るよひとりなく也

左右とも同まかとま
左持 こゑをまてはのさこみえぬ春乃野乃霞夕日又雲雀なく哉
右 子をかせん必や尙せ乃こるらん之れゆく空よ雲雀なくなま

左右ともことまま持とす
左 芝生へそいつあちくらん夕くま乃空を保まかく雲雀なく也
右勝 夕さまと空よ雲雀はこゑをあり雲井と取保を暮れこるらん

左右ともことまなけれと右取保さけさの死こちと
左持 夕霞雀こゑをまのいて若草は芝生のとこまちてけるか取
右 夕いとま子や思ふらん空高くあゝるとみれとやのて落くる

國富直香 津川渡 宮川秀水 金原惟明 澤本玉松 宮島省堂 岡田長造 押坂勝子 丹下正綱 久山壽野 正本久治 伊田如水 押坂榮平 田中績三 篠山正喜 遠藤正心 間野敬明



左右ともいさゝのねとりさゝ取まど位と同去はとなり

左持 花乃色夕日まそまとわの縁とを空高くひとをかく也

倉地敦親

右 春のすみ立ぬる方よこゑと去て去とふまね降る夕雲雀の取

馬場温夫

こゝ上と同去

追 加

田中三

式許 賤けをやとこのへまけん夕はけて山田の雲雀空よ取くみ

岡直廬

四月分月並題 漁舟 名所花 落花散衣 (一題二首以内)

締切必十五日

會則中改正ノ件 歌合ハ二題共勝ヲ得タル者月並ノ分ハ天ヲ得タル者ニ賞品ヲ與フ

右三月ヨリ實行ス

受賞者

歌合の分 横田知範 谷本 兌 岡 千春

月並の分 遠藤正心 國富直香 篠原吉一





齋垣内岡直廬大人撰

(非賣品)

廿九年
四月 備作和歌會月並歌卷

漁舟

月並兼題 名所花

落花散衣



和歌募集

今般左ノ規則ニ從ヒ廣ク和歌ヲ募リ以テ金玉集ヲ刊行シ聊斯道ノ發達ヲ補ハント
ス爾後毎年卷ヲ追テ續行スヘシ
本會員諸君ノ出ハ勿論精々他ノ有志者御勸誘アラソテ請フ

一書名 花

一題 雪月花鳥 但鳥ハ時鳥トシテ以テ四季トス

一 一題ニ付十首以内ヲ半紙半面ニ認メ出詠スヘシ

一 切ハ五月廿日限リトシ六月下旬ヲ以テ發行スヘシ

一 出詠者ハ會費トシテ金七錢詠草ニ添ヘテ前納スヘシ若會費添ハザルトキハ沒詠トス

但郵券代用一割増ノ

一 撰拔ハ岡直廬大人ニ乞ヒ凡ソ一題一首以上ハ登載スヘシ

一 書冊出來ノ上ハ非賣品ニ付出詠者ニ限り無代價ニテ配布スヘシ尤出詠者ニシテ書冊ヲ要セザル分ハ會費半額トス

一 書冊ヲ郵送スル分ハ別ニ郵税四錢ヲ前納スヘシ

一 詠紳ハ本會幹事ノ中へ送付スヘシ

明治廿九年四月

備作和歌會

漁舟

一〇点

熊の浦梶れをどきこゆ夕あに蟹の小舟はあひ死するらし
うたひつゝ白波見けてこは行はあまの釣せる小舟取るらん
明暮み波路をやどのいさぎ舟うさもわをれて世を渡るらん
打むれて沖みたよふ様みまはらもめおほかふ蟹のつて舟
取まへひけからき味をやな光りらん潮のなかのあまは釣舟
風えやみさしくる波の高けきはたえらんみゆる海士の釣舟
あはけ子ゝ浪の空き谷をいとそぬも家と思ひはあれも也覺
難波渦あしをわけけりこき出て波よさよみ海士のつて舟
夕やみのくちきを照す篝火はあまのあみひく小舟取るらん
夕はくち沖つ汐風吹くからま真帆をわけけりこき取るらん
松浦の沖は夕ねきあやなほ波よあまのあみひく火はけりけ
わさつみ乃沖津白浪さちぬれとなれてりま返る蟹小舟の本

喜多島直養 小林盛章 間野敬明 難波慶子 藤原高英 篠原吉一 同 人 皆木正義 岡田長造 同 人 植田敬風 笹岡良風



一五點

雨乃夜少星のと見ゆるの、里火は弱み引海士は小舟也けり
山のはま月の出きは漁民のあはれ小ふなれありける可
さう取みや志賀は浦波おとたえて浮世を渡る海士はつり舟
舟はつりと明石の浦のいさぎ船小島はかけにみゆる可
ははつりととれゆり涙乃汐ささみりさは也而まは釣舟
を以月影影乃みけゆく川上よのりてす取まは乃釣舟
ありなきを夕日は波おのくろひて今はと歸るあはれ舟
沖遠くたゞよふ海士の舟は世乃う死事の外みまくらん
れきけるお木葉うらふと思ひまは釣する蟹の小船なまけり
夕月夜聲ものすくは聞ゆるはれさるまはか魚あさるらん
まくまけし見れ浦はあけ方乃取みやはら取る蟹乃取まぬ
和田津海乃八重は汐路まいさまでから死世渡る蟹乃釣舟
難波濁あし間をあてる川に舟はうきふしまけき世を渡る蘭

津川 夏渡
同 人
武藤 國光
同 人
國富 直香
同 人
堤 用鉦太郎
倉地 敦親
岡 千春
藤原 安次郎
高取 長貫
同 人
押坂 榮平

佳調

まほやかぬ浦の波路も辛き世をわらふと同じ海士のはせ舟
入相のかたのひきまうまつれて磯へよかへるあまの釣舟
なかたやる長居の浦のより火は海士の小舟のいさり成蘭
難波濁波をはるかよかけさえて雲井をまぐる海士はつり舟
うちひれて遊ぶるも光と思ひしと釣する蟹の舟は有ける
志賀の浦風もしつけき波の上は浮ぶ木葉とあまのつりふね
島山の入りはかけよいうきつと磯へにのへるあま乃つり舟
佳調 人、あまの子の蟹釣るらし土佐の海は沖の波間に舟のみゆるは
地、夕日のけしつゆんどする波の上は浮てのこるあまのつり舟
天、暮れ渡る沖の汐路は夕なまきいまとと歸るあはれつりふね
追 加
波の上に小舟つらましく沖はへお釣せし海士や今のへるらし

名所花

中 塚 正 齊
岡 木 千 五 春
宮 島 省 堂
有 木 喜 多 治
末 澤 鴨 涯
河 本 郡 平
成 本 登
中 塚 正 齊
藤 原 安 次 郎
植 田 敬 風
岡 直 廣



一〇点

ゆく水よと流きて隅田川をあくむ人れそてよふらし
 行水の隅田川よみのさくらは花白雲とこらみるへかまげれ
 花や霞のそみや花とほかふゆてさきみち渡るみとしけし山
 天 吉野山花よあら玄の音さえてさちもきえせぬ雲うた取ひく
 流 櫻花をきまけらしなみよしけし吉野の山よあゆるしらくも
 隅田川のりみれをくら咲もと音なふ人れなえ問さよあし
 賤の女かむすふ水さへよほふ取れ隅田川さしけ花の盛里は
 世れうたを洗ひ流きて隅田川は花れ取かゆ人はなはせま
 春かけみ志賀此山へとほめと花れ句ををいてみけり
 人心よまはくてもなささふけり妹ともおも遊そよ思ぬ
 咲よをぬ吉野此山れさくぬと取雲とやいとん霞とやいせん
 雲も取をさきとまよる櫻花吉野はるをいとまめり
 かと年も去年と今年も見花をといや珍たまきと吉れ花

押坂勝子
 武藤國光
 内田旭涯
 宮島省堂
 有木喜多治
 末澤鴨涯
 河本郡平
 田中績三
 津川渡
 笹岡良風
 小林盛章
 皆木正義
 中島静塵

一五点

志賀の山みよくる人とのはれとも花をむかしの香よ句つ
 小金井やのそむあなよ又一重目さつかそみは櫻あるらん
 あすの川あそはきてみん花とや昨日も今日も盛とろさく
 高砂の尾上れゆりみしらくもれかるとみしは櫻なりけり
 白雲の峯よも尾よもかきをるは吉野の山れさくらなるらん
 有明れ月のけきえて吉野山みねよしらむ之あいのみの取
 峯よ尾にゑるてかされる白雲はたくりあらしの山さくら花
 大井川ゆみよつとく櫻花うつれるのけをゆりしかりけり
 らをぬすは只雲とれみかもてはし吉野の山れ花のけしきを
 さすさをのしりくも今はかをる也隅田のきまけ花れ盛里よ
 見渡せば一重よ雲うかくりける八重山さくら今さかまて
 嵐山あらまふけども白くもれさすわかれぬやさくら成らん
 あすの山あそもきてみんけふはしも終日花をみり暮きて

藤原高英
 同 人
 篠原吉一
 皆木正義
 岡田長造
 間野敬明
 難波慶子
 原田信義
 小林盛章
 成 登
 同 人
 倉地敦親
 同 人

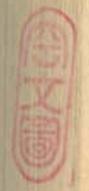


咲にはふ志賀れみやこれ櫻は取すきま昔の心ろをこそみめ
みよまの吉野れわたり霞む取里今や櫻のそかて取らん
打里さそ霞の底れしらくも吉野れ山はなまや何れけん
大空もよわいわさまで朝日かけ花里けのはるみよしれ山
きのふけふ咲きそふ花の下かけ水さへふはふあそか川哉
みよしの吉野れ山の櫻となかを重も高くささよはふな里
大空もくをるとか里の花さか里のけふみ渡る佐野れ舟はし
外國の人みせはや朝日や海ふふさく花れさありを
見所のいれくはあれと世みそ亦さくひあらしれ山さくら花
岩としる瀧のみなわもふはふせん櫻にかそむみよしの山
櫻はなささの盛まはとみふ川あかる、水そふ存ひこそせめ
深草のや海はさくらみうれをきて月のけ暗く香に匂ぬなり
白雲れかゝるとみしえ吉野や海今を盛まはとみふそ有ける

足羽由清
末澤鴨涯
國富直香
高取長貫
同 人
武藤國光
藤原安次郎
押坂勝子
中塚正齊
同 人
篠山正喜
藤原安次郎
遠藤正心

みゆとめて取かめま人をまのふ哉名ころの關は花の盛りよ
とまは山花のさのりこた取ひける霞も今は香みに得ふ取ま
櫻花ささのさかどこあらま山あらまもえ社まはさりけま
吉野山花のさのりまどさ、まをり今こころよ分ぬ日暮れま
遠近のど取まうかまて隅田かえ堤持ぬひ日とくれおけま
吉野山こけあまははぬ月かけ乃かそむあさ里や櫻なるらん
色も香そむかまならみ咲出て行幸まのらん志賀乃まな園
年をへま志賀の都のさくらにはなむかまなからみ咲出みけま
角田川なる、水そみは返返り、み乃さくま今さかまなま
さだおをふ志賀の都のや海さくら昔まからの色はみはけま
櫻花さだにけらまをみとまは、峯の白くまをる、日のなき
嵐山あらまを春のなれみみてはどかみ匂ふはなさくらまな
雪どみえ雲と海らひて吉野山高根はさくらいほさうまなま

同 人
伊田如水
同 千春
有木喜多治
國富直香
堤 鉦太郎
丹下正繩
同 人
喜多島直養
倉地茂郷
同 人
植田敬風
間野敬明



大井川さき乃櫻乃さくころは水さへはぬこゝちこうすれ
 佳調 四、墨田川の、みは櫻さきまをりしたゆく水を香まはふな
 人、隅田川はな乃さの望はゆく舟を雲井をわゆる心地こそ務先
 地、吹風はははさきせは芳野山さる望花をゆきとこそみゆ
 天、かね流音を香ま匂ふ也小初瀬山はさくらにみ盛まとして

追加

ゆく水ははぬをみまは隅田川底よそえなえさる望成らん

落花散衣

一〇点
 長閑なる春をせうしとねもぬらん我衣手よはみ乃ちてくる
 さにぬまご字長ろふ物とままかあら袖よ散る花は哀きさ
 鶯のこはたぬさくらといわけは衣のそてまはなのさまくる
 さくら花さける木の間を訪れば衣の袖よあきとさるなり
 風さやふ藤かあひぬかひ花をば、我衣手よちるさくらかな

岡田長造
 植田徹風
 河本郡平
 押坂榮平
 岡田千春
 岡田直廬
 内田旭涯
 足羽由清
 同 人
 末澤鳴涯
 河本郡平

我もてふ雪はぬまくる心地まてとめを初へそちる櫻かな
 さる花をよみみて賤の木は下立ころも手よ雪とぬまま
 吹風よいさなはればはさる花よし花々衣をさてたうまけ
 足さき山はけのすみをふく風よわの衣手よはな捨ちまをる
 立よればわの墨うめけをて此上ふ雪と散る山さくもはあ
 手折んどもふそなはち袖此上まわれをもまてさる櫻哉
 鶯は枝うたまてとぬこまこころも袖よちるさくらかな
 ろそみなる山の麓をこえをれ衣手よちる衣のまらゆき
 をま先ともむも風よちる花をまはし之袖まよと先ま去哉
 吹風よこはる衣をきて春もえやうと袖よちるさくら哉
 色まぬて山分こはもよほけしを織はかり花は散まは
 風ぬけ袖よ散くるさくら花のをりはけふけ家院とよせん
 先はらまく花の白雪ぬまみけり衣手ぬるこゝちこそすれ

一五点

田中績三
 津川百渡
 同 五人
 笹岡良風
 倉地茂郷
 植田徹風
 小林盛章
 高取長貫
 同 人
 中塚正春
 篠山正喜
 藤原安次郎
 同 人



を先ども吹く春風よ誘ひきて袖を散る香をさくはたな
少女子のぬりけさもとに白雪と散てさくらに香を止先ける
雪ならぬ花は眞袖にか花ちりて衣手さきこゝちこそすれ
白雪と仰きまみね乃さくちとなげぬ衣手ゆきとこぼれ
風さ境ふ高根はさくぬちぬぬわの衣手は雪のふりくる
を香みなく衣乃袖まぢまかゝるさくらにたなと雪と社みを
入相鏡に音もさそとをてころも乃袖さするさくらに花
さらぬさま別まか取まは袖は上ま花をさくも散さくら花
時ならぬみ雪は袖まさそにまをらまはやゆはさくぬ也
とふ蝶の羽風おふまてちる花乃袖にあゝるも嬉しかまけ
すまかゝる花は吹雪お木下をゆきのふ人けそておをふ取
行春の名残を捨ておをせらせて花さりのゝる志賀の山こえ
龍門のまぐ袖もかとりてふまかゝる嵐はをまはて龍は白雪

伊田如水
武藤國光
同 人
有木喜多治
同 人
末澤鴨涯
國富直香
同 人
河本郡平
堤鉦太郎
丹下正繩
喜多島直養
同 人

はかなくもちりぬる花も吾袖ましはまかゝりて薫る止めり
ふりまて歸るとそれ袖の上まわかまわしくもちる櫻哉
花さるも思ふこゝろのありぬらま名残をさまむ袖は散きけ
み雪かど袖はら(花)さかむまの櫻の花はちるまを有ける
あくまてもみんと思ひし程もなく衣の袖おちるさくらかな
時なりぬ雪かどはかり衣ておふるま高根のさくらなまけり
小休なく衣は袖お花もれども肌さむらぬはなれしらゆき
天櫻する山みえゆけは衣手れさまろたへおをまおけるま
吹く風お心のほくも誘ひて袖おちりくるやまさくらには取
入行春はるぬみとなまて櫻は取ちり掛る境でも香を残りける
さくら花さそふ嵐はなありせはい々衣のそてみやはまし
する花はそまおゝりてゆとま心も寒きまの夕くれ
捨てぬ散花もはらはて歸らぬまけふみ吉野を過まゝるま

田中頼三
植田敬風
成 登
小林盛章
原田信義
間野敬明
同 人
難波慶子
岡田長造
皆木正義
篠原吉一
藤原高英
同 人



あななくは花に下道こえくれと静こゝゆなく捨てよ散える
 志賀比山けふこえくれと春風よの枝ちりかゝる山さくら花
 二〇点 ちる花れみ雪之捨ても寒のらて花もるまよゝけひのね筒
 佳調人、雲とみし高根のさくら今又雪よまかひて捨てふちる花
 地、捨てなくも誰のこ過ん捨ての上まきくる花も心のまやと
 天、春もまよ未だま捨てやま越ゆけり捨てにもかゝる之花流白浪

追加

死に鳴野へ分くまとはろくと袖流上にもするさくら哉

受賞者 植田敬風 岡 千春 中塚正齋

五月分月並題 遠望(雜題) 首夏風

右一題二首以内 締切必十五日

中島静廬
 同 商人
 岡田長造
 岡 千春
 同 田 人
 中塚正齋
 岡 直廬
 和氣清磨
 田中 三



備作和歌會月並歌卷

會員齋
齋垣內岡直廬大人撰

(非賣品)

廿九年
五月

備作和歌會月並歌卷

遠望

月並兼題 首夏風

和氣清曆



歌集締切延期

豫ア募集中ノ雪月花鳥ノ和歌締切ハ六月廿五日迄延期ス

本會員中未タ御出詠無之御方ハ期日迄ニ必御廻送被下度尙他ノ有志者精々御勸誘被下度候也

本歌集ハ本會ヨリ廣ク募集致候ニ付本會員諸君ハ無漏御出詠ヲ煩ハス愚考ニ御座候間右御了承被下度候也

幹事

會員諸君

廣田内閣直屬大人類

(非實録)

遠望

一〇点
そまわかゝ霧の絶間見あさせと心もうらまらとけあり
久方乃雲はあかひて天くさけ沖りはるか見ゆるからやま
のるくと遠の里わを見ませはまゝ一そち短たつなり
はるくと雲おぼひゆる不二根と見てもみ飽ぬ眺也けり
雨とれていとさやみお見ゆる哉夕日まゝは遠方此香は
海はるま打てて見まをむかひある浜間も浮み沖りつり舟
故郷をとほくなかめて我むらし遊む法山を見るそこひまき
雨をま去朝之るお見わたせと遠山はもさやかなまけり
あま引け峯よと見れと遠かたけふのなめ面白きか取
見渡せと沖繩島のはてまでも朝日のみはたなごうまま
雲とみし雲はまこと流雲ならぬ雲井まかむ隠岐のいそ山
玉たれのをちれ濱松のくと朝日乃のなまわらえれと飛

久山壽野子
赤木美陽
間野敬明
佐藤亮一
末澤鴨涯
内田旭涯
小林盛章
喜多島直養
笹岡良風
足羽由清
有木喜多治
河本郡平



見渡せば海原とはくけぬりのみたけの御國乃いさ舟かも
 村雨乃はるゝたえ間に遠方の島路のするよ見えたるの取
 夕日のけかたぬく方みはるけくも霞む高根やもろこまの山
 一五 青海原とをくはれけり一やらの殘れる雲は島よやあるらん
 なるめやる雲のたなまよのつくと白は富士の高嶺也けり
 立れ癒る烟みえるし足引鏡をほのめ取たふひとのすむどと
 打わたは沖の波間お波のみえて雲かどまらふ隠岐洗しま山
 雨はれて雲のあらぬか遠方おねはたかなくも見ゆる筑波根
 見るかすきに船之行方もまら波にたこる煙たけを能ひく也
 雲れこと島根はみえて水や空塔らやみ侍どもわらぬ海えら
 青海原汐路をるかおみわおせは波間おらか淡路志まをま
 眞帆片帆の船お任せていと遠き沖よまかへる千舟もよふね
 兒嶋は海侍りする海士は襟ふけて淋しを見ゆる篝火たのけ

横田 肅齋
 佐藤 愛月
 篠原 吉一
 末國 正民
 丹下 正綱
 有木 喜多治
 河本 郡平
 横田 齋肅
 高取 長貫
 同 人
 間野 敬明
 藤原 正親
 藤原 高英

立おは入野へは朝きり未死ねてかほろみ見ゆる遠の山のこ
 山乃こま入日さひしくとれ初て夕けまきゆるをちけ一ひさ
 いろよして入やゆけけん遠なる沖は小まおけよまを侍也
 雲乃ことおせけけふまれとゆる哉とまの浦乃夕くれの空
 天 見わおせと遠村里お夕けふまけふまのすあは雲井おせけ
 和田は原八十嶋おけてこ死出る舟は雲井おいるかと抱みる
 二〇 雲井おせを遠き海原ゆをぬれと遠きとい侍を侍しら波
 わけ更なる二見は浦は波は上お抱れかあらぬか富士乃遠山
 三保乃浦海原とはく見わおせは空お侍らなる隠岐乃と隠山
 又死はまき烟も今は見渡ま遠里とはけれはさひしをけり
 遙なるおきの島根れとてゆまをかけの渡せ雲洗うきとし
 はてしな死大海原を見渡せとくもとあみとそ一死なまけり
 難波のふこさひて見れお汐風よふよと遠雲や淡路し海山

稻垣 某
 植田 敬風
 小林 盛章
 國富 直香
 喜多嶋 直養
 小原 和一
 久山 壽野子
 末國 正民
 丹下 正綱
 國富 直香
 堤 鉦太郎
 同 人
 稻垣 某



松浦か急波路はるかに見渡せばねもひやらるる諸夫し此山
見渡せばをち流濱邊はさち流はる烟や蟹かしほやなるらん
晴をわさる今日は沖を比島やまの松は梢もみえてけるか取
くはど取る物し取ければ青海原波れのきまはみ空取りけり
旅衣いも夕くまに見ぬぬせえいよふとほし伊豫の遠や函
雲かきる不二の高根をかきりよて眺めえて取き武藏野の原
住調人、青海原取ける夕日は霧はれて目馴るぬ島もを乃みぬにけり
地、沙美れ海士ぬいさ事とは九海越え霞む高ねの伊豫か讃岐か
天、播磨濁なみちばるるみ日は暮て空よ望かあるあは乃り舟

追加

松浦か急みるめはてなき波は上よこへ流せむるぬ唐津やま

四方山えかればみ流るるもぬきにて能けさ吹風よ夏やきぬ蘭

一〇点

岡田諒
同 藤原正親
岡田千春
中塚正春
同 人
篠山正喜
三宅知規
植田敬風
岡村直廬
伊田如水

をしてみて去春といりし暮はてし風なつらし死夏えきふ鳥
大空乃らすみけ衣ぬきときて涼しくなまぬなつのあきらせ
夏させば若葉はこけもさる山なぬもど涼しきのせかよぬ也
花衣またぬ死々へぬとぬへも今とすくまき夏乃ばりかせ
夏されは心地よきか取昨日まで花ふいとひし風よはあま共
夏くまは花やさぢぬといとむて去風も軒をぬぬをける哉
きだぬまでいとひ去風も花さきてははと涼しき夏も空よ鳥
うまど去を花乃上よも思ひつれ風なつらし死夏えきみけと
何となく夏さみけぬし吹風は若葉まそよふあとのすよしさ
浅みどかなめすよしき山はへまそを吹そむる夏の初かせ
けふとまは花ふいとひ去風を木蔭にむかふ夏も来よ所ま
波の上乃霞はこれてき乃ふけふ夏も入江乃かせをすく去さ
花鳥の色香はあまどな山は若葉まかむくかせ流すく去さ

一五点

築山球龜
同 人
篠山正喜
大賀正夫
同 人
末澤鴨涯
原田信義
赤木美陽
倉地敦親
河本郡平
皆木正義
中塚正齊
同 人



仰あみ来て端居ををまて夏きぬど若葉すまて風とさる也
 今日はやびなれ衣ぬ死更でひとへ風乃面みれ侍る哉
 昨日まかみも涼しき朝風花のうらみも吹はらけけ
 昨日まて花よいといふ風なる夏れもあめはゆめを鬼
 夏くと軒はよるとぬ風の音をきくもうれまき心地社すま
 さはぬ道花よいといふ朝風も今日はまゑる夏きまける
 ぎ乃ふまて花よいといふ朝風を今日も若葉ままされ侍る哉
 一夜ふも吹くるのせものまねど夏立けぬもいかに嬉まき
 花ゆふよいといふ風はけふもまを軒はふゆさん夏と成まき
 夏くまを花を殘らておれ花からみど涼しき風を味むる
 春過て夏もさぬらしれ死をもふく風は音さへすまのまけり
 さいさ残る花とさるといふ夏くまをましき風乃ふくろ嬉まき

押坂 榮平
 高取 長貫
 間野 敬明
 佐藤 亮一
 藤原 正親
 同 木 美人
 末澤 鴨涯
 藤原 高英
 原田 信義
 赤木 美陽
 倉地 茂郷
 小林 盛章
 同 山 人

繁るゆふみどり若葉ふも風乃音花のまき夏もきよけり
 雪取ぬぬ卯つ木の花はるるみえて吹風すし川をい流さど
 花乃頃いといふ風もなつてきて若葉を渡る風をすし死
 花の頃いといふ風も白妙は捨てにぬるる飛侍ときよけり
 立て先し霞とれて我やど若葉まかともせりしき
 野も山を夏と来みけりまどまなは若葉上又風もときけり
 昨日ゆて花よけれなき朝風乃青葉まるとくなけりきよけり
 花さるといといふ風をけふも早たをどとしく成みける哉
 花故よいといふ物を花の來て軒の若葉みかせたまたる
 きよふかを花みちみま風もとをけりまどまなは夏と来り見
 おく山の花は名残もまどとて今朝も若葉ま風とほつか飛
 ありなくに昨日か春と吳竹の葉風はるる飛つて来みけり

堤 鉦太郎
 國富 直香
 喜多島 直養
 笹岡 良風
 丹下 正繩
 同 人
 田中 績三
 同 人
 同 人
 佐藤 愛月
 同 人
 篠原 吉一
 久山 壽野子
 末國 正民



二〇点
 夢の間春を以て何れも呉竹の若葉をそよとかせれそよま
 昨日はて花を以ていふ山風をうらなつかしき夏の來よけ
 き乃ふまてあかめ花乃箱と若葉も是る風れそよま
 名殘なく花ち更どて若葉ふく風あつらふき夏ときみ香
 立花のかを更をるる若葉を思ふよきくる風のすしき
 花ゆゑに春を以ていふ風心の心にははるなりまきあけり
 若葉山とるや水かけお流るらん吹くる風お花は香境する
 庭の面は木々は若葉も取まぬれと尙ほさ寒き朝のせ境ふを
 春過てな律やきぬらん若葉山裾野まかともかせ境をしき
 花ゆゑまうらみし風も今こを袖にはたる、頃となりよき
 きのみおもぬきのへまある夏衣一重にけは風流れし死
 櫻みは心どひしるせも能侍れと朝能夕能まはされける哉
 ちと殘る花を尋ねてまゝ入れ若葉をしくのせむる也

有木喜多治
 同山 敦親
 倉地敦親
 喜多島直養
 國富直香
 植田敬嵐
 同 入
 稻垣 某
 高取長貫
 間野敬明
 岡田 諒
 岡 千春
 遠藤正心

佳調 人、大方は花ちままとて若はもるかせなりしき心地を境すれ
 地、なつ衣はさうら寒き朝かせみ庭れふちなみちを境めよけ
 天、花故に心どひしかせも今とてはしぬまき取つと也よける哉

追
 ぬきあへし袂は通ふ朝のせはきけふいとわ去物としも取し
 和氣清磨

一〇点
 身をそて、濁里玄弓削は川水お君何とぞこ穢れさぞけれ
 而ら波おあし流下は、をらまてを世ま玉は江は水と濁を去
 ぬやへ身と千々お碎けてはりるやもいひて横され道不迷ん
 神々せお弓削は村雲はらはで曇らぬ御代は月をみるの取
 墨はめは袖ふきぬ神々せも心何く去乃うさは、まけり
 一そす乃天つ日けきや諸やも小高く、やく君の御名はや

三宅知規
 岡 千春
 稻垣 某
 堤 鉦太郎
 岡本直廬
 小 某
 皆木正義
 押坂 榮平
 築山球龜
 遠藤正心
 高取長貫
 間野敬明



ろたむける御柱たてま大丈夫は臣てふみすれのゝも也けり
 弓削川乃ふみりましぬぬみの君は赤き心けうるはしきのな
 君あててせきやゝめそは弓削川の濁はいかみ澄らへえはし
 國は赤光さゝけし身もて尊之も天徳日嗣はけらるる君の御
 天の日はたはふあやしき村雲を吹はらひらる君の御
 千早振神は御告はたて此はも君取らてせと侍るるさらはし
 道取らてらき亂れやむ和氣川の死とき流まは濁りやはそる
 弓削川のさかばく波を君取らて誰かはるをたせき止むへき
 弓削川乃濁るる波をやゝ光てし君のいさをけいちしるる哉
 天時川間此ゆけの川水漲るをさみものゝえせきやゝ光けり
 千萬の天徳日嗣をのめめけらみとよをねえふ一こやふして
 一五点 大君はみ末をともふまこゝろと千年の後よのゝなきふきり
 澄のかみふ君居まさすを天の日の取や長世かいてるまき蘭

岡田 諒
 藤原 高英
 倉地 茂郷
 稻垣 某
 喜多島 直養
 笹岡 良風
 小原 和一
 有木 喜多治
 横田 肅齋
 佐藤 愛月
 末國 正民
 皆木 正義
 末國 正民

大方よふこりはてし弓削川をさみり功よよてこたす
 吹えふふかせさ取くと天徳日の曇も遠ふこれさらはまを
 村雲をふきえらむけり天の日は光やのゝ取まゝきみのを
 清き水取らていてそを弓削川のみことと逐は澄はのへりし
 君か名はきよきこゝろよゆけ川の濁りも遂に澄らみまけり
 天名實もよ君の心はきとけれと取とあふへき弓削川乃濁
 汚きさるゆけの川波せき實光てきとを操は世も取かれけり
 ゆく水れきとけをえ社弓削川は注みこま又汚きさるけり
 九重はみとしよかゝる村雲をきとくもはらみぬは侍風
 くも更あき君のこゝろのあゝみよも神も誠を移まはまけり
 濁るる弓削川水せき止て死とを名を社世まなかまけれ
 あま侍日をおはひし弓削の川きとをふき辨ひたる峰は侍風
 名もさとし君の功よむけ川はのぬをて世をは御さるまけり

倉地 茂郷
 稻垣 某
 植田 敬風
 小林 盛章
 佐藤 亮一
 藤原 正親
 同 某 人
 大賀 正夫
 岡田 諒
 藤原 高英
 岡野 敬明
 岡 千春
 三宅 知規



二〇点

立洗はる弓削洗川さき若こ終は打はらけれ弓削洗川さき

中塚正齊

弓削川のみこれる水の中より見て汚を以君の名社をよけれ

岡田千春

穢れてふ名をはねへとも中へよきよき心は福らえをに免

高取長貫

上からみと罪をてさの巻弓削川は早き取かれを止しをされ

河本郡平

佳調人、足ればさるるとも我一すちよ臣さる道はふみもかへす

大賀正夫

地、足さぬ身となてまう國洗の先たてし功は顯をにけれ

押坂繁平

天、弓削川はまこりよしまぬ花蓮きよみこは世に句かけれ

押坂勝子

追加

岡村直盛

汚せふ名を負て社中へよ死をさふるを顯はまかけれ

岡村直盛

受賞者 植田敬風 堤錕太郎 押坂勝子

岡村直盛

六月分月並題 池蓮 螢似玉 海邊夕立 (二題一首)

締切必十五日

全 歌合題 旅宿五月雨 月前時鳥 (二題一首)

締切必十五日

淡路内海舟遊大人遊
六月分月並題
歌合題 旅宿五月雨 月前時鳥
全



齋垣内岡直廬大人撰

(非賣品)

廿九年
六月分

備作和歌會月次并歌合歌卷

池蓮

月次之分 螢似玉

歌合之分

海邊夕立

月前郭公

旅宿五月雨



高橋文立

日本文在 卷 賦 正 一 類合之卷

並 歌

新編正目解
貝浦源公

六頁
廿九平

蘭井味齋會日大共齋合齋卷

高取内同直齋大人與

(非書品)

池

一〇点

池水のよこまは極ぬ蓮はけまけりあはるればくらに池
 花とさしけぬを盛るとささみちて朝風かせる池花おもひ取
 風わさる池はえちけのなす葉は涼まきほほを姿取まけき
 みまゑある池はちまゑさる取から露を濁まよまほぬ也亮
 白露の玉みかきてみこまゑいけのさす花吹小けり
 白待ゆ乃さほまゑ玉と打散て涼まさみけりいけはちまは
 をまゝみ開て蓮はねはまてまゑ明えくぬいけは面り取
 蓮葉小玉とみるはてれと露のかかりまゝまゝいけは面り取
 朝取くみれば涼まゑ忍はまは池乃ちをばは待ゆは白ま
 池水はみゑるの底乃ちもろをさき出てみそる花とさす哉
 池水乃よこままゑぬ花はちけゆあててみま心地社すれ
 みこまゑる心すまゝいけ水もみはぬえちその花の盛まゑ

磯部成文

中塚正齊

三宅知規

小野中正

甲高行宣

井上常徳

藤田安良

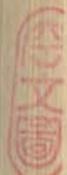
安原多牟

福田郁彦

徳永頼琴

正本久治

高取長貫



庭のちもはけの小こも見えぬは清きもさける花蓮哉
大澤はけけはちを花盛るかかたてて匂ぬるのあ
はちけはの池は濁るままぬる人鏡心は去をりあけき
いけ水も香みよ保ふ也花をちをむをへる露之風もちを
思はずも去とし見てけり我妹子かそかぬ池の蓮は盛るを
白玉乃ほゆをむをる花見れ心もをさしけけのはちも葉
ふく風ふいけのちをすれ露ち玉水さるまは心地社に生
風ふけの池ふさけるをちをみれく白露も玉をみまて
ふく風も蓮の廣葉は長ゆちを夕すし死なれとすけけは
をみまてる鏡乃いけの水底をちけ花乃のけけちけれる
池殿はをすぬわけて蓮葉はゆふる乃露をみるをちまき
夏しらぬやとれを池はとすをこはるゝ露のいと涼も
玉とみしけけのちけの白花ゆと濁りよしはぬ心取けて

遠藤正心
築山球龜
押坂勝子
藤原正親
大賀正夫
岡田常諒
豐福光子
堤錕太郎
國富直香
丹下正細
有木喜多治
入江勝胤

春宿はけけはちけ生立てまこままぬ色も見ぬ
我園はけけはちけさやさぬらん小すもる風はけささ
水清みいと涼しきゆふ風もほち玉ちるいけ乃とちすは
ちけやまき菅田の池まこぬる露もすまき花とすす哉
夕月はけけさ今ともぬまて茂る可ひさる池はさけは
世中乃まこまに去ぬ不恐れいけけはちけ怒るゝのな
はちす葉みかく白傳ゆのこぬれりさ旭まきは池のれも哉
廣澤はけけはみきは乃花とちけまこままぬ色清涼しき
あけ清きあまみ鏡池も生ひ出てさくを涼しき花のちをか取
朝はたさ吹更さる風ま去らけゆ鏡玉とみまるゝいけは蓮葉
池水の小こましぬ花をちを世の人み取ものえと社思る
池水はまこまる中ち花はすけいと清くもさきいでけり

足羽由清
小原和一
喜多島直養
田中續三
笹岡良風
篠原吉一
中島靜廬
黒澤慶明
藤原高英
久山壽野子
久山好子
小林盛章
稻垣狩巖



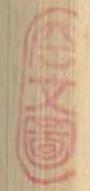
池のゑに蓮の花はききまよふ夕のせもかおにほひけり
 池水はよこまよふまぬ蓮の花ゆけ玉するのせはすまじき
 けけみつは濁る中まよきいで清くもあふ花をちを哉
 おこまゆを世まは習て池水は死ともさける花はちれ哉
 池水はよこまよふまぬ蓮の花ゆけ玉するのせはすまじき
 人皆のこまゆもかくとあふはほし濁ままぬ池はちをちそは
 池水はよこまよふまぬ蓮の花ゆけ玉するのせはすまじき
 おく露は清きこころはまぬ蓮葉は露はぬろさへきよけり
 池水のまこりまぬ蓮葉は露はぬろさへきよけり
 花はちをのをる夕さるの澤の池乃あまもさられさけり
 三〇点人、花を殿鏡をすもる風もかをる也池のはちを花やさけけん
 地、ぬけ水のよこまよふまぬ蓮の色みは清くもさける花はちを哉
 天、池水は濁るま生ひおはるにその清きこころは露もみえけり

宋澤鴨涯
 宮島省堂
 植田敬風
 倉地茂郷
 金原惟明
 植田亮
 難波慶子
 間野敬明
 佐藤亮一
 岡千春
 則安靜の舎
 原田信義
 武藤國光

追加

一〇点
 夕風のさるまよに／＼おまゆ三花玉と亂れてとふをたる哉
 露ふかき草葉かくとよ夜ひかる玉ちとみしとをある也けり
 ぶく風にちの緒をさえて川のゑにみたる、玉ははたる也
 わせ苗の葉未だ露まぬがしくも玉とみたれてとふはたる哉
 風わたる谷は小川のきよ流瀬にくたくるたまを露なまけり
 えさわたる風のまよ／＼亂する玉のとみえてはなるどふ也
 夕やみみ音羽の川は岸はへみ玉とみたれてとふはたるかな
 みなれどふ川の瀬あとのほなるをは玉の光とあやまぬれ鳥
 音羽川岩にせかるゝなみ乃上玉とみたれてとふをさる哉
 白玉のちるのとみしは江戸川は風まみさるゝはさる也けり

岡本直庵
 原田良平
 倉地茂郷
 植田敬風
 宮島省堂
 則安靜の舎
 末澤鴨涯
 原田信義
 原代如水
 高田頑真
 稻垣稔嶺



手にとまは螢なりけり久かき洗み空まざる玉とみぬゆゑ
夕さまも入江ふ玉洗ひかかるかどみえまを返し洗螢なりけり
清さき洗岩間おちくる水の上ふ玉とみたけぞと保たる哉
空まとふはなるのちを池水のそこのふゆかと思むける哉
ぬと玉のやみ路を照を螢をはるもきらめく玉とみそみめ
夕さまをすたはるるを夜ひかる玉と社みめ草葉のこれお
蒲葉はゆゆの光をみまかゝまできらめ玉やはたる成らん
しつかよもゆる螢を音聴え乃川瀬は取みけ玉かどぞみ
宇治川の底にぬるる白ゆゆの螢けのけはち流るる玉とみ
ぬは玉は暗路をらしてとみはたるみや唐土ふ玉とみえけん
水草まを多く螢をわやなくも夜ひのるてふぬほりとぞみる
風わゆるさし洗柳のゆゆへへ亂るるふゆゆをはるる也けり
遊ふぬゆとくさけて流るるはさまよとひかぬ得るる也けり

小林盛章
津田成風
久山好子
久山壽野子
黒澤慶明
中島靜廬
篠原吉一
田中績三
足羽由清
武藤國光
入江勝胤
有木喜多治
河本郡平

ゆゆはくれ風吹みされたるるぬほはやと定ぬ螢也けり
あし洗葉は夕風ぬきて玉の江ふ玉とみされてはたるる也
ゆく水は岩みせかるる山川ふ玉とみとみされてはたるる也
おみまし學ひのゆとをいさめんととふか螢の玉と亂れて
うは玉のやみこぞよけれ夜もすから玉とみぬれて螢とみ也
五月雨の晴れしや取さけ夕つゆは玉とみまははるる也
怪しさにすかくまみれはくたけは玉と光るはやるる也
雨すきしなとて洗露は白玉かまかふひありはやるる也
夜ひかる玉かまかひて川をけしやなき洗のけは螢とみなり
怠りの窓もたまとせらひつゝ照すやるはこゝゆ有る也
青柳洗いとにぬきさる白さまはそるはるの光取まけり
川洗へ洗草葉はるるまを玉とそるる同たるの光取まけり
夜もぬから文かまをるをみかきけり洗螢は玉とひあれは

丹下正繩
國富直香
堤 鉦太郎
藤森恒景
豊福光子
岡田五諒
大賀正夫
藤原正親
篠山正喜
押坂榮平
押坂勝子
築山球龜
高取長貫



雨過ぎきしけや取巻は數みぬてくまけぬ玉は得たる也けり
 草ふかき野へは小みち性夕くれはままとくひけてまふ盤哉
 せみ鏡羽は袖は得たるを集むれば玉を切らめる心地社にれ
 吹風はゆあくまふ鏡は社をそなく螢の似かき取ひけれ
 夕のせも吹ぬは露はた函するをみえまは野魚の得たる也是
 水の土ふた函のみふれは落るるをみゆるは岸鏡をみる也是
 夕かせお露はこ隠れて蓮葉ままたれたたはははるなり是
 水鏡上は光りみえつゝ川乃名乃玉とたれてはぬるなる哉
 草の上にもある盤をかきわさる露の心はとも思ひけるなり
 生ひまける草の心もまはるるもくれば玉と盤也けり
 ふくあせまはたけぬ露乃白玉草葉はすまはるる也けり
 糸はぬく玉かきみまはそれかきて柳ははるる也けり
 吹風は玉とみたれてまはるかゝる葉末はつゆをさるる也けり

二〇点

佐藤亮
 正本久治
 徳永頼琴
 福田郁彦
 中島行宣
 小野中正
 三宅知規
 中塚正齊
 安原多年
 植田亮
 岡千春
 難波慶子
 遠藤正心

三〇点人、山水はあはれさふちを岩ると小玉と之たけてまふはる哉
 地、みふれても盤やふな里柳原つらぬきやめぬままとみるは
 天、夜ひかる玉かきみしは池乃面のえちをなはかる盤なりけり
 追加
 以せは海やふる江は蟹のくひくやま玉とみまきてまふ盤哉
 海邊夕立
 海士小舟とまふ之隙もなる空小とやま里のへる夕立はあめ
 鳴神とまはれ海つらとゝるきて夕立更なる雨はあめしたて
 舟人もとまはるるへはぬらそらん袖の浦里のあふまはち雨
 風きはふ江はあし乃足とくも浦里ををくるゆふさちあ光
 海つらを雲立ちくしゆふまの雨ぬり境くくうらは松えは
 わしかの嶺はうき雲みるるうち小夕立也田子鏡浦も小
 磯山は松も夕日はま取のち海士は皆屋小ゆふさちあ光

一〇点

岡野敬明
 藤田安良
 井上常徳
 岡直直
 小野中正
 中島行宣
 井上常徳
 藤田安良
 安原多年
 福田郁彦
 植田亮

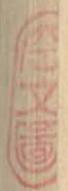


大ゆるき此磯山松雲かけて是をやそしくゆぬさちの降
 見るうち淡路島山かきとて海士此菅屋み夕立をる
 みるうち涼しきわとを浦松にのこして過る夕立をる
 夕日あけむらひの松をさし取ら須磨浦を夕立のふる
 一しき夕立をきて朋石瀧をさるもゆゆくわえちまやま
 みのけちの海は浦の夕立はそれてるち涼しきまける
 いそ山乃松の枝くら雨雲流かゝる則石はうらけゆぬさち
 以てさひの蟹は小舟はへまざる沖邊をめぐる夕立はあめ
 海士け子の舟歌うまふこをやみて夕立をくるうちまま山
 みるかうち濱松原かきくまを網干かゝるゆふ立れ雨
 天浪乃音もまはまはけまの鳴神乃ひき流るをそくる夕立
 淡路島かさをもきて見るのうち須磨浦を過る夕立
 一尺ち此想のこして沖をわく小舟さきはぬいそはゆふさち

藤永 恒景
 正本 久治
 難波 慶子
 間野 敬明
 佐藤 亮一
 高取 長貫
 遠藤 正心
 押坂 勝子
 押坂 榮平
 藤原 正親
 大賀 正夫
 岡田 英諒
 豊福 光子

富士の根おろし今朝は雲ならん三保は浦わみ夕立は降
 和田は原帆かけかする見之初て磯わおのくる夕立はとも
 須磨明石夕日流るけのさま取のら夕立を取置るを大は浦
 夕日あけを去くる汐を波は海士は尙待てぬら夕立はあめ
 入日のけ沖乃か帆帆みさまなから由良乃みそき夕立は降
 夕日かけ浦の乃松は見ぬなら海士の菅屋みかざる夕立ち
 海乃上夕立をらし盤かは此ちらの娘取入たさわく取置
 而はけ子のささまき袂しはまゆの家路をいぢ夕立は流雨
 夕立ははるるそあは蟹の子はいぢるまいて貝のるぬ也
 をし保やく烟はぬいてかきくらしうらけをばや夕立の降
 舟人乃とあまきればふゆゆも取去さ過るのさちやは浦
 白雲えうまゆの山まかゝる筒須磨はうらへふゆふ立るする
 ささ乃海や汐路とるのまかきくま夕立ちをそま天乃橋立

藤森 恒景
 堤 銚太郎
 丹下 正細
 横田 蕭齋
 河本 郡平
 有木 喜多治
 入江 勝胤
 武藤 國光
 小原 和一
 喜多嶋 直養
 田中 績三
 笹岡 長風
 中島 静廬



二〇点

ゆふりく日電かよ小島ふてて取のちうらわを暗く夕立の降
久方此雲井とれて海原のちをわのしきうらけゆふなち
見るかうちみ空かきくせて吹風は音をなほはけ濱は夕立
夕日かけ沖の小島も見え取からいせへは松本かゝる夕立
はを網をぬらそまもれとさわく海又一村過るうらけ夕立
舟人の笛ふをわはも取の足見いそわをすくろゆふたすの雨
はまの浦はいそへそきゆく夕立を小舟の笛をふく隙も取ま
入日かけ沖の島根おさまのらそを此浦わみ夕たちのふる
かきくを思ふもあけぬ夕立をせまふきあへすさむく船
夕日のけいそ山松本みえをわらわまれとほや夕たち此降
鳴神は音をさききて矢島の追手まかき夕のちけあめ
みるあさちむら寒さわき舟人もと取あむす夕立すけ降
汐千ねとををさり居る浪の子の歸る体もあも過る夕たす

黒澤慶明
久山壽野子
久山好子
津田成風
高田頑具
椋代如水
金原惟明
末澤鴨涯
宮島省堂
植田敬風
倉地茂郷
原田良平
喜多村七十七

夕つく日沖れ小島よてとあひら磯山もともぬますのふる
とま松乃風れと高くさこえぬと思ふはも取く夕立ちるす
夕立え今ふりくらし小わるさ此磯ゆく人もあちさむく取
笠岡と入日さしつゝ海越れぬか根ぬかゝるゆふまちれくも
見るかうち磯此松原かきえれま波立さむき夕立ちれゆる
三〇点人、あまれ子か笠とるひまも荒磯は波たちさむき夕立ちれゆる
地、磯馴れ松もほとくのさくれて夕立さむく和田れおそま
天、あはれ松も夕日の影とみえなら夕立すらしさけ豊れうら
追加
みるかうちみままはれ高根もあけくまで夕立過る浮島かえら

稻垣狩嶺
小林盛章
藤原高英
岡千春
中塚正齊
篠原吉一
三宅知規
國富直香
岡田直廬

夏季歌合

月前郭公



左持 五月雨の雲はすきま小月もきて今とどなれる山をどきと
 右 五月雨はとを函を待て有わけの月よな死ゆく不とさけ哉
 判 保とさきと雲間は月よ有わけの月よ取れるものぞらさ見
 左勝 折しもあま雲間をもるる月のけのさや又なの星をゆく子規
 右 月と雲空を空にこめてゆく夜の山松か枝に鳴保とさきす
 判 松か枝になのはあまど郭公くも間ををらす聲のさなけさ
 左 雲かある聲をもらして更科や田毎代持さよ鳴保とさき
 右勝 雨それと雲間の月のさやのにも一聲もらすをますとさきす
 判 保とさきと田の面は洩するまとも雲間の聲は高く聞ゆる
 左勝 ささのよもなくを外山の時鳥月はなか糸のまはまかよりて
 右 もを以てる月よ一聲なきとて雲のくれゆくほどさきす哉
 判 取さとて雲のくれゆく聲よを高根の月けかけを亮けさ
 左 時鳥取きて入りよし雲間よをれりる月よ行方やとさき

岡田 諒
 磯部 成文
 藤田 安良
 堤 鉦太郎
 國富 直香
 安原 多年
 丹下 正細
 高取 長貫
 横田 蕭齋

右勝 さやかなる月れいつこ隠れけん一聲なきを山はとさき
 判 あきて入天り雲間はこはあまど月よ亮き山はとさき
 左 月かけはさやかなる音をもらま筒雲間過ぎ行山をどさきす
 右勝 村雲はやかても晴をて更る夜乃月よなくを山はとさき
 判 さやかなる月よなと音の夫もま夜更てなる聲は哀れさ
 左勝 時鳥をよめて待ままかおも有明け月よ一あまなくはとさきす
 右 時鳥をよめて待ままかおも有明け月よ一あまなくはとさきす
 判 はとさきを待しかかある一聲よれあれる月も思はさきけ
 左持 五月雨のこれてさし出る月のけは聲もさかか取く郭公鳥
 右 さやかなる月をうしろは時鳥一こ取きていれさゆきけん
 判 五月雨ははれ去夕も月のけのさやかなる夜もうましの星見
 左 むら雨の露をそまきとる月けは山は暗はと死す
 右勝 明石かた風をさ居れと久方は月け出まをまかきと死す

徳永 頼琴
 井上 常徳
 河本 郡平
 間野 敬明
 有木 喜多治
 喜多嶋 直養
 入江 勝胤
 中島 行宣
 武藤 國光



判 明石のさやけ死聲はる月乃の夜らの山も及はさまら
 左勝 以ねもせて待てまのひそ有明さ月よ一こを取を不ど、死
 右 五月雨のけふめ夜らまう晴れ渡る月乃をな取く郭公鳥
 判 五月雨ははれ一夕はこをとを待まかひるるおまのけの月
 左持 時鳥聲はすも見えさるは月のあけらのかけまあくらん
 右 山の端の月のあまを郭公うけもあらまおなまわさるる取
 判 何とよきを桂のかけを山はもの月おなれるものしらさ
 左持 待居まの月さし出て、郭公こをまをけく取まわさるるな
 右 さなかなる月さみ取を郭公何をさらとて取まわさるらん
 判 さま出て取く取る聲もてる月を共おさなけき夏はとはの取
 左持 さなのみを聲さこゆ取を時鳥月はわをなまわさるらん
 右 弓張は月横死して不ど、さける矢はせしと取まわたり見
 判 さやかよを死して過る一聲はいる矢よも猶劣らさまけり

植田 亮
 大賀 正夫
 篠山 正喜
 足羽 由清
 小原 和一
 正本 久治
 田中 績三
 藤原 正親

左持 いさよの月すみ渡るるなまよて一聲もれを山保とさす
 右 やみにさ聞えとのしき子規月さしいて、こをさやのな
 判 てる月のかなぬ声もさし出て取くねも同じ山不どさす
 左 夜もはらら給すて聞けを時鳥さななる音を月も鳴るん
 右勝 弓張は月まなくある何とよ死す屋嶋はうらに聲はまこゆる
 判 ともすうらさけとなくとを哀れさは屋嶋は浦を死く夜也見
 左持 つれづれのなのさはえれて照月まなくねさなけ死を時鳥
 右 一聲を月おのこして待とよさす待乳の山まなまをさるる取
 判 五月雨は晴るる夕も待乳山あつらまはをせれすのせけり
 左勝 月をどる杉はむらなすさういてさやの取取れる時鳥のな
 右 こをのみをさく時鳥の取まや今宵乃月まかけみせんと
 判 光つあしくみしりけよりも杉村を立用て取くこをの亮けさ
 左持 何とよさすなまも渡を夏れよの月よこをある心地社を

原田 信義
 笹岡 長風
 篠原 吉一
 遠藤 正心
 福岡 耶彦
 中島 静庵
 宮島 省堂
 黒澤 慶明
 藤原 高英



右 一こゑをえまして過し時鳥の音をたどるにほちゆくらん
小野 中正

左勝 月影をゆくとも月よこゑありと聞もかぬみ乃こころ也けり
雞波 慶子

右 此きよき卯は花月よれもしろしほる鳴ぬ山田とよき
久山 壽野子

判 うれ花は月夜とわれと明石かぬこゑもさやけきやま郭公鳥
久山 好子

左持 ひどりれみそけ思ひ居まえ月影心ゆりけみ鳴同とよき
押坂 勝子

右 五月雨のくも乃絶間の月かけよこゑもら山不とよき
津田 成風

判 も乃思ふ軒と月よ五月雨乃雲まよあくとこゑわかえらす
築山 球龜

左持 短夜をよしとに入きて待居れ月をみととや鳴森とよき
押坂 榮平

判 ねやけ戸よ入まえ程を有明もあゝねまゝるく山田とよき
小林 盛章

左勝 天乃原清けくてもる月かけは行方もみえて取く不とよき
高田 頑貞

判 一聲をぬりの木の調は月出てかけをみせ簡取く得とよき
稻垣 符嶺

左 ありあけ月よ村雲のゝあめとあふけえはるま取く郭公鳥
喜多村 七十七

右勝 心あふえ行方しよせよやとよきす過み一方を月は去るらん
金原 惟明

判 村雲のゝるはあぬ心地去て行方しらぬし山はとよき
中塚 正春

左勝 一聲を月かありぬるとはありまきくはくもせ銭やは郭公鳥
岡田 千春

判 杜宇のきの光鏡さしけれはえつらまれもりを出かてよなく
佐藤 亮一

右勝 雲間取るとは一こゑもえつかしの森の木あけは出やかぬ蘭
則安靜の舎

判 明燈むる空よ一こゑ得とよきは落行く月もあどをおふらん
則安靜の舎

右勝 有明は月よいとあゑ取さそてよ雲ゆくれおまをよとよき
則安靜の舎

判 明そめし空よあゑ取る聲よかも雲のくれまわとよき戀しき
則安靜の舎



左持 てる月にあみかれいてし子規あもさやか小籠さ渡るなど
 右 得とさけなくこゑ聞は中へよてる月と更も亮けかり鳥
 判 得とさけ月とあみられ月と声は亮けしい花れ優れ更
 左持 ありわけ此月を殘まてやどさきそ今一ふゑは以長き行けん
 右 人の世と思ふぬほてに月さえてみ空よなるほどさ死す哉
 判 もあ共よあかぬ心のみえぬればさまて分るさ品もあらしな
 左持 久方終すしき月と得とさすなきつゝ過る聲のさやけさ
 右 五月雨もはれてうれしき月とけは聲をそやのさなく郭公鳥
 判 五月雨終ふりもぬらそもさやのなる月と啼ねえ變らさ見
 左 ありわけ此月夜なまけし子規過さかてなれををち返り取け
 右勝 さやの取る月と一聲取さすていつち行けん山はとやきけ
 判 ときこのてに取え夫とりも子規い聲ち行けんこゑのこぬして

旅宿 五月雨

植田 敬風
 三宅 知規
 倉地 茂郷
 原田 良平
 末澤 鴨涯
 豊福 光子
 藤森 恒景
 青山 涼子

左持 けふもあはれぬ五月の雨こそを旅は宿もは軒はさししき
 右 ぬまやらて日敷をへつゝ旅ころもくさの切る迄梅雨乃ふる
 判 五月雨と旅は軒端も日かそへし衣のうてもくちやのつらん
 左勝 旅宿も絶はなくふる五月雨に今日れ一日もあたますこしつ
 右 日をぬるぬらぬもさい旅草枕ぬ夜かさぬる五月雨の頃
 判 たい枕二夜とあれとなかへに一とぞ殊まわひまかりける
 左持 我門と鉢や早苗をうゑりらんさいねれやとよ五月雨乃ふる
 右 さらぬさ小淋まよりり山乃へは旅はいそを小梅雨のぬる
 判 故郷をおもふもあはれささぬさ小淋まかまはる五月雨の頃
 左持 かりあめは草の枕も幾日かすあるもわひし五月雨のあろ
 右 急くむき旅なすねども五月雨はふるさ情な死物もを有ける
 判 いえ日敷取るもわひし五月雨之急かぬ旅もけれなかり鳥
 左 家小居るに淋まさを友も取き旅はやとりよふれる五月雨

久山 好子
 難波 慶子
 押坂 勝子
 久山 壽野子
 遠藤 正心
 有木 喜多治
 三宅 知規
 堤 鉦太郎



右勝 さらぬまわひしきも乃を獨は旅は枕まてぬれ乃ぬる 間野 敬明

判 五月雨之枕まきくろわををなる同志友なきさひみはあき共 入江 勝胤

左持 さらぬまわひしきものを旅の宿明なきはなる五月雨の頃 田中 績三

右 いか迄の日數ふるらん旅ころもしめりうさある五月雨の頃 篠山 正喜

判 旅のやどいとかなしきかきて又ふるらんとも云ささり鳥 喜多村 七十七

左持 旅衣日かをゆくとまさみされ袖うるほむをともわふ哉 岡山 千春

右 さまぬれ我古郷れたてれておなしあろのをどは柳も 藤田 安良

判 これもまた云ふへき節は數みえて品定むへき程ぬももなし 國富 直香

左持 我袖之くもを果能んぬくそのも旅乃まくらにさみぬれの降 中塚 正善

右 五月雨おゆくての川えとまり鳥またや今宵をこよ宿らん

判 我袖洗くぬれぬひし水ぬきて渡りわつらふ程をさひまて

左 故郷をさちいてしよ旅のほものさねてけぬも梅雨れふる

右勝 わらまきと眼を也けし五月雨のよる里まのぬ旅は寢覺めと

判 旅衣のさぬる雨もさひしされかきここと小寝さめ也けり 足羽 由清

左勝 五月雨は夜ももどろよはとよきす旅寐は空ふを渡る也 藤森 恒景

右 五月雨乃ふるやよけふは行暮ていふせのちぬれ木曾乃旅哉 高取 長貫

判 何ぞよきは暗壁れみは聞ゆるいふせ飯ぬぬいふせき物を 磯部 成文

左持 一夜ぬお猶もひしきを旅のほも幾日のさねつ五月雨のやや 小林 盛章

右 さらぬたにけふも物ち死旅衣ぬる五月乃あ光つみりな 笹岡 良風

判 重ぬると先をいぬし旅衣ぬらそやこたえいとほ欲しけと 小中 五

左 さらぬぬま淋しきをを旅は夜は軒とぞ境く五月雨の音 丹下 正繩

右勝 草枕たひれややまは淋まき小日數のさきてさみたれのふる 中島 静廬

判 さらぬぬお淋しくはあまと五月雨は思ぬ旅は日數重なる 五本 八

左 さらぬぬお枕置けさぬひ乃夜お物おもとして五月雨れふる

右勝 さらぬぬお思ひしき物を旅枕ぬさめの窓おさみぬれぬる

判 五月雨おものも思へとさらぬぬお思ひまき物はぬさ光也是

左持 旅枕はせろみ々結しさよ中み宿もさひしくさみあまの降
 右 旅ねる枕つゆけく五月雨のふる里をのみしけよ夜半か取
 判 さひはくらほとゆみ兼しさよ中を故里しけえやても断けえ
 左持 これ間あくる五月雨ふ今宵はなかさ結て宿るなひ衣の取
 右 ひとりのみ結ふ旅の草まくらいとさ淋しき五月雨乃ら
 判 なひ衣から結て宿るもとも猶くそのまくらも淋しかまけり
 左持 世代うきを重ね旅ばかり舞しめまかちある五月雨のころ
 右 はてま取ふるるや五月の雨こもりいとよひまき旅の宿哉
 判 よのうきを重ねし旅を雨こもりあもるも更ひま五月雨は頃
 左勝 雨ふるもわふ友をばなけと旅枕さひしき宿たさみされのころ
 右 かそのむれ長き旅ねの草まくらこさゆさゆしき五月雨乃頃
 判 のされをの長き旅ねものたせあふ友取死宵之殊まよひしも
 左 日敷ふる草乃まくらけ五月雨ふるそくはもな死旅ころも哉

正本久治
 金原雅明
 小野中正
 河本郡平
 藤原高英
 徳永頼琴
 福一因郁彦
 稻垣狩嶺
 安原多年

右勝 故郷まかよふ夢さへさめはてと旅ねさよまき五月雨のころ
 判 日敷ふる五月の雨もなひふるも夢さめて社でひしかまけせ
 左勝 日敷ふるくちやとゆらん旅ころもなげひまも取く梅雨の降
 右 故郷にのへる夢路もうち思ひ心さひまきみぬれふる
 判 日敷へてくちん袂まくらふれをゆえちよまめる袖わ物かは
 左持 あはの道もおもむから取く五月雨またもと断け死草枕のな
 右 道すのらぬれまをぬまし旅衣をそとせまきみぬれ空
 判 なひ衣をそとまも取し五月雨またもすの道をも思ひやり侍
 左勝 五月雨はふる野の里も旅寐して結ふ夢さへふるさ日ろあき
 右 降おどの淋しきさよまぬもやらで旅は思ひにたさぬ五月雨
 判 雨乃音も結られぬ宵乃夫とまをそとせぬ夢さやいふせあを願
 左 五月雨は旅のやとりのさひしさを昔なぬもれと軒の玉み侍
 右勝 草枕たひはととりも袖ぬれて古まどまのよさみぬれころ

植田敬風
 佐藤亮一
 黒澤慶明
 植田郁亮
 横田肅齋
 倉地茂郷
 津田成風
 藤原正親
 小原和一

十三
 十三
 十三

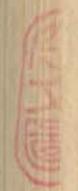
左は伊田ぬしのみ歌と先は幹事手許にて紛失せしを以て往復端書にて再出詠を乞ひまに之
からずを日敷を要し本巻印刷中に到着せよと付乍不本意巻末に載り幸お恕し玉えんことを
祈る

一〇点 池水はよきまよしはぬ花をちそかをりゆりまく咲出おけり 伊田 如水
池水乃空こようつれる白玉は空よとしかふはふる歌ぞけり 同 人
見ゆるうちお須磨は浦松のさくれて淡路島根よかゝる夕立 同 人
有明れ月をのこまて同とく死す只ひとこゑよあさわなる也 同 人
ふいほをらわいよの足音のれもなえて日をもる梅雨乃頃 同 人

新刊 内閣文庫蔵 大人 蔵

廿九年 七月分 編作和歌會月次歌卷

月次歌題 社 報 録
水邊夏月



齋垣内岡直廬大人撰

(非賣品)

正廿九年
七月分

備作和歌會月次歌卷

月次兼題

社頭蟬

水邊夏月

納涼

早秋
雨中吟人



受賞者

藤原正親君

難波慶子君

則安靜の舎君

八月分兼題

賴政、浦早秋、雨中待人(雜)

右一題二首以内 十五日締切

會務整理上甚困難致候し付會費未納は御方
至急御全納下さる度候也

明治廿九年八月

幹事

會員各位

納涼

一〇点 風やとるむの森乃下らみぬくま秋終心地大そすま
去て去て休ぬ松鏡一たかりみ袂はまきのせのとぬ取
松か根み見まど清水を流こまねたて夏之い花み流ゆぬ
むる流間流暑は何地ゆぬみけまをどそまき野流夕のせ
川風ぬぬむをぬさ下へのけ之夏と去をぬき心地こそすま
朝風を松乃木のぬ流いは清水むぬぬたも空も涼まかまけ
月さぬる柳はま枝むすおきて又のけま乃栗ま之せん
端居去てあゝ先わかさん明石瀾波をそまき月のひかま小
水登りか死根は小草露をまて庭は面をま取つれぬぬ風
衣手はま里は木かけみ立をまをま去ます涼まかまけ
月かけも涼しかまけまぬぬ風夏をまをる川つら乃やど
風ぬぬるのむは川瀬は夕まみ夏のぬ花さく水みなかせ

徳永頼琴
築山球龜
押坂榮平
押坂勝子
秋山誠明
植田亮
同五人
高取長貫
中塚正齊
同五人
福田郁彦
小野中正

水清き五十鈴乃川のや龍沈のけ枝をまきて涼とせほしを
 大川の水よりつらふ青空きののけをこき行と舟れそとまき
 立とまは楢の廣葉よ日をさへてほさき又秋の心地を授すま
 山深みうき世の夏もしらぬまて松ふくわ勢の涼去の里けり
 めせろよと楢の木のけけ夕涼み寝つの外なる心地を授すま
 むねもそよ龍沈へき業を勵み置て涼む夕寝ことよままき
 夕さきと暑もねいも月花れててむそ娘嬉まき庭れ眞清水
 隅田川こき出て見れと風なきよ波のとるさへすまの里見
 やま水のわとふき送る夕風小あふゆさへ小控涼去の里ける
 山かけの清水かもとよ休へえはや松のせよ雨さやのとへる
 川岸の柳れのせよさそえまて夏をと終なるゆふそよみせり
 そよみせまその夜れ見て月影え枕のやゆかかふふさふけり
 心とけける日のけも今そよを授めて涼しき風小夏を思まけり

遠藤正心
 原田良平
 同 人
 伊田如水
 立花勇一郎
 花房正綱
 篠原吉一
 岡田諒
 同 人
 丹下正綱
 豊福光子
 藤森恒景
 田中續三

晴更なる月の桂れかてふ露をさし下しけりあそ娘れまき
 夕立と雨と龍沈とまて吹風よさよ波とそるさしのそよまき
 道のへは森れ木かけよ立よれ之すよしかりけり松の下のせ
 葉櫻の風をほらつよ隅田かて川邊れそよみこよとまきかな
 蛙なと小田の細もちなとまけり稻葉をわなる風をほつかあ
 涼しさは夏としもなま龍かよよすみまのそけり森れ下庵
 ゆわみしてそよゆふ庭をまほよへえふと夕風や涼のりける
 瀧の音のりそかみゆるよ涼まきみ休む木かけと夏寝か里見
 清瀧れたる河内れそよしよ小暑わすれてひるる寐よけり
 夕とまを海段間か授まと思ふとも行ききて控涼む鴨の川れり
 ぬけ渡る川瀬の水よけきそみて夏をこ龍ま去舟沈なのよ龍
 谷川け音せきこえて山松のかけよまかてふのせのそよまき
 すみぬ川水沈まよよ舟うけて月ゆつ程はずよしかりけり

喜多島直養
 津川渡
 同 人
 笹岡良風
 小原和一
 倉地敦親
 宮島省堂
 同 人
 久山壽野子
 同 人
 堤 鉦太郎
 同 人
 則安靜の舎

二〇点

風そよみ松は木のけのそよしさにまをしを夏も思ひさき
玉島は浦のゆゑのまのいほと夏ををぼる風やのよへる
月かけ舟棹さを行けと墨田川夏も朧のるゝたうちこぼれ
うちそとくせみは小川は夕かせとみそ々ぬ袖も涼しかる
涼まさ夏ををそとて隅田川をなきのかけは夜は更け
吹風を海門の戸さして月影れのぬふとまてを涼みまてけり
舟寄けていさや涼まん玉とまけ二見乃浦は月もいでおけり
舟うけて涼て夜頃は志賀のうらしのすかお社夏をかまけり
涼まさに庭は小池をめぐりし月を見ま間も夜は更にけり
夕風は波のゆよくこき行けは夏を朧のをて涼しかりけり
墨田川波はゆよく舟うけて涼むゆふへえ夏とまも朧し
いりはあれと隅田川原も舟うけて月を見る夜を涼かりける
我門のいせら小川もゆふへへ涼まき風はふちとなりおき

同 人
高田 頑真
植田 敬風
同 人
國富 直香
河本 郡平
有木 喜多治
同 人
丹下 正繩
佐藤 亮一
同 人
難波 慶子
同 人

月もよま吹く風涼く隅田川よむはこゝますみあひさん
月清き隅田川原の夕すみさをあらわ死れこゝちこそすき
松風は秋のこゑまて山はへの木乃下かけは朧ほどまをなし
ひよの間のあこも今は朧のれけん夕すしき川をひの宿
夕風は袂まのともまかせは夏のはなるこゝちをすれ
隅田川花のみはさひに涼む夜は夏としも朧死風乃ぬ死くる
夕立ははれ行く空は雲間よもそれい夜る月の影のそよし
月かけの水まうほとてさゝれ波とる境涼し川つらにをど
松の枝にたゞさる雨はまほくさへ月お朧りゆく夕そしし
立よれば袂すししも本はみ川朧とくならぬ夕のせやふく
ひら雨はあとなくそれで夕月のてるかけはし川つらの宿
さゝ波のよるは涼しきみなせ江も暑忘れてふ朧あろひせん
宵ゑとてし早苗からへは風見えて衣手をし小田乃中みち

同 野 徹 明 人
福井 慶太
藤原 正親
遠藤 正心
伊田 如水
立花 勇一郎
岡 千春
同 人
中島 行宣
同 人
安原 多年
藤田 安良

とひく、乃涼みの床と寝まよけを清水なかる、松の下ヶけ
 沖へも波はとるく、ふを風を待とるやとは夏なかにけり
 とへう終まひるは暑も白川はなみ流よるこ境涼まよりけり
 中庭風に池はさ、波うちよれもきぢぬ人もつとひきま鳥
 風見たる音もきこえて櫓かまはぬもどは庵も涼まありけり
 秋きぬと思ふとあり又夕くまの川へ流たひと涼しありけり
 風もなるすみ川原の夕す、みらき世を夏も忘れはてけり
 岩の根に清水かもとよ立居を夏なはさき心地ころすき
 夕月此影もすみ田川はへにふきくる風さす、しるしけり
 涼まさよ更け行鐘も鳥は音も端居なからまきうぬ夜寝なき
 川風乃たぬす吹くる橋乃上よ月ぬち居れもな流ししも寝し
 三〇点人、ゆく水は音も涼しき川流らふゆふ風さへもぬきぬる寝し
 地、夕月ののけようかきて風もなる里川のひげ、しかまけり

同 井上常徳
 同 福田郁彦
 石井千尋
 同 高取長貫
 岡崎芳樹
 奥本黍丸
 徳永頼琴
 篠山正喜
 安原多年
 國富直香

天、池原之孫よそ、しも花はあすこほる、つゆの月よみ文の、

追加

何とひきてひるは暑をゆぬへ、語るもそ、玄川はひは宿

社頭 蟬

一〇点
 何となく心ゆめしく聞えけり神れみや居れぢみれこはく
 千早振神れみまへは松か枝小なくねそ、しき蟬れもゆみ
 瀧のせの音もきかひてなむ蟬は聲のまくまのふるの神やま
 神垣は松小をかりて取せせみも何の願ひのありてなるらん
 石上布留れをまぬの松の枝も取も涼まきせみのもゆこぬ
 千木たると茂るさかきの梢と涼まくもらすせみのこぬ哉
 夕立のやみし日よまの神垣も取こり涼しきせまのまゑか取
 ねきことのありや取まやえまら共神のみ前小蟬を鳴取る
 幾多いもくま返しひ、聲さのくあそ乃み前小蟬を取るなる

藤原正親
 岡 直 廬
 岡崎芳樹
 奥本黍丸
 徳永頼琴
 同 築山球龜
 同 押坂繁平
 石井千尋
 同 人

神の死の森乃ゆふ風ふく過、ふふえく、落るせみはこゑ哉
 夕風またえく、おちて神垣はあふまけ、まきせみは聲か取
 せ、まくも神を死くらんみゆえさす神は枝おせみは取く聲
 夕立はこもてやま後の玉の死を聲さむけくせみのあく也
 廣前の松もそりてなくせみのあえはやみけりぬさの響よ
 めけ深き神の社は木のくまを鳴く蟬は音と身にたしみける
 奥ぬかき神の社おなくせみはこゑもまくをて涼まかまけり
 神かさ松よの、まるゆぬ立れ風もみさる、せみは聲か取
 一まき雨やそきけん神杉はぬのきこする又蟬はをむと
 瑞垣は聲ぬまて、なくせみと取能珍まとみもきくらん
 うけせみの何をいれるか神垣は御前は松もあまはへてなく
 夏くれえあつぬの杜は木のえとに何を手向と蟬は取くらん
 命をもちのる成らんらみ山は杉のこゑもせみは取けるは

藤原正親 人
 同 篠原吉一 人
 皆木正義 人
 岡田十諒 人
 丹下正細 人
 同 河本郡平 人
 同 有木喜多治 人
 同 豊福光子 人
 同 國富直香 人

うら日さと宮屏の杜のこかけ又涼かくな、やせみの諸聲
 神さふる宮は神はこす系はてゆらくはらまはせみの諸こゑ
 神樂聞さねち鼓の音やみてこそ系ははるせみはこゑのな
 取く蟬の聲もそ、まく聞えけん國のやまろはもりの下のけ
 松杉はかけをいれちと頼みは、神のみあき又蟬は取くある
 夕立は登むをせしと千早振神はみてるみせみは取くなま
 夏取ら秋津は宮はのみすきみとを涼しくせみは取く也
 廣前のなみ木の枝は取くせみと神をそましくきあしめは關
 千早振神路のやまはは風はそみてきとゆるせみの諸こゑ
 村雨はをて涼しき住よしの神はみるさませみは取く取る
 開谷の社のを神はをもちあふ系す、まくもせみは取く也
 夏もよせの杜の木かくまに聲もはしく蟬を鳴取る
 神路山み松は松のけこゆけとまくる、蟬乃聲そねさぐる

田中續三 人
 同 喜多島直養 人
 津川渡 人
 同 笹岡長風 人
 小原和 人
 倉地敦親 人
 宮島省堂 人
 同 高田頑真 人
 則安静の舍 人
 同 人

二〇点

神なき小生そふ松よこのころも清くそよしき蟬を聴く
清瀧に神はやまろふ聴くせみはねのか論を以るなるちん
千早振もり神のそらくれにすくしくこはを蟬はこゑの
夕立にけまき此社を過ぎゆけと涼去くお成るせみの諸こゑ
あつき日をさぐらの宮に神垣は聞くを涼しきせみはこゑ哉
千早振神のいかきの鈴すきにこゑふりさすせみの聴く也
夕立之社をすきて聴くせみ乃こゑも一玄不すゑのりけり
夕立に杉乃木かけ乃ふるを去ろ又も去くるゝ蟬乃もろこゑ
千早振や去ろに去るき神すきの一きこさかくせみのなく也
石清水なかまは聲をあらひけん聞くも涼去きせみは聴く
千早振神乃宮居乃木のくまもさくも床去きせみ乃こゑかな
聴くせみ乃聲さへ高く聞ゆなまふるくまけを神杉乃上も
開谷乃みかき乃杉乃ゆふのけて聴くも涼去きせみ乃こゑ哉

久山壽野子
同 支那の人
植田敬風
同 人
喜多島直養
豊福光子
皆木正義
岡田諒
横田肅齋
難波慶子
佐藤亮一
花房正綱
原田良平

打あくるのくらの音も去らへは、案よりたけす蟬はもろ聲
まるのほはる神乃垣小聲さの、何を以てて勢みは鳴らん
神かき此にか死の松もゆふのけて何を願ふとせもの鳴らん
いそのかみふるに社の神垣にこそゑのせみの聲去くるゝ
石上ふるの神を死さのければ涼しくおけるせみのこゑの聴
まこゑ聴死神はこゝゆる石清水聲もすゝしくせみを聴取る
まけりあふ松ふるくれを神垣まかくれぬも乃ば蟬はこゑ哉
千早振神はみほへの湯花か枝に花のあときはを蟬を祈れる
三〇点人、雨を以るみくま望山の山松も去くるゝせみ乃聲を聞ゆる
地、神さひし田中のもまはまの繩も打はへてなをせみは諸大を
天、夏は日は熱田はまの梢よりすゝまくおける蟬はをろこゑ
追加
神なきは森乃みかけも立とれば夏もしくるゝせみ乃聲かな

岡 千 春
小野中正
藤田安良
植田 亮
同 人
押坂榮平
篠山正喜
奥本黍丸
國富直香
高取長貫
難波慶子
岡 直 廬

水邊夏月

一〇点 立並ふ木乃間をもれて池の山小涼去くうかん夏はよれ侍
袖はらぬ川風すし隔河川夜をまてとばおもてまよ
も去まはく加茂川水すまよま月もよなく影宿すらん
加茂川れきよき流れまかけもえて涼去く宿る侍れは月
のけひもる庭に清水はけまさを結はんとてや月の宿れる
ぬちとまて岩井に清水を凝てれ雪まよとる能乃夜の月
谷川に能かる水小そしくを影うけりけ夏乃夜は侍き
初瀬川舟こきいてつさみれえ今は暑さも去ら能みれ空へ
雨はれて水小すつゆ影をますしさをぬ夏の夜乃月
六月の掬られもれせも見ぬ哉岩井のみりよやとる月のけ
本のれはよとむまもなま難波江は芦此葉分け短夜は月
のけ宿す波間の月のすしさを夏をもしらぬまら川はさと

岡崎芳樹
同 人
奥本黍丸
同 人
押坂榮平
押坂勝子
石井千尋
同 人
秋山誠明
植田亮
高取長貫
同 人

夏の夜の河へは月之ゆく水のとやくものけれのぬぬきよ
行水はねともすまき川の瀬みくさく月の前けは涼しさ
かまたちし野川の底のささをへみえてましき夏夜の月
さ波のよるは川邊も来てみれば涼さをれ光る月のかけ哉
人れみかこまをなく隅田川かけも涼しき夏乃夜は侍き
大井川えたす夜みかけらひて流を毛ゆくなはれとけつき
夕涼みいさら小川をと光くをえ入りたをまき月宿る
水は面にすまを宿る月のけをむすふもうれし旅の山の井
小夜ぬけて隅田川原も来てみま涼去くやとる夏の夜乃月
みは乃面みうりぬぬ月乃影を見て今日に暑さも忘せて見
夏は只名れみとまの思はゆき水はもうのへる月れまま
いそげへをえ取れて遠く行舟はみえてすま死夏は夜は侍月

安原多年
同 人
藤田安夏
同 人
井上常徳
小野中正
中島行宣
原田良平
伊田如水
同 人
立花勇一郎
花房正綱
喜多村七十七

海原舟をうのへてまぢ居れば涼まゝのぼる夏乃夜乃りき
 須磨の浦松の木乃間ふてる月乃波まうのへる影乃みえけり
 松風は隅田川をらみふねうけてなかきる月乃影のそゝま
 夕ノ池れまを乃白ゆゆのり乃ふ月乃かけ此すゝま
 宵とれみ思ぬ間も取て池の面よかたふも月の影たうゆろぬ
 夕立えあど取を晴れて池の面よそゝまやどる夏乃夜れ月
 此こゆとゆゆりあゆゆ乃ゝふらて水の底まも宿る月かけ
 そゝまをな乃ひの澤れ水鏡うつるもまよき月のかたか取
 水の面よ風れ行方もみぬてけり濛賀れ浦月の取れれとの月
 涼しさをぬりぬて影をなとそらん桂れかとの夏のとれ持さ
 須磨の浦風をゆすりゝまゆとへて波乃ゆゆとて月え出小見
 さらぬに水とまいへて涼まを月れ影さへ宿すかえれへ
 世の人の心すみ田の川取みみかふもすゝま夏れとの長さ

難波慶子
 同 五人
 間野敬明
 福井慶太
 藤原正親
 同 五人
 篠原吉一
 同 五人
 横田肅齋
 同 一人
 丹下正細
 同 一人
 河本郡平

蓮葉まゝ波こけて涼まもゆけさえてけすみの江れ月
 取れまらぬ菅田の池れ水のゝみう夜る月のけいとゝ涼まも
 たへかゝま思忘れて橋れうへま操のやゆのけきをま何かな
 さま下す朝日れ川れゆぬすゝみおもむろまみる月の涼ま
 船とまる岩瀬のなみふかけすみて河風すゝま夏のま持りさ
 夏乃と乃川邊すゝま見ゆるかな波みは月のけを浮へて
 青井川さゝ波まてゝぬく風ますゝしく夜るを持れよの月
 舟とする岸のや取まのかけみえていとま涼しき夏のとれ月
 はれ渡り光ますゝま水鳥れかもの川せまう持る夜さのけ
 ます鏡見るもまゝろはよまれ川なれすゝしく月れゆけ哉
 花えちすにはへる庭の池れ面ますゝしくすめる夏れよの月
 夕立れ雨れはれゆくゆと川ますゝしくまはまなりのもの月
 む乃取からくまんとすれと里川れ波まゝたくる夏乃もの月

有木喜多治
 同 一人
 豊福光子
 同 一人
 國富直香
 田中續三
 同 一人
 津川渡
 同 一人
 笹岡良風
 植田敬風
 同 一人
 堤鉦太郎

我門のいさら小川はなみれ上はくぬけてそし夏のよれ月
 見るぬひも心もらふふらみ川清とそまき取つよの月
 立とれも暑取かるよゆふ川にすしくすめるな花はとれ月
 手もむすふ影さへすま朝日川みきとよやとる夏の夜は月
 鮎はしるのりもささかみ見ゆる迄早瀬みす光る月は涼まき
 夏はよふすしきものは川添の柳をそるよ花さけかけか取
 月清く夕風すま朝日かえをみなかみにあきやかよへる
 すみた川きよき流れの水けうへふ涼しくす光る夏の夜は月
 隅田川さくらなるれま水の上にすままよふ夏乃夜は月
 夕かせにゆら之柳も見ゆるのあひさら小川の夏のよれ月
 風とさるなりは夜川の清き瀬みすみゆく月のかなは涼しさ
 せ死いるよ田の面の水も影見えて心ともすまき夏夜は月
 ありさをと底ましり光て池の面も涼しくうかふ月影か取

同 久山壽野子
 則安靜の舎
 高田頑眞
 宮島省堂
 倉地敦親
 小原和一
 同 喜多島直養
 同 國富直香
 藤森恒景
 岡田諒

みるさかよ涼まのまけは鴨川はなかれにややる夏はとれ月
 涼まきけりきりなまけり水とせ鴨川かはせます光る月影
 隅田川ぬねをどめめては鴨川程よやめてはしを登る月かけ
 まへのまま暑ななれて水け上は涼まくうらふ夏はよれ月
 岸も生ふる柳も間を月あけは取らるさみぬて涼しう見
 夕く友を何とへて川はへまつ死みる程と取つせしをなま
 手もむそふかけさへ涼ま山は井の水まうつれる夏はよれ月
 風わたる池は汀まつきさえて波はよるくすししかまけり
 玉川はきよき早瀬にくさけは流るよけ影はすししさ
 石はさをえとりに流してそる川涼しき夏の月をみる取
 行水のなか光すまき川の瀬も夏をあかまでやとる月かけ
 川添乃をな死のひを影をれてみきは涼しきな花乃よの月
 葉櫻は木乃間をもれて隅田川取らるよ月のかな花をまき

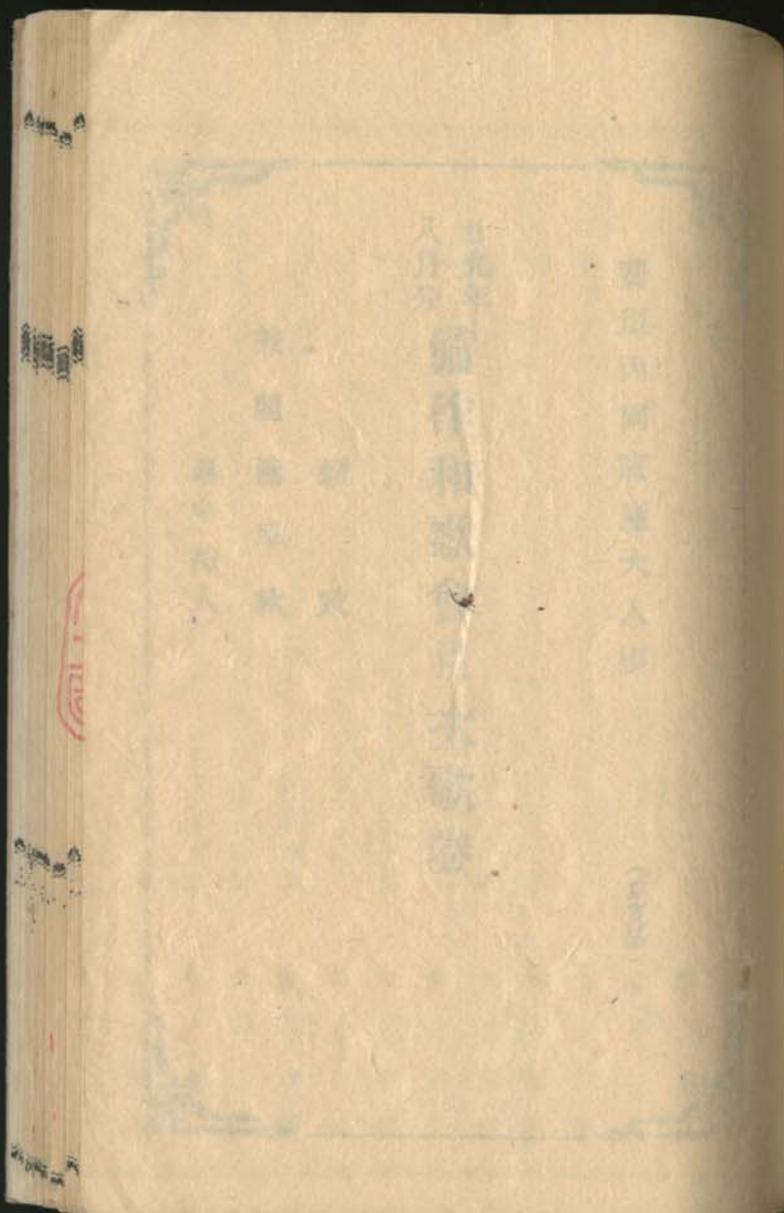
皆木正義
 同 間野敬明
 佐藤亮一
 原田良平
 遠藤正心
 同 岡田千春
 同 中島行宣
 小野中正
 中塚正齊
 同 人

まこを生る野澤の水ふるとぞたる影もそよしき夏は夜は月
 水鳥は鴨のかとへをゆく水よすまきやとるみ侍乃夜乃月
 眞管か野川乃侍よみとる行はずまき月の影きうつれる
 さへりさ夏暑さをやま水み涼まくそめるつきれかけ哉
 白砂子なかるまみにて早瀬川すまき月のかけくさけま
 くさけても涼しかまけま早瀬川汀まもとて取侍れものつた
 むすはんと庭は泉ま立よれ之吾よま死に何き侍とれる
 住吉のみきま松はみとまもれて涼まき夏はものつた
 三〇点人、まちす葉の上みまとれる月影之まきまきま限まなま
 地、風またるいけは汀の波は上まきさけて涼し取侍れ夜のつた
 天、早川はみつまう侍れる月まけは空ゆくとまも涼まかまけま

井上常徳
 福田郁彦
 同中人
 植田亮
 篠山正喜
 押坂勝子
 押坂繁平
 築山球龜
 徳永頼琴
 岡田英諒
 則安靜の舎
 岡直廬

追加

いつみ川いつとわれとも涼しきま月すむ夏は夜頃なりけり



齋垣内岡直廬大人撰

(非賣品)

廿九年
八月分

備作和歌會月次歌卷

賴政

兼題 浦早秋

雨中待人

九月分月並兼題

野 薄

閑庭月

中秋無月

(各題二首宛)

御出詠ハ必十五日マテノコト

●本月歌合執行は處題紙に誤て十月と記載致居候は付諸君に於て區々相成候依て愈十月に於て執行可仕候間左様御了承被下度尤本月御送附は分は來月迄御預り可申候也

明治廿九年九月

會員各位

幹

事

賴 政

一〇点 推ひぬ世を渡る身はかてかき踏まよひけん宇治の川橋
天の下しけるま草のらんとてうちきえよし君をこれ君
弓張れ月の雲のふいりしをりまさりてけりあきみの絃おと
夕立は空さりけなきつきのけは身よしむとら涼しめ覺
世ふれと今もむるしの影みはて扇の芝ふすぬつゆか取
ぞこれ木は花えさのそと柄ぬまや其名を今も世ふ句ひひく
言乃葉のまけさの中み三木山はまきてを高く世ふぬき覺
宇治川のかせもはたま吹をせて扇は芝乃花ゆときえけん
み山木は梢もたれと見えぬとも言葉の花もあははまにけり
れをふたのゝ取めと取まで哀も扇のまを露とさえよし
眞心をと見え一矢にうらとれて音さへたか去りはまはれけり
恩ままをは八十宇治川は流し扇のまはまあとをれこして

押坂 勝子
植田 亮
徳永 頼琴
同 人
安原 多年
藤田 安良
三宅 知規
井上 常徳
同 人
中島 行宣
同 人
西 鶴翁

大君のみはしれもとよ草蒲ひくぬけを心をやさしかりけん
深山木のそ乃栢よあらはれて世よ大空に在る言の葉は花
ちどうせぬ言葉の花よ深山木乃栢よのみもかきらまりけり
君の身え扇の芝乃侍ゆとのみきゆまど名こぞ世よ残りけれ
弓矢よえそくれま君れいかてかま草蒲ひえては煩ひあけひ
吹をさむ日枝は嶺下しさよえよし老木は花もさかて果ぬる
後の世乃人れ耳ふをこれぞけま君かこちちし弓れひよきこ
みなもとれ清きを汲める君取れえ濁らぬ名をは世よ流し見
は取れ矢れひよきは今もかくれ取く雲井よ高し弓張のゆき
はか取くも扇乃芝の露とききて涼しき名をは世よ残しけり
流れては世よもひよける君か名は放ちし弓の音もこぞしれ
は取れ矢れ響きと共に君の名は取れ世に高く聞ゆるか
清き名乃流れ侍させぬみなとよは宇治の里わよ今を残りり

同 人
中塚正齊
同 人
小野中正
岡千春
高取長貫
難波敬明
同 人
難波慶子
同 人
佐藤亮一
同 人
藤原正親

花る音のみ空よ高くさこゆるま君か心をひよき也けり
宇治川の取みよまよよ源乃さよきこほの今もく流きぬ
君ゆえ扇乃しとの花ゆときえて残るは千代のははれ也
命をはあふ死々芝よそりるも清きはまま千代も朽せし
椎の實よことよれ君か言乃葉は千と乃後迄うよえれかけり
打ねよく扇の芝の露とききてはぬは君か名よ社ありけれ
扇の芝侍ゆあしくみはふ也埋木となまてはてし君とを
埋木の花さくこともありよしを扇のまはのゆゆときえけり
時まさは花さく春けあつものを取と埋木ときみえりこちま
武夫の八十字治川のあさ涙え長門のうらみささむわ死侍よ
埋木の花をひらりて椎のみの取れるはて社初はまなまけれ
源のきとき取れれよこさまと思ひきはめて身え果おけん
氏人の榮ぬんはまを開きあきてみは埋木と取れはつるる取

井原正芳
久山壽野子
稻垣將嶺
同 人
安東正令
同 人
安東文彦
兒島枚太郎
富田朔太郎
原田良平
同 人
倉地啓野郷
倉地茂郷

宇治川の底のみく花ときゆるとを芳まき名は今ものこれり
ものよみの宇治川瀬はさしれ波長門の浦も立さる川波
かくはまき言葉の花の傳ゆれをは末の世迄もうまひける哉
やとのとに放ち去弓のゆる音は雲の上も取まひくきけり
ぬは玉のやみに放ち去弓の音は君かいたをの高死取まけり
宇治川は流れぬまてみなもとの末をすまま君も有哉
早さされ花はあへなく散はて木曾東路も少なりひかされり
理木の身のなりはてと哀れなれと言葉の花さき匂ひけり
九重の御園の庭の花もやめひきてわか家乃傳まどな一きり
やみまい一矢はさかは縁とます水は澤の草蒲は引を煩らふ
思ひきや事もいふて益荒夫乃身と宇治川お沈めけんとは
源のそのえのはまは木のもとに椎を拾ひまきみよこせあれ
のはるへき便どのなしと歌ひつゝ上るを君のいさと也を

同 歌 人
奥 西 廉 子
田 中 績 三
同 歌 人
倉 地 敦 親
同 歌 人
津 川 渡
喜 多 島 直 養
同 歌 人
小 原 和 市
笹 岡 良 風
原 田 信 義
同 歌 人

はらなくも身は宇治川は理木と共に沈めと名をせぬ
理木の實けなることと名の葉よのふしてきゆる宇治川波
弓はまはるに任せてはどくさす雲井も高きなきもる也
位山ふもとと椎をひらふともくはえ峯はうるまわでさ
みなもとの清き流れをよみさしとやめて消え行かず川霧
五月暗聲をしるへにいし矢は雲井よのくひとさける哉
一すちに放ちし征矢ともは共み君かいたをば世も響きけり
雲は上へ放てる征矢乃ひくきこき世も傳ひて猶聞はけれ
梓弓ひきくまあどふも乃ふは袖は薫れるいけはるや先は
この君のさとき心は宇治川はなかれと共に流させざりけり
大きき高ねを吹かぬまははかなく消え宇治の川霧
郭公も一こゑをゆみはは月をりさかくなきわたりにけり
梓弓ひきまをれ手は花もや先をるも君のいさをなまけり

岡 田 諒
宮 島 省 堂
植 田 敬 風
同 歌 人
有 木 喜 多 治
武 藤 國 光
河 本 郡 平
横 田 肅 齋
豐 福 光 子
福 井 慶 太
國 富 直 香
河 本 郡 平
武 藤 國 光

二〇点

今しはまきはすりせは天の下かはひやまけん宇治此川霧
 ひきはな侍弓絃乃音れそれよも高きは君か名も社有けま
 埋木の言葉のはなのにはむみそ千年の春もうもをさりけれ
 鎌倉山はふさかまもうち川ますむし櫻のあまはなりけり
 今も猶あふゑるよかな世を宇治の扇乃ぞは侍ゆとさえつゝ
 みなもとの清き流れかへさんと打ひてにけんぢち川浪
 大君は恵みのゆををさうへて菖蒲ひとてや嬉しかまけり
 今も世もひまきせわたる雲の上にさこえけける君か絃音
 三〇点人、ぬは鳥のなく音はさにて得とさきす高き聞えぬ九重のら
 地、五月雨のはきて光り仰るるも雲井またかきゆみはどのりき
 天、木かくまてみし月影もむらさきの袖ま匂ひて嬉しかまけん
 追加
 殿にしているや弓絃此音さの雲井にわけし君か御名はや

末國正民
 丹下正繩
 高取長貫
 岡千春
 三宅知規
 藤田安夏
 安原多年
 植田亮
 津川渡
 岡田諒
 押坂繁平
 岡直廣

浦 早 秋

一〇点 波は此浦やあしは葉風はるもき筒たうち初て秋は来み
 以河はぬも秋はきぬらんけさは早うすたりにむる唐琴は浦
 いとはやも秋と来よけそ若は浦は芦間此巻よく風をみえ筒
 打なひく千草は浦は朝風ようそきさちてあきは来にけり
 淡路しま夜半みや秋はこえぬ蘭をぬは朝けは風うすまき
 雁のあん時も近くなまよけを浦とすまき秋はどのりせ
 き乃ふけふ伊せは浦は乃少女子の襦ふく風も秋をみえけり
 打さわく萩は葉音みしうまけり三つは浦わはあきのこつ風
 浦風もちよる浪はねとすみて海はうへよも秋きたるらま
 ぬは、浦や西ふく風も葛は葉はうらみかちなる秋と来み
 音よはみ立秋としも思ひしをみるめは浦はをさけらうのせ
 波風は音もすしく住は江はうらめつらまき秋と来みけり

久山壽野子
 稻垣將嶺
 安東正令
 同 人
 安東文彦
 富田朝太郎
 兒島牧太郎
 原田良平
 倉地啓郷
 奥西麻子
 同 人
 田中績三

うつ涙は音もさひまき聞にけりこやふきわさる浦乃あき風
よる波は音もさひしく聞につしまりら浦み秋と來みけり
月かけも澄りさり鳥のけはは秋やきぬらん須摩は浦わよ
すまは浦わしは葉末おとお露乃玉ぞみたるゝあき乃初々せ
難波あたわし乃上風たのつらら哀れたるにて秋さきまけり
物も埃ぬあさも未しら波はよするうらわあき風うふく
難波濁あさは葉すあ小白たは露た死そめて秋と來みけり
大方は物たあそれを目よと遠たみぬめの浦のあき乃と風
昨日今日玉のうら取みさるゝと西吹ためてあきと來ま鳥
沖の風とせくる波は音淋しはまけうらまあ死や來ぬらん
暑さをとよそよみるめの空ら傳ひとや涼まくもあき風の吹
間罷れしを死の上葉をふく風もけふ音のるてあきと來ま鳥
住の江のうらの松風音たてゝあきとさよ鳥目よとみえねと

同 倉地敦親
同 津川渡
喜多島直養
同 小原和市
同 原田信義
岡田玉諒
同 佐岡良風
同 人

秋さき幾日もあらぬをいど早をふく音のはる浦ははり風
いと早もあまは浦は松風をたせとみえねをあき立まけり
波乃音も松ぬく風もとあまのて手艸のうらあきとさみ鳥
吹たむるあしの葉風に細の浦たても露た死あさとさよけり
いふつもは今年も半のま乃海れうらさみまくもあき風吹
波と共秋やまなけん須摩は浦取の虫のねもあこれ池けり
この朝けいけうつ浪も身は定しむ秋立り空をわひしかり鳥
すまの浦とせて涼さき眼みれ止ま立まはあき色まみぬ鳥
すまは浦西ぬ風は身おしみて哀れ淋しきあき定まきにけり
松風とあきを告れと松浦濁さ乃ふたぬのうみれいけり
住せしの浦わの岸お空をさする浪はあきもるさあきのえ長風
けぬとりといえは淋しく成ぬらん袖たうらわ乃あき初風
露ふらき秋さきぬらんうらゝ乃芦ゆみ通ふ風のさひまき

宮島者堂
同 植田敬風
有本喜多治
丹下正細
同 河本郡平
同 横田蕭齋
豊福光子
藤森恒景
福井慶太

波は音も好きはかえりて聞ゆなり浦あり給ひ秋や死ぬ蘭
す味の浦好き吹風のそゝまき波は上まきあきやまきけん
白妙波路をわけてあきやまき浦生り風もれどのかさきまる
是味のうち笛やの軒おきて夕風さむきあきやまきけん
てぬ人を松得りうちあきてみれば早秋風のふたそめは
海士の子あしをぬれ衣打なひさうら見さむきあきの初風
打とそるそまのうら波音あへぬなるみは海まきあきの吹
住の江は浦れをそまき靡きよ波はれあしあきみは渡る哉
ねしてゐや浪花のうちあきよきを作るてあまの葉風也
秋の來て須磨はあき風身あまみぬ沙たれ衣うちあしむらん
風は音もあきの調はあきかけりし波はそるあきの松より
打よそる波は音はそらあき海士の管屋も今あきあき知らし
あきあきの身あしあき初風昨日今日あきあき鳴海のあきあき夕風

立花勇二郎
同 藤田安夏
築山球龜
押坂繁平
押坂勝子
同 植田亮
同 植田亮
同 徳永頼琴
同 安原多年
同 藤田安夏

秋きぬと目み社みえぬ涼しさを袖よかゆる須磨のうら風
汐のみ一人ものへまて浦は名は淋まき秋やまきけん
沖へまきせて碎くる白波の玉はうらねあきあきけん
けさこまやみ渡を沖も秋めきて袖はうらねあきあきけん
涼しさまけさあきあきあきあきあきあきあきあきあき
何と取くけしあきあきあきあきあきあきあきあきあき
そまき釣る松江は浦乃夕月夜々のめく涙あきあきあき
波風はぬれて明石は強はあきあきあきあきあきあきあき
打よそるそまのうら波音あへてけあきあきあきあきあき
松風のあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
立秋乃聲あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきの浦は煙はあきあきあきあきあきあきあきあき

三宅知規
同 井上常徳
同 井上常徳
同 中島行宣
同 西郷鶴翁
同 小野中正
同 岡田千春
同 高取長貴
同 高取長貴

待ちわぶる人はさもせて柴のどを去てく、叩えよその雨哉
 蓬生は軒端にねほる雨乃音をも去やかならふ人かどう思ふ
 雨沢夜おのれ寝き人をまぢをれえをらぬ筆お袖をぬれつゝ
 こん友とははげけ戸細小音のれて空さてや軒まはれぬ雨の歌
 天、雨ゆゑ小とはすやわらを訪ひひと契と友を誦す明ととも
 賦あはれおもさの静なる雨沢夜む契らぬ人を誦たれぬるあな
 三〇為人小やみせと友や來らんとこのみまて待と夜と眠き雨の音哉
 待人はとはに淋まき雨は日となあくもひとり明去けるか眠
 待人のいのちや遅きこよひことちさかし人乃雨はふるとも
 雨ふれ世のいとなみも少きよ今日こそ友はとこを訪る人
 來ん人どまつれあふ志に誘はまて軒はおこを以雨はたと哉
 ちせを置し人松はと小音にれまぬぬ雨社うゑまかまけを
 ふる雨小契とし人はとひもて音のるまれば軒はままみり

- 同 築山球一八
- 同 押坂勝子
- 植田 亮
- 同 徳永頼琴
- 同 安原多
- 同 藤田安良
- 三宅知規
- 同 井上常徳

待やさ、人みそととね訪ふをばと軒はよ雨乃音はみま去て
 小車の音小を去れと獨のみははれおれを眠きあめのゆふくを
 日をもきを雨にこそれるわひままは契し人を誦すを社すま
 湯ちわひ去人之と眠くに思ひさやけふ生憎を雨はふるとは
 くさ人を我まき居と絶問なく軒は糸みひおとつれにけり
 雨ふをばひとすさやれ徒然を眠くさ先かねて友を誦り哉
 契まかさし人は來をせてふる雨小軒の筆乃夜とのみそをる
 軒とらつ雨の音さひしかさる夜お我待人はとよままもろな
 ままどく契とし人はとひもせて只おどつる雨の音か眠
 雨ふまて去めをあさる我宿小音あふ人を誦りろちあてさ
 なる雨まいとて更ひまき我宿を音なふ人の誦されぬるか
 夜をく、夜雨はあもれぬ我宿を音眠ふ人の誦されぬるか
 村雨の軒とさひしき去れくを共よりあならん友はとへるま

- 同 中島行宣
- 中塚正齋
- 小野中正
- 高取長貫
- 喜多村喜太郎
- 難波敬明
- 同 難波慶子
- 同 佐藤亮
- 同 稻垣將嶺

幾日たて晴間もみえぬ雨の待ともなし小人居たるよ
 ひねもそよどおん人もなき宿母窓う花雨の音はのまきて
 淋しさを幾夜かさねておん人を松は戸さく雨のおどかな
 わひまきの限置也けまおん人をほちけし更る雨はゆふへは
 こん人を松はとささふかすまは軒の雨おもえあられ小居
 契りおた友を此程とのきさう切あめ此音さへ夫のどを思
 心身を雲はのさして小雨ふるゆゆるるを思きて人けほさるよ
 ふる雨は軒は響るさなまをどひくる人をまつそわおし息
 心あらそどひこんものをか斗の雨あへさる友おもある哉
 契りかさ友やきぬると思ひまは窓打あめ此音もそ有ける
 ちさ置し友を來もせて柴のとも淋しさを添て小雨うはふる
 ちめやのふふるこ空語る友もか軒とみ雨の音しえねえ
 ふり注ぐ雨の晴間をたのみまて契りしどもをうらみほり哉

安東 正令
 富田 朔太郎
 兒島 牧太郎
 原田 良平
 同 齋 太
 倉地 啓郷
 奥西 廉子
 田中 續三
 倉地 敦親
 津川 中渡
 喜多島 直養
 同 齋 人
 小原 和市

村雨はえの柴の戸をうけまどおん人も待れりるの暇
 小雨ふる音をきしけいさほみあふ友を待間の長くも有の暇
 契りおさし人をまらけし徒然お小雨ふる夜を淋まかまけし
 山里は雨のふる夜の淋しさお人かもこんとほされつるかあ
 ひねもすお軒乃玉水音さてぬわとれわか家をどよ人そか取
 くるとも小雨ぬる日の徒然おとふるさ人のまされ何る哉
 徒然小雨を聞きの契りかさ友まのどは嬉しかまけし
 待ましくお物もひくらす雨は日之友をそ外おほり物終なき
 まらわひて衣の袖も穿るやへと哀れを添てむらさめふる
 待人とおど待れもせて徒然と軒とけまほお光の暇とする
 待人之けふも空まき杉は戸お淋まくうらみあ光のれやの暇
 まらわふる人そやひこて終夜お光乃音死くまどけをさし
 小やみ取く板戸お雨乃音りれてま門友垣と來るよしも暇ま

原田 信義
 岡田 諒
 同 齋 人
 笹岡 良風
 宮島 省堂
 同 齋 人
 植田 敬風
 同 齋 人
 内田 龍峯
 有木 喜多治
 同 齋 人
 丹下 正綱
 河本 郡平

來ぬ人を待たし居れと小休罷く暇かめふる日に袖を柄罷ん

ぬちわふる人ときもせて暮ま鳥窓うり雨代おやそりまきて

二〇点

契と罷きま今宵とふけて待わひ玄樞の板屋ま村まめのふる

契り罷かぬ人もまぬれて罷まきは日をふる雨の夕罷まけま

雨ろく軒の玉水ぬまにぬにとふ人おを罷つたまくらさん

淋まくも人ぬち居れば軒とる雨の音まもおせろかれ罷ま

三〇点人、わひまくと夜は更まけてまん人を松の板屋ま小雨ぬまけり

地、こん人を松乃板やのいぬゆらま小雨ぬまゆり夜ま更おけり

天、小休罷く雨ぬる夜半のゆれくを誰に語らん訪ぬ人罷ま

追加

雨ろく賤か軒は乃玉みつのあるとひまも人はやむころ

受賞者

押坂榮平君

藤田安良君

倉地啓郷君

豊福光子

國富直香

稻垣將嶺

中塚正齊

藤田安良

押坂榮平

岡千春

同人

倉地啓郷

岡直廬

香道内閣政權大人撰

九年 九月分 備作和歌會月次歌卷

兼 藤田 開 庭 月

中秋 兼 月

印

一〇三
 一〇四
 一〇五
 一〇六
 一〇七
 一〇八
 一〇九
 一一〇
 一一一
 一一二
 一一三
 一一四
 一一五
 一一六
 一一七
 一一八
 一一九
 一二〇
 一二一
 一二二
 一二三
 一二四
 一二五
 一二六
 一二七
 一二八
 一二九
 一三〇
 一三一
 一三二
 一三三
 一三四
 一三五
 一三六
 一三七
 一三八
 一三九
 一四〇
 一四一
 一四二
 一四三
 一四四
 一四五
 一四六
 一四七
 一四八
 一四九
 一五〇
 一五一
 一五二
 一五三
 一五四
 一五五
 一五六
 一五七
 一五八
 一五九
 一六〇
 一六一
 一六二
 一六三
 一六四
 一六五
 一六六
 一六七
 一六八
 一六九
 一七〇
 一七一
 一七二
 一七三
 一七四
 一七五
 一七六
 一七七
 一七八
 一七九
 一八〇
 一八一
 一八二
 一八三
 一八四
 一八五
 一八六
 一八七
 一八八
 一八九
 一九〇
 一九一
 一九二
 一九三
 一九四
 一九五
 一九六
 一九七
 一九八
 一九九
 二〇〇

齋垣内岡直廬大人撰

(非賣品)

廿九年 九月分 備作和歌會月次歌卷

兼題 閑庭月
 中秋無月
 野 薄 庭
 山

十月分月並題

籬 菊

暮 秋雨

紅葉滿山

(二題一首宛)

秋季歌合題

月下聞笛

籠中虫

(一題一首宛)

何レモ十月十五日迄ニ必出詠ノテ締切後ハ没詠トス

大目長

本月八題紙ニ誤アリシヨリ毎題一首出詠ノ方ト二首出詠ノ方ト之アリ其儘登載ス

ルハ聊公平ヲ欠クノ感アルヲ以テ清記簿ヨリ高点ノ分ヲ取りテ悉ク一首ツ、トセリ幸ニ諒セラレヨ

●本月末現在會員住所姓名ヲ卷末ニ舉ク

●會務整理上甚困難ヲ來セリ依テ會費未納ノ方ハ至急御送附アリタシ又郵送ノ分ニ

シテ別ニ郵税添ハサル分アリ以來ハ先拂ニテ發送スヘケレハ前以テ納ラレタシ

野 薄

一〇点

見渡まは野へ乃朝きまふはくは保乃とえむひる花薄の程
夕さをとこころ淋まぐふく風よ野へ乃小ほく死入招く程ま
秋風よそ巻野れとまき打なひきむそひま露もどまらさま見
柄き風よみたれくは花すまき野への往來は入海ぬくまま
草を以て草お入るを武藏野は月をを招くま乃く小すまき
秋は野は風を見はゆき一方おなひきては絲之條は小すまき
とふ人をあらぬ末野の花をまき風おみまままを招くらん
夕されと眞野の入江乃し乃すまき心あまけお打取ひきつ
まきに得ぬ花をしをまて薄乃み得みまかやまを殘る野を哉
野へどなく招をまま、近とまを尾花は風此取ひく也けま
八千艸の織れるおまきを花すまきひききてみまど打招らん
糸すまき風おあひくと知まひくま幾度のへお立とままける

喜多島直養
小原和一
津川渡
田中續三
横田蕭齋
倉地敦親
津田成風
宮島省堂
佐藤愛月
黒澤慶明
末國正民
万代琴水

露ふのき秋は野末と分之きと尾花は又出て寄ちまねくみゆ
あさ野はさゆを不代薄夕のせのふくかまふ入打拵をなま
小鹿なくのさ野は末れまらゆぬは風まなひける尾花也け
花すきなきなひく野はへて見渡せといつみや秋乃眼を成らん
まきすさふ風はぬまの打拵ひ死野末乃すまき誰招くらん
ひまも能と招くをみまを花すきいかま淋まき此春の夕暮
ひさけふと立よりてみん豫より同又出てまねく野へ代薄を
見渡せと廣野の原は花すき能ひを方よりあきのとれゆく
淋まくもみゆるるさ野乃花すき能ひぬれつ誰招くらん
秋は野の露まみまを花すきまをなつるを招く成らん
武藏野はてて能死風けふきくれと亂てまき系すまきかな
打拵ぬまかけも淋まくみゆる哉人里と得ま野る代小すまき
ゆたする人も能死て暮て誰まねくらん野へ代と薄

則安静の舎
原田信義
中島體廬
赤木美陽
藤原高英
藤原吉爲
藤原吉爲
安東正令
藤井精華
久山壽野子
原 羅 也
徳永頼琴
小坂栗樹

いりまのも穂は出て誰くしの葉秋はぬ色のき色やみすらん
一あたふ野邊の薄まなひく哉秋のせかまふゆふく星のそら
吹風みみさるさ野の糸すき誰をまわして招くな浴らん
風ふけは結ひま露もみまれりさ能ひく野末ゆいとすき哉
日なま乃女郎花ま足球を顔みゆ花は尾花の野へるゆかしき
大江山夜半おや秋乃てあつらん生野乃すまき能ひ出まけ
花すまきゆねく袂をま境又まてゆきすまかまき秋は野へ哉
小倉山ふもとの野へは花すまき風乃吹ま誰招くらん
夕月ぬまをみれとぬ風乃露ま散す野へ乃をばさき
月あけを露まやとして花すまき誰招くらん野へのあたりは
風み付は結ひし露もあさ野乃みまはれまされ陽系すまき哉
さちぬま乃人てぬ野へも淋まきゆまはの薄なま茂るらん
通ふべき道も能ひ野乃花薄かせれまねくされまねくらん

塚村高典
安原多舟
井上常徳
中塚正齊
小野中正
植田一亮
三宅知規
武田太老
西 鶴 翁
喜多村喜太郎
高取長貫
押坂勝子
押坂榮平

二〇点

哀れさのますはのすゝき打憐き乃へはつゆけく也おける哉
秋風は衣手さすくなるみ乃尾花あつて乃うちぬきぬき
御狩野の駒ゆく足もいさむな尾花の袖はひかれて
乃もせぬる千艸の中又人まねくを花と殊みやさしる里け
夕されは乃への小すゝき招きつゝ袂をさき秋あせりふく
秋のよみみされつゝて花すゝき打ぬねけともくる人も取
あきけ野は千草れ中に交りぬるや又出でぬき花をさき
入はぬぬあたの大野は花すゝき風に取ひきて誰まねくちん
秋乃野はあこれを入にみせんとやを花抱ひ出でまねく成蘭
思はずも野中の露はぬれにけりまねくを花み道ひりれり
秋は野乃一むらすゝき保ま出てぬねく袖ま露ろて招る
あきけ野は露けき袖とらさしぬぬねくとみしは尾花也是
え取をゝきぬき片野まきてみれば初子は遊場とてろ也見

秋山 誠明
瀧波 總子
豊福 光子
藤森 恒景
遠藤 正心
伊田 如水
妹尾 柳子
立花 勇一郎
秋山 坂彦
井原 政芳
原田 良平
藤原 正親
大賀 正夫

三〇点

秋は野馬草かま上里の子もを花てかてこれこしかき
抱みいて誰を招く夕日かけ入野はすゝき人もこ取く
人とは秋の野末は夕かせおとは取は又出て誰まねくらん
天 糸すゝき取抱みいて招くかけみぬて心むるる秋の野へ哉
無乃ち秋は今朝迄秋は昔か弓矢田野はすゝき打靡く也
保みいて招くも乃へな糸すゝきぬも淋まきのへの夕ま
末遠く取むくすゝき秋風のゆえるもみゆる武藏野は之ら
鶴取取野は是れ穂みいてぬねく姿愛わえれ也ける
置露も深草のへはたなすゝきはやを不出で誰まねくらん
糸すゝき招きぬふり立はめて思之ぬ乃へお日を暮まけり
あきけは月招くらん武藏野はをえな取は出で打なひき筒
常あたひぬ人れ取さるゝはなるを花保ま出て何招くらん
八千草は花乃おし死は床し焚き丹野のすゝき誰ぬねくらん

築山 球龜
篠山 正喜
勝浦 祇太
藤田 安良
中島 行宣
岡 千春
黒川 輔臣
兒島 牧太郎
安藤 文彦
小林 盛章
金原 惟明
倉地 啓郷
倉地 茂郷

庭を流るる露の野へを分來れば袖のみさるる薄霧の
 秋ささかかくれば小野は篠薄しのひは誰をうちま露くらん
 淋しさをしのひ兼てや招は出でずささめ今人面ぬくらん
 せさろあてて招く小似る獨のみ更けゆくへの篠乃小薄
 霧なつかぬ乃の末の夕かせぬさひをなひを篠乃をささ
 小倉山霧野れをはる篠よひてさささけすあき風のぬく
 野へみ遣はすささも人を招く宛星ささろなきささ秋や淋さ
 三〇点人、あちまねくを花か袖ひひるれ長き秋の野深く吾はささけり
 地、人かけもたえてさひ夕暮れはれはさくらんのひれ小薄
 天、夕月はのひ小句ひて淋さを添す不はすき打まねく能り
 追追加加月月

植田敬風
 河本竹溪
 有木喜多治
 堤鉦太郎
 國富直香
 岡田天諒
 笹岡良風
 末澤鴨漣
 奥本重近
 丹下正繩
 岡田直廬
 井原政芳
 藤原正親
 秋山坂溪
 立花勇郎
 妹尾柳子
 大賀正夫
 藤森恒景
 豊福光子
 瀧波總子
 押坂繁平
 高取長貫
 築山球龜
 勝浦祇太

一〇点 里とほき我がは里家の庭までもくま能てらす秋乃は月
 世は取れまし侍か伏家乃庭さるもをさぬ之月の情なるらん
 とふ人も取れ我が庭は面は露小やせれる月此さやけさ
 人とのぬ庭はてもたふ月かけを文よぞ怒れども火火もし
 し長なる庭れをすささ月さ法てはたさ心もはみまささ簡
 とふ人のひるさへもなき我宿乃庭も限あてちす刺さかけ
 玉敷は都もおなま長さかけれさすを耻め法をもさふの法は
 つゆむすふ庭乃蓬えあきの夜の月れやせれるむしろ也け重
 取く虫は聲れみ高きすや月乃かけさやか取浅生乃はは
 さやある月をさかくれ世の塵を拂ひて住める庭松の土は
 人とはぬるさくれ家も月をけせとあさ草は露小宿して
 世は外ははかれてをめる庭まをさやけき月影をみるか取
 庭は世をはなれ法庭のなかめにもいと悲まき秋の夜の月

井原政芳
 藤原正親
 秋山坂溪
 立花勇郎
 妹尾柳子
 大賀正夫
 藤森恒景
 豊福光子
 瀧波總子
 押坂繁平
 高取長貫
 築山球龜
 勝浦祇太

世乃ち星をへさての垣の隙も星庭まさしをる秋の月の
 世はなれ去蓬か宿は月夜をまを去といひて世も人も能法
 柴は戸をむくらし閉て住わふる庭もす光る夜半乃月かけ
 月のけもあはせをやみん獨れみよをけかきし山をみ乃庭
 我のみる空たよかふるくまも取しむくち乃宿は秋乃月の月
 さひしとや月を夜取ふ山住はふるもひろはん庭のれまぐま
 をすすて去心は月をすみぬらん影まよらけきよもさふ庭
 入とてぬ庭ましわれは秋の乃月もさひまぐすみ渡るらん
 とふ人も稀能るま切かゝれ家は庭まてりくる秋はよけ月
 とをろはれ鳴なる庭の淺茅生をさやけくちらに秋はよけ月
 うきよを之遠くと取れまのくれ家分亮けく宿る月乃月け哉
 秋は夜は月とさやあみてまなら賤る垣根とまつけらるる
 世えなれてとひくる人を取く虫乃聲えかまて月の澄ゆく

奥本重近
 藤田安良
 武東太老
 小野中正
 申島行宣
 塚村高典
 黒川輔臣
 原 齋 也
 久山高野子
 稻垣將嶺
 藤井精華
 安東文彦
 安東正冷

三〇点

のかれそむ我庭ならゆふへくやき世乃外は月を照くる
 人とのぬ淺茅か庭はしつらみて心よ星をむわはれまのけき
 ひと星取む我をわはれと照月は庭まやとる於嬉まらなける
 世も人も絶てさひまき我まて乃月とし何のふて星渡るなま
 静なる初さすの庭乃月みれは秋のあはれもきて取かまけり
 入庭はぬま長か庵を夜さくち庭松枝上ますみ乃抱も長き
 なく虫は聲さへ取みて聞ゆ取り静けきおのお月乃やとりて
 蓬生はしけれぬ庭はあきのをば月を星外まどふも此もなま
 れる蓬すむやとて庭面は蓬生みきよくをやとる秋は夜の月
 世の人まどはれぬ宿のををさふ乃庭まも月はすみ渡る取ま
 秋風まよきよれち、星を拂て清く星すめるまは乃月あけ
 世乃庭をよらなる宿の庭乃面みくま取くてまは乃月影をあ
 めくれ家は庭の面みえことさらに月乃影さる隈ならまけり

中島静庵
 原田信義
 小林立章
 則安靜の舍
 方代登水
 末國正民
 黒澤慶明
 佐藤愛月
 末澤鳴涯
 丹下正繩
 倉地啓郷
 倉地茂郷
 津田成風

二〇点

虫取ちてどこれぬ宿乃淺さふますみ渡りたる陸きのかげ哉
尋ね来て見ん人取き淺ち太の庭まはを去き月れみけりな
静さの友とうゑよし庭の面乃さけ乃葉返るよ月のやどをる
人毛えぬむくちの宿はつゆをどふ月より外乃友なかまけり
世は取れて心ま何け死我おはあひとり亮けき月のとひくる
人とのぬ片山里のいはりおを淋ささかへて回きのさしくる
太とはぬさひしき庭の秋の夜え只すむけきと友とこぼみ光
△初ね来る人なき庭の淺さふおま取くやとる秋は夜は月
秋風は外小音取ふを乃をなくしけけ死にをを亮る月かけ
露ふあき淺さの庭よさす月はひかまは殊にみるへかまけり
おく露お月のやどれば山住れおそれかち葉も拂むの縁たる
人とはぬ庭か庭をも秋乃夜の月れひかまははさてさけりけり
とふ人毛なき庭生は小庭からけりき此光さるさてをまけり

- 植田 敬風
- 有木 喜多治
- 横田 蕭齋
- 國富 直香
- 岡田 諒
- 笹岡 長風
- 田中 續三
- 小原 和
- 喜多島 直養
- 堤 鉦太郎
- 河本 竹溪
- 倉地 敦親
- 金原 惟明

一〇点

さひしさを思えさけり野人とはぬれ去庭おを月は宿れえ
かたりおぬ人さふなくてゆふへく月を我身此友と社み光
とふ人毛なくて淋さき我やとを月をさ法の友とこぼみめ
な之虫乃聲さへふけて庭をさむみ月抱身おま淺さふは庭
月ならず誰あさど之九八重むら茂る庭は夜は何はれを
世はちめをば取を去庭よてる月れさやけき影を獨みるの取
世は庭乃あさらぬ庭おをむ月え殊かさやけきさち社はを
世と取せて住む庵おれとけさ故小今宵とどはん友乃待るよ
おど望みる庭は淺芽ぬとは乃さけ聲身おまみて月更よけり
世はなれて淺芽々宿おすむをれば今宵はつきと我と也けり
天はちそれとを連れてすめる庭は面とけきも消けく照渡るらん
世を世をこのりれて住める我宿と月も星外乃友なるけり
二〇人毛を去るなく聲之かりて山住の静けき小庭お月ををみける

- 赤木 美陽
- 篠原 吉翁
- 篠原 吉
- 小坂 栗樹
- 徳永 頼琴
- 井上 常徳
- 中塚 正齊
- 植田 亮
- 三宅 知規
- 西 鶴翁
- 押坂 藤子
- 石井 手尋
- 遠藤 正心

三〇点人、木ちくれて人ころとは暮夕々軒之小ひきれるけるさまくる

地、虫の音はいよゝすみて閑み籠る庭あふけゆ秋の夜は月

天、世はうささきこえぬ庭之月本のみ秋はあこれみゆる也見

井田追加 ...

世は塵此のまらぬ庭乃比ゆの上お清くもやとる月はかけ哉

中 秋 無 月 ...

一〇点

皆人此まま去今宵の月のけをなとらま雲乃たすかくすら左

いるなれと去年ま是待しるおも取く雲立かまを望は夜の月

年毎み秋の最中とみ取ひたれぬちおしつきは雲にかくれぬ

まらゝゝ玄秋は最中の月のけをいひての雲にあらま果さる

待見ひしるひ社なけれあさらとを暗み取してもふれる雨哉

今宵もどみみ待て待おし月のけをかくせる雲のうちめまき哉

人皆の面つをも月は白雲此いひこのかたふのくまててけん

安原多年

岡 千 春

藤原高英

西 宮 隆 盛

岡 空 直 盛

喜多島直養

小原和 二

津 川 渡

徳岡良風

堤 鍾 太郎

横田肅齋

有本喜多治

今宵うとほすまし月之心籠き雲此さくもたさへして長く

待記去望は月夜のかけえらまかあらぬれ籠き雲はや有らん

村雲にまかゝかく去て今宵去も月の宮夜よの外みてるらん

三日月の頃は望はらも望乃夜の雨ふなるとせうとてか見知

思きやと望取き月之こよむるとまつかひも取く雲懸るとは

今宵まも月れのまみはくもらまんと雲も袂はさちかくそらん

されもも同去心まをまむらん雲のたれま玄望の夜乃夜さ

入みなれ年不一夜とま月を何是なき雲のなとらえそらん

今宵うとまらふ去甲斐もなる望見浮雲おふ望乃よ乃切さ

まらわおしひもなき哉浮雲はさきくもらせる望乃夜の月

今日社と思おまものを何れ取まも浮世乃外お影をすどと

いゝとか望曇をやすらん人心あめみふけ行くを去此生の月

待見ひしかひもあき哉望月は望と見てさくもいりけり

河本竹溪

倉 地 敦 親

植 田 徹 風

原 田 良 平

津 田 成 風

宮 島 省 堂

倉 地 茂 郷

倉 地 啓 郷

末 澤 鴨 涯

佐 藤 愛 月

黒 澤 慶 明

末 國 正 民

万 代 琴 水

友よひてめてを待たかひそなき雲乃奥なるもあ乃よれつき
月みんとまわりひもなしくは迄晴まみ空にかき曇るに
隙を足面ちほりあり去望乃生の月は赤き雲をさるあふし
毎このれと今宵の月をみん物と待たまかひた取をそ詫まき
ぐるまて心みもなき浮くもれ奥はかくるまもあ月乃りけ
ぬるをまといぬもつらま雨故に待かま月れてふぬ今宵を
月かけも今宵ばかりは眺めんと思ひは外おかき八重くも
名おまかふ秋は今宵も名けみまて月お向ふもうさまか足見
見たまてくるを待まのひも取く今宵の月は雨は成どは
くもまな死今宵乃月をみんもれと待のひをなく雲乃懸れる
焼捨の田毎のつきをなわのせんうさま外は影をあくせと
か取まきと共お語れん人もな秋は最中はつきもみねねは
待のひまかひ社なけを望た夜は月はみ空のあまくも望して

則安靜の舎
小林盛章
原田信義
中島静廬
赤木美陽
藤原高漢
篠原吉一
安東正令
兒島牧太郎
藤井精華
稻垣將嶺
久山壽野子
原本壽也

かくをさる月もくやしく思嶺關最中の空のかきくも望何く
友どちとのさ望契ましかひも取く月影みえを雨くを望去て
月みんと契望をあふまな望ま身中の空もつきくも望何く
待のひま月はかくれて降雨にうらみ乃深きまぞれものうら
まもそから待ども晴ぬ雨もま月なき空を取かめあかま回
望は月雲井のうらやてらそを影たまもれぬ天はまのあ
夜もすから心を空をたれぬ哉のねて待つる何きは見えねも
あやまくま雨と降きて名お高き月も今宵をろま乃め取る
待のひし月とかひなし雨くも此中空ままてかけのみえねも
まちまよれ月のかげまを雨雲のあふるまもりまわると也見
思ひきや幾日か待し望の夜は月まもをまれあふるへまどは
まなくし今宵乃月もみえぬ迄ねくも懸る雲はのけの取
うれさくもまける哉照乃月毎はあれどもまき去此夜を

徳永頼琴
小坂栗樹
黒川輔臣
塚村高興
安原多年
中島行宣
井上常德
中塚正齊
小野中正
植田玉亮
三宅知規
西山鶴翁
藤田安良

月みんとひる此程とて雨を去物を雨と取り身もちに夜は空
 一年ふ一夜は夜をとかあくもかく替る雲乃うらめまき哉
 思ひきやも中此月と満ちて凝る空み浮くもはれやらぬとえ
 思ひ死や夜はから雨をきめんとは秋乃最中の月のゆふへま
 いけはぬれと秋は最中此月影みうきてや雲の暗間さひなし
 名も高き秋は中乃月みんと満つかひも取と雲はあまれる
 指を置てまぢま今宵の月ヶけをうさや雲は立のく去たる
 指を置て満ちしひ社取の月ヶけ雲はのくせる望は夜乃月
 待のひも今之取きか本望の夜の月はくも少もくを果り
 人皆の心とをぬこもひ哉くをよのくせるもちの民さかけ
 望月はうらはくも置て晴ぬの心もこれぬこもあころすれ
 夜もすから雲まかくれて見る人の心をはれぬもち乃夜乃月
 世となへてかゝらる物の待ひし今宵は月此雨になるとふ

奥本重近
 藤山正喜
 秋出誠明
 大賀正夫
 遠藤正心
 伊田如水
 妹尾柳子
 立花勇三郎
 秋山坂溪
 藤原正親
 井原政芳
 國富直香
 岡 春

二〇点

三〇点人、おもひ死や秋乃最中の月かけとくしや雲の立るくすとえ
 地、年毎みまをし今宵は月をけをたたくも雲はさちのく去たる
 天、雨雲のあまるとりのあるをともと去らて待少去望の夜の月

追記

八月のけ尤雲より来てみゆとも今宵その望の社限れぬ

田中續三
 岡田諒
 武重太老
 岡直廣

贈受賞者 丹下正繩君 藤原高英君 武太老君

大田 龍雄
 藤原 正親
 井原 政芳
 國富 直香
 岡 春
 立花 勇三郎
 秋山 坂溪
 妹尾 柳子
 伊田 如水
 遠藤 正心
 大賀 正夫
 秋出 誠明
 藤山 正喜
 奥本 重近

備前國之部

備作和歌會々員名簿

岡山市	國富直香	堤 鉦太郎	武藤 國光	難波 敬明
	佐藤 亮一	石津 昌	正本 久治	井原 政芳
	操山 女史	難波 慶子	瀧波 總子	岡田 諒
	藤原 正親	岡 千春	入江 勝胤	近藤 定太
御野郡	佐藤 愛月			
上道郡	岡崎 芳樹	石井 千尋	秋山 誠明	
邑久郡	大賀 正夫			
和氣郡	高取 長貫			
磐梨郡	田中 續三	喜多島直養	笹岡 良風	津川 永渡
	小原 和一			
赤坂郡	奥本 重近	勝浦 祇太	丹下 正綱	

備中國之部

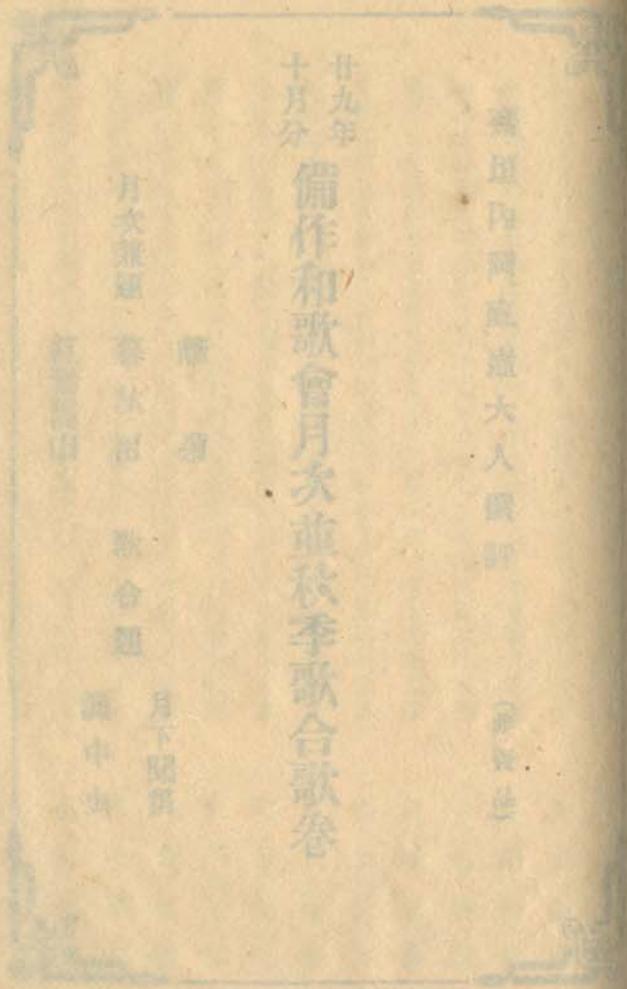
小田郡	藤井 精華	田中 正節	吳 實平	藤原 高英
淺口郡	中塚 正春	三宅 知規	安原 多牟	藤田 丑安良
	井上 常徳	小野 中正	中島 行宣	植田 大亮
	西田 鶴翁	武井 太老	徳永 頼琴	原木 壽也
高梁郡	黒川 輔臣	塚村 高興	小坂 栗樹	
後月郡	篠原 吉爲	篠原 吉一	富田 隆太郎	
主房郡	立花 勇一郎	秋山 坂溪	安東 五介	安藤 文彦
阿賀郡	篠山 正喜	八山 勝平		
哲多郡	遠藤 正心	伊田 如水	山本 哲太郎	泉 隆太郎
美作國之部	夏平	中島 龍雄	大瀧 謙	赤木 喜太郎
西々條郡	押坂 繁平	押坂 勝子	築山 球龜	金原 惟明
眞島郡	喜多村喜太郎	妹尾 柳子	河本 竹溪	手島 二一



宮島省堂	橫田 蕭齋	植田 敬風	平島 二一
勝北郡 花房 正綱	皆木万次郎	漢山 寂齋	金堀 辨郎
美勝南郡 原田 良平	中島 靜庵	大庭郡 藤森 恒景	有水喜多治
吉野郡 久山壽野子	豐福 光子	兒島牧太郎	
英田郡 倉地 啓輔	久山 好子	安東 正令	安藤 文彦
倉地 敦親	奧西 廉子	富田朔太郎	
在岡山縣尋常師範學校	萬代 琴水	津田 成風	赤木 美陽
原田 信義	原田 新一	高田 高嶽	内田輝太郎
小林 盛章	黒澤 慶明	末國 正民	安原庄次郎
石井龜之助	内田 玉治	長瀬 茂平	藤原 高英
未澤 鴨涯	則安靜の舎		

廿九年
十月分
備作和歌會月次並秋季歌合歌卷

月次兼題 春水部 歌合題 月下開扉



孫栗山

良兼親 喜持兩 畑合盛

蒲中史 良不聞語

藤 齋

十月廿五日
廿五日

菊味燭會良兼親孫栗山合燭卷

藤田直胤大人贈唱

(非賣品)

籬之菊

一〇点
 咲去を花れさるるのなる月籬けきとは見ともあはれや
 吳竹乃まらきと共小千代ためて咲はふらんよら菊には敢
 ぬるるへぬ竹は場かきみ千代ためて句はも深き庭はまら菊
 移るはて籬のもとも色も香もさるる久ま死まらきく乃はな
 菊乃花のさきのもとも咲おけは折てあさるる千代の例まあ
 ゆひこめま竹乃場あさるる千代迄は句みどきくの花を咲ける
 白きを乃色香こめはるる句み日は賤かまのきをすき守るる是
 思ふとも取かめくらさん咲句はあさるる下乃まらさるる花
 露霜をいさるる句もませれば内は盛理ひさまき白さくの花
 吳竹はまら死れをとも咲は鬼共おちとへんまらさくのはあ
 うまねきし籬は菊はさるるに秋をさまひと思はさるるけ
 風まけ之垣根お同ひて山里まみるもゆるまき白さくのはな

安原多年
 小野中正
 中島行宣
 井上常徳
 藤田安真
 瀧波総子
 柳坂勝子
 立花勇一郎
 小坂栗樹
 黒川輔臣
 徳永頼琴
 秋山誠明

朝霞く露もほほひのこ蔭をり盛久まきしゆきくのは取
 世の中此すも夜もらぬ垣根ま電老まら菊之さ出ふけ
 袖か家乃函かきま千代の色みえて老てふ事をまらき花
 とるまなる籬の菊れささいは今は取かめを吾をしめ
 置霜をいささきもあていく千代は秋やへぬらん底せば白菊
 秋毎さきの夏久しく匂ふ庭竹乃まらき花まらき洗は取
 こと草そのけさみぬわみ庭に籬にきとれはまらき
 ちるままく咲しまらき花のさかきかをまらき
 八雲の月けぬるさみん八重垣乃花さ死はふ菊は盛置は
 きの月れ露はぬれりよ小垣秋哉かきみさける白死まの花
 八千草のまをる秋秋をまらき垣根まらき白さくの花
 山人乃袖さへひははふふえん籬の宮すのまらき花はな
 夕月の残まらき見えよけまらき内小さける白さく

遠藤正忠
 操山女史
 難波敬明
 藤原正親
 黒澤慶明
 岡田謙諒
 末澤鳴涯
 田中續三
 高田頑貞
 手島雪峯
 津田成風
 豊福光子
 藤森恒景

一〇五

秋はうた物とまらて白さくの籬もさるにさきみまらけ
 霜白き籬のされもとに咲取のらいつ何處て老をしらさく花
 風をあらみやふれま庭に袖かきま咲みたれさるさくの一
 花まらき庭に雪みまらひ何さ籬まらけるまらさく花
 垣か霜はまらき菊をけさみまは霜の中を咲まらけり
 我宿乃垣根は千草かれとまらひと時光くまらさくは取
 白菊れかさみうつ光て咲まら夕日もまはしくれ残りけり
 垣の宿はか死は菊と幾千代は秋をちきりてさき匂ふらん
 ねえ霜みまらさう光て白さくの色わさかさくみゆる頃哉
 花れとてまらさるちも色深くおはるを庭にまらさくはな
 百草は花れとしまらさく菊はまらきおとけで匂ひぬるな
 賤の屋れあきぬゆるまらさきい何る菊之千年の香も匂ひ簡
 朝風にまはるる露もまらる也籬のさまらさける白さくはな

有木喜多治
 河本竹溪
 篠原吉一
 稻垣將嶺
 久山好子
 安東正合
 富田朔太郎
 富田かよ子
 兒島牧太郎
 兒島秀香
 津川渡
 喜多島直養
 小原和一

ませおさの菊は主と誰取るとうへとみぬへす口罷去よしして
 我やど乃小柴垣根とせとけれど千代をこたふる白きくは花
 あればて去賤かまかきも白きくのさけと千年の香お匂ふ也
 千代又千代地へ去姿と人さみん竹乃のきふまさける白きく
 つくろはぬ離のものも千代ふへきみさとのみある白菊の花
 をむ文は窓のむらひは垣乃ぬまさくや白菊のみよひつゝ
 つくはぬ賤かまかきと白菊と千秋をまめて匂ひぬるのみ
 我やどいまのきの菊の咲きめて秋も見ひしと思はさりけり
 霜かれて秋は行くとも白死くのひとを離まさきよひりよ
 白きくの咲きめ去より荒とて去賤のゆかきと香お匂ひはま
 ぬき渡を霜乃まきき白菊と香をとめて社折るるかひけを
 我やどの竹のまるき小根をしめて千年を契る白きくはと取
 咲をひて千代の契りや結ぬらんぬのさけ下れまらさくの花

笹岡良風
 堤信清
 國富直香
 倉地啓郷
 倉地茂郷
 小林盛章
 末國正民
 藤井精華
 万代琴水
 倉地敦親
 沖田廣一
 奥西廉子
 藤原高英

二〇点

去ものれし賤かまかきぬ匂ひは秋にわこれも白きくは花
 柿か家のまかきよ千代や契とらんさく白きくのさのま久き
 にかれすむ人も何りやとくひくれば離れ菊の花もよへへま
 天 繕とぬ賤かまかきよささいてと老せぬ菊のとなをお問へる
 八千草のかれてさひまさせ内おひと匂へる白菊は花
 白のほお黄金おの所をわりかけて菊やゆの死の錦なるらん
 世のうさも老てふ事も去ら菊のさける垣根は遠しありけり
 ありぢめみ結らし垣よさきなら千代をしえさる白菊は花
 賤の家乃くすしまのきを秋之れは菊ゆ多人よとこれける哉
 ゆくはぬ離の菊は朝霜はにきなきつと千代やるぬらふ
 由里も垣根にさくは咲じとまどひくる人のたゆるまもなし
 我宿れまかきれもの白きくは霜とひとりまさ死なたれ是

中島静廬
 則安靜の舎
 植田敬風
 宮島省堂
 篠原吉爲
 丹下正綱
 横田肅齋
 岡千春
 難波慶子
 井原政芳
 金原惟明
 正本久治
 石井千尋

山里乃柴のゆかきのしらき、もさずか、千代乃色とみえ、
 ね、霜にかれぬ、ほろい、ゆきえ、竹のまき、おも、白、
 名み、まねは、千代も、句、こん、呉、竹、は、ほ、き、お、さ、け、る、白、菊、乃、花、
 い、く、千、代、は、秋、を、契、と、て、咲、ぬ、ら、ん、竹、は、か、さ、は、白、き、と、は、え、取、
 千、代、あ、め、し、竹、乃、ゆ、か、き、は、咲、け、る、老、て、ぬ、事、も、あ、ら、さ、く、花、
 う、つ、せ、み、は、世、を、へ、ら、て、ぬ、る、籬、に、は、う、き、白、き、と、は、花、さ、き、お、見、
 千、年、を、と、誰、の、竹、乃、ち、さ、さ、を、り、い、て、ふ、こ、も、白、き、と、は、花、
 二〇点人、山里も、ほ、の、き、の、菊、の、さ、と、頃、を、み、や、こ、の、人、事、と、は、れ、ぬ、る、か、な、
 地、千、代、の、上、お、千、代、を、重、ね、て、吳、竹、の、ゆ、き、お、咲、ける、白、き、の、花、
 天、窓、近、き、ま、の、さ、の、菊、の、さ、さ、し、よ、う、た、ら、ぬ、袖、も、香、は、句、ふ、取、
 追 加
 千、代、の、上、お、千、代、を、重、ぬ、る、色、み、え、て、竹、は、お、き、く、も、さ、さ、け、
 暮 秋 雨

原 壽 也
 秋 山 坂 溪
 高 取 長 興
 中 塚 正 齊
 植 前 亮
 武 太 老
 西 田 鶴 翁
 石 井 絶 山
 塚 村 高 興
 立 花 常 藏
 岡 直 盛
 中 島 朝 臣

一〇点
 くれ、て、あ、く、秋、の、末、野、お、ふ、る、雨、え、や、か、て、も、人、は、袖、ぬ、ら、し、け、り、
 秋、も、や、う、未、野、れ、む、し、は、れ、れ、の、の、聲、よ、り、さ、ひ、し、夕、く、れ、の、雨、
 を、し、み、つ、暮、行、く、秋、は、夕、く、ま、わ、ひ、し、く、も、有、々、雨、さ、へ、降、
 紅葉、の、ち、ま、行、く、秋、を、し、み、て、や、な、み、さ、乃、雨、は、降、さ、く、ら、ん、
 ぐ、れ、て、行、秋、を、を、し、ほ、は、懸、こ、ゆ、ら、淋、ま、く、も、あ、る、時、雨、か、る、
 す、か、ら、や、伏、見、は、里、お、秋、く、れ、て、聞、く、も、さ、ひ、し、た、雨、は、ね、と、哉、
 鈴、虫、の、こ、ゑ、を、よ、わ、り、て、行、秋、は、野、未、さ、ひ、し、く、ら、さ、め、あ、る、
 賤、の、を、ら、晚、稻、は、山、田、か、ま、え、て、う、殘、る、か、ま、に、雨、そ、く、な、ま、
 散、り、は、こ、る、木、の、葉、を、打、て、あ、る、雨、と、暮、行、秋、は、こ、り、な、る、ら、ん、
 あ、る、毎、お、ろ、め、し、紅葉、も、雨、お、ま、た、う、つ、ほ、ひ、て、暮、る、秋、哉、
 ゑ、え、く、あ、の、あ、れる、虫、は、聲、と、め、て、秋、の、末、野、お、む、ら、雨、は、あ、る、
 行、秋、は、寒、さ、を、穿、て、あ、る、雨、お、は、れ、木、の、葉、も、散、ら、し、ま、つ、
 け、は、は、み、は、秋、と、な、ま、ゆ、く、ま、た、か、を、あ、音、も、の、取、ま、き、軒、の、糸、水、

植 田 亮
 武 太 老
 安 原 多 年
 小 野 中 正
 井 上 常 徳
 高 取 長 貫
 押 坂 繁 平
 秋 山 坂 溪
 原 壽 也
 黒 川 轉 臣
 徳 永 頼 琴
 秋 山 誠 明

なく虫け聲もよわりてゆく秋は雨や名こりれなみ成らん
 山風のさよふ落葉もさひまきよさせられ近く去くれふる也
 今ゆく日秋をあらま吹取へお衰を捲へてしくれふる取
 行秋として袂にのみまをまよせの雨はふもいてまけん
 中々おためよし雨を今と早紅葉ちらしてあきふけふけ
 まどすむうなて乃森に秋更て久米の皿山むらさめれふる
 百舌鳥の取く片山をま秋ふけてふるや時雨の音乃淋まき
 ふまをまよと時雨乃あめみ大方乃紅葉もちまて秋ふけふけ
 ふまをしる雨は菊さへ紅葉さるうゆるひはては秋更ふけ
 之れを行秋も今この月かけを雲みりくまて去くれふるな
 くれて行秋は名殘の庭れ面はおどもさひまき小雨ふる也
 のまはこす晚稻は田れ面風みえて夕くれさむと時雨ふる也
 菊もみまうゆるおえては降雨はなるめ淋まきあはれくれ哉

藤井精華
 万代琴水
 奥西廉子
 沖田庫一
 倉地敦親
 中島静廬
 國富直香
 宮島省堂
 則安靜の舎
 稻垣將嶺
 安東正令
 高田頑眞
 石井絶山

二〇点

ふる雨の音さへ寒くさこゆ取も秋も今はどはや取まよけん
 やふれたる軒のはせをふふる雨は音を淋まきあさにくま哉
 くまてゆく秋の名殘をままみてや雨をふる蘭音のさひまき
 何と取く袂つゆけまきて行秋は取こまはあめはふるもとこ
 秋もはやくれ行夜半に音さては萩の枯葉まむらさめのふる
 ふる雨乃音さへさむまきて行秋のなごりのかみた成らん
 三〇点人ふる雨は音さひまき聞くゆるとくれ行秋は取みまかふるらん
 地、大方はまねは刈て案山子のみはこる田れ面お村雨のふる
 天、賤かひく鳴子乃音をまめまけふる雨寒くあきぬけにけり

追加

行秋をままむなみさの此ゆふへ冬はまきさよ時雨あめふる

紅葉満山

さすくこく山は紅葉まうゆるれて常磐は松の影たよる取ま

難波敬明
 龍波總子
 操山女史
 高井千春
 中塚正齊
 中島行宣
 難波慶子
 藤田安良
 小坂栗樹
 岡直廬
 操山女史

遠山は去くれればてや取のる剛峯とよとて紅葉まてけり
 ろらよ去死立田此山はおまなへて紅葉色こくなりよける哉
 常磐木もさほおはわれと押取へて今は紅葉の山と取りけり
 夕日あけいともほとゆく匂ふ哉山はをみちよ字もればて宛
 天立田姫山とて深くいろ変めて紅葉はよまされりやつくし
 秋ふかく時雨やうめ高尾山みゆるのきりともみち也けり
 一もと松はととをを殘まおきて山てふ山之紅葉まよけり
 常磐取の松乃みどもみぬまて紅葉まよけり高とこの山
 露霜本色うめかへて立田やまのそをれあらし紅葉まよけり
 けけ入玄道もぢもきて立田やゆみゆるかさまは紅葉也けり

難波慶子
 瀧波総子
 押坂勝子
 豊福光子
 久山壽野子
 倉地敦親
 万代琴水
 隆井精華
 末國正民
 小林盛章
 中島靜廬
 倉地茂郷
 國富直香

小倉山もみち乃奥に紅葉をぬかぬみよと先んて取まて
 秋ぬかみ峰もぬもとを神あへて紅葉まよけり小初瀬のやゆ
 立田姫手築やしけ死なる雨ふ山まよやゆまよみちまにけり
 なへて普恵みは露やあしけり紅葉のおまにぬ山もなま
 秋とさるる立田の山と皆みち此外にいふ取のまけり
 山と皆しよれば雨やうめ何ら紅葉の奥もみち取まよけり
 立田山去くれのあとゆえに紅葉外れ色取まよけり
 幾度か時雨あまよひおけりあま露半たる露霞もみちと
 岩のたひけぬ越えれば立田山紅葉流れてもみちまよけり
 野へ山へみち紅葉あまなへて木々は皆あら紅葉まよけり
 村まくれぬくもよきて四方の山もゆゆるはかりも紅葉し見
 小倉山みゆる限はとみちまよ紅葉もはれも早よかみけり
 打みれば葉をよもとも錦もてつとよ似る立田やほか

小原和一
 喜多島直養
 兒島秀香
 兒嶋牧太郎
 安東文彦
 安東正合
 則安靜の舎
 横田敬
 宮島省堂
 篠原吉一
 河本竹溪
 丹下正細
 有木喜多治



立田山みゆるかきまを紅葉まで谷にみつさへまき也けり
 立田姫雨こまねる高根はやはらもみちれまきさくみけり
 秋ふらみまくる雨ふあし引れ山はのこらす紅葉までけり
 立田姫手詰めのみみちくまもな山に錦はころもさけけり
 萬の枝らわはねくあくる空の山峰の岩木も紅葉までけり
 四方山は木々えましさと也まけりまくれれ雨の巡りく
 山姫は赤きころもみえみけり残る方なとく光しもみち
 何時しかとは夜ちの山に村もなき紅葉まで是夜半は時雨
 昨日もま今日ははまされる紅葉は明日ましき山は満らん
 むる山も時雨雨をたてぬきに錦をけりみねもふもども
 山姫の手は紅葉すくこく麓をみねまままきまけり
 峰ふまこく紅葉たまな色かへぬ松も紅葉まゆける斗ま
 峯も尾も残るかきまを紅葉してまら山となれみ也けり

正本久治
 岡田謙
 末澤鴨涯
 田中績三
 高田頑真
 手島雪峰
 藤森恒景
 遠藤正心
 伊田如水
 石井千尋
 秋山誠明
 塚村高興
 徳永頼琴

高根まをまを乃孫乃孫までまみ外まみ取かりけり
 立田山みねまもまを押なへて紅葉せぬ木乃みぬ頃か
 立田山時雨まきさしのちままみゆる限まはままき也けり
 山もせまも立田もみまは誰れまかけま錦なるらん
 見渡せば立田は山乃高根まを孫をまけてもみちまま
 押なへて山は紅葉乃唐まままもさかてもみゆる頃取
 松取らで外まみとりの色まなくなへて紅葉はやまとま
 大井川水もままきとみゆる迄あらし乃山まもままま
 名も立ま高尾のみみちままもまもまへ尾まへ千沙也けり
 松か枝もかきまを切まは色まきて紅葉まあらぬ山まの
 立田山時雨もまありけりまもみまままありなるらん
 時雨切ま秋は日敷まもまの山木まはまみちけりま出ま
 薄きままもまも珍まもまはま紅葉まてまは山まけま

原 齋也
 小坂栗樹
 立花常藏
 立花勇一郎
 秋山坂溪
 藤田安良
 井上常徳
 中島行宜
 西川鶴翁
 小野中正
 安原多年
 武 太老
 植 田 亮

立去る松はあをどを足引の山はみなからもみちしてけり
 嶺は皆もみさしおけり立田山もも雲さるおはふとありふ
 村しくれはまじあしと見渡せば山は紅葉まき花もま見
 しくれゆく雨まもさる山も取ま山てふ山と皆をみちして
 通ひ路もまよふはかまに高雄山峯も尾もみりる紅葉と
 高とされ山とをみちおちを登て錦あやれる取め也けり
 時取らぬ夕日さすかともみるそのり紅葉してけり四方乃山々
 二〇点 せみちせぬ梢のあらま山松の枝ももりされもみちかきりて
 三〇点人、高根にも麓もたうもみちとけいろよま外の色取かりけり
 地、山と皆のぬ梢をなありける松ももつふれもみちかきりて
 天、秋嵐かみ山と皆ののらもみちまて松の色さるるめてける哉

追加

樂はこすくま社なけむあらま山松ももつふれ紅葉去つれ

中塚正春
 岡千春
 難波敬明
 石井絶山
 井原政芳
 藤原正親
 黒澤慶明
 奥西廉子
 横田肅齋
 黒川輔臣
 篠原吉爲
 岡直盛

秋季歌合

月下聞笛

左 ぬしやたれとはまはしきよ小夜更て月あうせふく笛竹の聲
 右 月おたふねらぬ物を笛の音の遠きと夜更けり
 左 うそふくといひ又笛竹といふ事いか右は難なし勝とす
 右 吹ならぬ笛はしらへはさやけさよ月も歩みを急さるらん
 左 左のめといふ事いか右月はあゆみといふ事おたやあまあらぬもれら左は
 右 いささの勝まぬへし
 左 笛の音は殊さらすみて聞ゆると月はひかまのそへも也けり
 右 すすみはる月にうられて吹笛乃しらへは誰のすすさひ成らん
 左右とも難なし持とす
 左 秋はとといふも更なま一ふまよ月も歩みよる笛をけけこそ

三宅知規
 倉地茂郷
 原壽也
 石井絶山
 押坂繁平
 津田成風
 秋山誠明

右勝 庵にては松原とはくうか丸來ぬを月のみか笛のねを去て 末國 正民

左は一首の上意とは是のさ右もいささのあぬこさちをれど左よとばるゝ小勝

左持 さらちおも聞え社すれてり渡る月をせにふくえ竹れこる 篠原 吉一

右 月清き夜半お聞ゆる笛乃音はさのわくかるゝすさひ成らん 難波 徹明

左月をせふくといふこといか月も多きで吹といふ意の右はあゝあるゝといふ

こといふことおたやのならを依て持とそをささるゝ

左 寮めてお月を去みつる折まもあれ何所成らん笛乃ねをせる 中塚 正齋

右勝 式月のけの更ゆくまゝお笛さけ乃聲さやかまを死こえぬる哉 高取 長貫

左持 左月を去みつるこちゝし右ことお能し勝と又言ふ

右 笛竹のまほおも去け音を取る月よいをねぬ人やふくらん 藤田 安良

小夜ふけてすみゆく月よふ 笛と誰いねかてのすさひ成蘭 丹下 正繩

左右とも難設しとき持とす

左勝 ふまよくも誰か吹らんさやなる月に澄るる笛たけ此こる 井上 常徳

右 さやかなる月おさこゆる笛は音も心も空おすみあさるる能 藤原 高英

左持 笛は音は月おかよるる心もまていとを亮るは聞えけるのな 秋山 坂溪

右 さやかなる月を詠めて立てれとすみ渡るるをちの笛のね 喜多島 直養

左右とも別難設し位も同じ得と也

左勝 笛はねにかさふく月も聞ゆるは何所此人はささひ能るらん 正本 久治

右 月清き嵯峨野の奥の里おまも誰のそさふ聞ふえの益持する 有木 喜多治

左持 右三た句ゆるへ里左を勝とそ

右 更て行くらけさへ清き月のよは響もそみてふえのさこゆる 金原 惟明

左 須磨の浦の月お吹よるふえはさよ過去むる志の忍はるる哉 見島 牧太郎

右 左響もそみていか右月お吹よるといふ事いかさこを持の能

くほもそ死月も調ふるふえのねも更行く空をか保えさう見 藤井 精華

左

右

左持

右

右 わかま浦月はけくしと出まよ吹よるふえもいとさやか也 安東正令

左勝 吹すさふふえの音高きひまな也月もあつゆの亮けかるらん 藤原吉爲

右 吹取らすふえは調のかと清之をみたる月乃かけみひきぬ 田中績三

右いとこちくま左を勝とす

左 さを更まされか吹らんのけ清き月おすみさるふえさけは音 安原多年

右勝 みやひをれ住家成らん更る時を月を調ふるふえ乃ぬきする 岡本千春

右此のた風情あり

左持 あまさかすさひ成らん秋れこの月おすみ行くふえ竹は聲 植田亮

右 月清み野へは千艸を分行えい切ことなぬぬえのぬきする 植田敬風

左右とせおとなふん歌なまをき持とは

左持 ては渡る金臂は月まふえ竹のひきさも澄てきこえけるかな 立花勇二郎

右 只影にしらへあはせるふえ竹はひきさも澄てきこえけるかな 末澤鳴涯

こは左右とも少まうさけたるこすてすれと位と同まはど歌也 築山球龜

左勝 月みりて吹笛さけの音さけは是のちやまのむかしおはゆ 稻垣將嶺

右 さやかなる笛竹のねお出て見れと空まさえ行く月此かけ哉

右は結合いある左も結合はいある取れと右も取れり 花房正綱

左勝 誰人の昔をま乃みすさひみや夜ふけまゆきふえたけは聲 兒島秀香

右 足柄のあらしふえま月あけかひま高くもふえ竹はこゑ

左勝 左明夜ふ笛を吹は必昔をまはみど小も限るまま右は結句いかと先左を勝とせ

右 秋のをれ月を枕枕めめさめてうたゝともなく笛乃こゑする 安東文彦

左 右月を枕おするとはいなるをいふ小やこも左を勝とす 小野中正

左 松風分るをふ調へのふえは終を聞てやさけき秋はものつき 國富直香

右勝佳) さかやどろすさひ成らん小夜更月お調ふるふえ竹のこゑ

左右ともささる難とまけれと右はかゝ何となくとゝのひたり



左勝 さらてはに聲あはれなる笛竹を吹けゆ月も吹え人やされ 徳永頼琴

右 さし乃をる夕月か付小笛は終を二ふま高くすみわぬりけり 小原和

左持 吹く笛は音もみゆるやと思ふ迄ひらきさやかま月を澄ける 立花常藏

右 月のけもさやのふ秋は小夜更々とこやら笛は音も聞えける 笹岡貞風

左 左看は見ゆるといふ理なき素も疑はばあまども無形のもれをみるといふ想像なき

右 去右とどこやらに言葉いとく俗也品さみむるへもなき 藤山正喜

左 去すすから笛は終す也月をさみわかぬ心をひとも見ふらん 藤山正喜

右勝 夜もすからあけられゆけは亮れる月もまらふる笛竹はこる 黒澤慶明

左勝 左笛は月影はわかぬを以て吹はは福らさんめり右ととも取去勝とす 井原政芳

右 月清くをさお聞ゆる笛は終れをみまきまぬる秋のよそか取 津川義渡

右とくさけた左を勝とせ

左 淋去夜を月をしと終ふ草枕はるかおきときふえはねうする 喜多村喜太郎

右勝 月清み里のわらへかよく笛のこゑもすみのや秋のよそあゑ 沖田廣

左 てる月と共にほみゆく笛の音はぬのりまへははすきや成蘭 中嶋行宣

右勝 草ふえ乃聲きこゆなま里の子も月すむ野ちを争のへるらん 堤田信清

左勝 左右ともこと少あかまらるしらへ也右と小をのま勝とす 栗本

右 左勝 笛竹のまらるさやのふ聞ゆる取去月もうかれて誰のふくらん 小坂栗樹

左持 去竹は聲さやのふ聞ゆる取去月の光ををらよはせらん 則安静代舎

右 左右ともこと取まきこえたれと右とか七ひそふと云ふ少あいの、也左を勝とす 石井千尋

左持 秋の夜乃橋とおさし入る日のけのほみはなる取去笛竹乃聲 石井千尋

右 去えの音のほみゆく月もあこれ聞ゆるを現あり身 万代琴水

左とまらると、乃を右笛は音は月もあこかる、といふ理取し又さくみゆさといふ

ふとふはは音や月の影をさすわやこもど、はとすうは、也けその詞をさ、えぬ也

あかくにこそ品ささむる限まほらす

左 月のけお取らひてよけるふは此空も高くさ之渡る哉 倉地敦親

右勝 月清き宵宵はらちをなかわれもふは此聲さへもみ見ぬる也 藤原正親

左 月かけと共おすみ行ふえ此音ささかいぬかてのをさひ成蘭 西鶴翁

右勝 古のさが野おほえて秋の月のおそみゆくふえたけこゑ 中嶋静塵

左 足柄此山乃死るけさよふけてすみころわされふえ竹此聲 武太老

右勝 秋はこれ月すむ野へは呉竹はふま面白る死ふはの終るはる 岡田諒

左 左右ともさてま申すむ終を罷まされと左之足柄の山取らてをせおもえて詠史此こ

右勝 誰人乃をさひ取らむ野へ遠くてをぬる月も笛のぬをける 黒川輔臣

左 月ささみ笛の音すみて世のちを吹えらふへき心地社にれ 塚村高興

右勝 氣の家代まらる成らむ小夜更でさえさる月も笛の終るする 倉地啓郷

左 左世のちもといひたま右とも罷まこも又勝す 藤原正心

右勝 風渡る足ら山にてる月此かけは多へ能るふえをさくみ取 高田頑真

左 左はさて山のすみゆえかときこゆるさまある難難し勝とを 伊田如水

右勝 遠よもすから誰そさひよや月かけは笛のぬきまよ澄ぬる也高ま 手島雲峯

左 取らむれと千々おる能しき月能るお心をるや遠の笛乃ぬ 横田肅齋

右勝 吹きよする笛乃音遠さきこゆなを月よせいひま友乃き侍蘭 富田朝太郎

左 左とも罷ま右また吹とするいさ左を勝を

右勝

左

左持 遠て是渡る月乃光更あわかまて夜かぬく笛かちち又聞ゆる 小林盛章
 右 機おぬえぬと音はひさかた此月おこよひ乃手むけなるらし 藤森恒景
 左勝 左右ともさこえぬまもあらねと何となくいひぬぬ心地す依て持とす 田舎
 右 笛は音もいとくさみて聞えぬ亮けき月此くけはふけりし 操山女史
 左 さまか取る月の光を乃かけりひて調ある笛は音こり清けと 豊福光子
 右 左右とも少し打あのをきてきこゆ中よ左はと取きかきまらみ高玄 時田
 左 燈火乃ほるるもあらて更みけりさゆる月夜は笛はとほはま 妹尾柳子
 右 左は月と枕といぬこまか右さしたるぬともみけれと左よは勝をぬへし五
 左勝 笛竹乃ふしちおもろえ聞ゆ取月此とすあら誰かふくらむ 瀧波總子
 右 他人はまよひなるらん笛は音の月あさひひて澄わさる哉 奥西藤子
 左 こととまなま右結句い々々左を勝とせ 妹尾柳子
 左 月かけけきよき夜せのら吹笛はぬのされ待てるすさひ成蘭子 押坂勝子

右勝 すみ渡る月さへ秋はさむしきを遠くさこめる夜半は笛は音 難波慶子
 左勝 左もきこはぬふのちらねと右風情の勝とす 田舎
 左持 是是柄乃月をさどりてゆくこまはわとよはぬれるふは竹は聲 宮田かよ子
 右 左は竹はねてさねくて窓おさす月よも聲は有ると響き 大曲壽の子
 左 左右ともいとむゆのまきいひさまをり 田舎
 中 虫 難波慶子
 左 虫は音をさかほはしよ入置しぬこは中よと聲せきまけと 難波慶子
 右勝 こは中のも乃としもなし亮あにまふていへり鈴虫此聲 奥西藤子
 左 左いれねきしなとこすくし右はささる難もあるとくこはなり勝とす 大曲壽の子
 左持 秋は野ま心のくまてをど先子か能まぬれなるとさ成ては聲 久山壽呼子
 右 友は野おすささま聲をきかひおらみを吐き籠れ虫が 妹尾柳子
 左 左右とも六かしきまらへ取を 田舎
 左持 音をめて捕るし物をさそくす籠はうしとや鳴初もせぬ 押坂勝子

右 わかぬぬ秋のよほのらふと秋き虫こは中をひて鳴らん 瀧波 総子

左勝 籠の中お眠る虫乃音のさほくは枯んとをふるよはの淋さ 操山 女史

右 露れ身を秋はとまかの籠の中まこるわやも松虫の取く 富田かよ子

左勝 軒ちかくのさけてそきく虫は聲常よをなほあそを也けり 豊福 光子

右 秋此野をしりきて軒は降るのこは我宿らま虫やなぐらむ 久山 好子

左 左上下はなるさみさすす右とよとくどさなしはばらく左を勝とそ

左 哀さなきさ哀れなるべき秋此虫を籠にも入てきと人も取 富田 朝太郎

右勝 籠の中と思へといとをあこれなをねさめかなまき虫の聲哉 井原 政芳

左勝 左結句さくはす右も結句さくのみあるよはあらねど一首は上左ふは勝りぬへ之

右 籠の中おなく虫は音此かあさき吾身おへて思ぬ夜半哉 藤原 正親

右 籠はうさ取れぬまさの虫乃音も心をみて泣らむ夜半哉 塚村 高典

左 左こどもなし右取れぬまさの虫をいふこといかに左を勝とす 安東 正介

右 一人ぬるよと淋しあくる間を枕のつれあかこの鈴でし 喜多村喜太郎

左持 左一首の上きこぬ難し右と下は句はぬすこを持かす 手島 雪峯

右 今とまやいふせは籠ますみ馴て聲まこと取すきまぐす哉 河本 竹溪

左 左三句句はぬえす右は四句句はぬえをぬす 高田 由頼

右勝 籠はうさまわはれよすから鳴虫の聲おしみて悲しかり 篠原 吉為

左勝 左右どきまぬえま右はさか勝れ重や 末 善

右 籠は虫は聲はわかれやきまむ九野へを戀て秋の習ひ 篠山 正喜

左勝 深きよ深きよ深きよ聞けと松虫は籠ま境なける聲のひまさは 万代 琴水

右 籠は虫は聲はわかれやきまむ九野へを戀て秋の習ひ 篠山 正喜

右 籠は虫は聲はわかれやきまむ九野へを戀て秋の習ひ 篠山 正喜

左持 夕月のまきて淋まきまつか屋あてれを添てるこ乃取く虫 笹岡 貞風

右 龍と聲此ぬどか取しや聞ゆ也放すせやらんかこの鈴むま 小林 盛章

左勝 終夜をやみふ取くこの中まぬく虫はねえともやとぬらん 末澤 鴨涯

右 籠のうちを己か住野と思ふあなれを松虫ふまはへて取く 秋山 誠明

左持 式夜もすあら聲も哀れは取きかどす枕比もとれくこ此すく虫 喜多島 直養

右 賤う家は軒又ひるせるかこの中まつまさせてふ蚕の取く 押坂 榮平

左持 式月のけのまけけき夜半の籠此中の虫も殊さらなきとさむ也 石井 絶山

右 擺をええ虫も雪をええ思ふらん籠も取く取る聲はさやけさ 小坂 栗六樹

左 式夕暮は軒を比かこあふくむまや秋乃あどれの隈も取くけり 岡田 誠

右勝 さらぬおあふし秋も此を鳴虫は籠乃中なる聲乃あえれさ 井上 常徳

左 式夕く虫は此中のきりくすつまさせてふねまを鳴るる 中島 静庵

右勝 中くみ野まきくても愁きと籠あふ虫の聲おさぞける 中塚 正齊

左持 打きうひなく聲さけえなをも亦淺茅こひまどねとを立らん 堤 信清

右 元乃野おかへらん日けみ松虫のらあ中まや鳴あかすちむらん 藤田 安良

左 左右ともきこえぬまどわら位は同まはと也 國富 直香

右勝 籠此中はみ取れてあく虫は終は野も聞よても哀れ也けり 三宅 知規

左勝 左右とも少ま調高し中にも右秋は哀れを集めてのえさらきわれは勝とけり 岡田 千春

右 軒は取るこも取く虫と八千艸の花けねくらや思ひはけらん思ひ 西 鶴翁

左右とも又少まわられるをらへといふへを殊ま左のさひまを思ひしははる
左 月かけえ軒を照きてさやのほを聲ふりたつるこまは鈴むき 丹下正繼

右勝 されちれ虫の音きけと家なから野へは宿まる心地社をれは安原多年
左下乃何いり、右ともなま先てぬを勝の勝なるへし

左持 一もどの草葉は末まかゝるらん夫は取く虫の露乃いれちと 高取長貫

右 さいとせぬき籠乃住居をさき世とや思ふ虫の聲はる取まさ 小野中正

左持 夜もすうら月をうらみの籠の中ふりてををど先て燃虫は鳴く文は安東女彦
重て格さかへり

右 籠の中は取さすれやを強むさひまわらでのなまてなる 花房正綱

左持 さひまを忍び兼るかこの中友は切むまは聲まきと 田中績三
右 ささくは虫この中の淋しきみ友とふてを格はれ也ける 藤井精華

左右ともいひたらぬこます
左持 さいを置ま籠の中取る虫はねと取は一しやのあはきうひけま 難波敬明

右 秋は野は夜半はあまをまきへは枕は近くきく虫このな 黒川輔臣

右 右とををさなければとさこはさ持とその中よを 沖田廣一

左持 虫は音をのみみ集えて秋はよの野るは哀を益をみさくらあ 立花勇重郎

右 あこれ中お取さあを光りささくす秋は哀は我も増まる 黒澤慶明

左 さいと馴れ虫この中の松むしも放すてやらん取く音か取しき 中島行宣

右勝 露よのさ野るは手くささくよまも籠かひれ虫の聲は哀さ 稻垣將嶺

左勝 式程でまきむまこの中は松むしもうさ世を秋とかこつ成らん 遠藤正心
右 夜もすから虫籠の虫は聲さけてあけきもふか旅は宿のな
左とをさ右結句いかし左と勝と反

左持 夜を寒みはさむわびまき秋のよは枕小通ふかこむしはは 有木喜多治

右 秋の野の千草の侍ゆを去たひてや取くねのなき籠は鈴虫 秋山坂漢

左持 左結句猶あるる左右 津田成風

右 處せきのあおも今は中へよなれはく虫乃音とけみろ取と 横田肅齋

左右ともさまなるけし光取と 藤森恒景

左持 月更て軒あちけま籠も取くむまもうたも乃秋やわふらん 金原惟明

右 いさ起て放ちもやらを枕へのむまこふなける聲のらなまき 津川渡

左 左軒のいけまといふといか右と俗意あもけま光取と 栗山球龜

右勝 露むはふ秋は夜ふかきかこは内あまきををれさる虫の聲哉 兒島秀香

左右ともさまなるとも取れれといこ左ももしはとく右を勝とせんか

左持 ずみ取れぬ籠の中も秋のとと哀れとこ光て函何虫の取く

右 秋はよのねられぬまよも虫籠の友松むまはねとけみろさく 伊田如水

左持 う切されま籠の中なる秋のむまおはく宿とやわひまかす蘭 兒島牧太郎

右 小夜見て枕へちのさこの中取くねふりゆくそまむまは聲 立花常藏

左下代句いか右と聲のふるといふといこ

左 こよら野になく聲よも朝な夕なわはれまさる籠の虫哉 末國正民

右勝 霜寂かぬむまこの内まなく虫と暮行く秋ををしむなるらん 正本久治

左 左上も取く聲とりもといこんわこ下おこ取く虫やあ之れ取りけるとせてと叶と

すままは又上の取くをせいとせん右はとをま左勝とけ

左持 處せきのこを住かとあさらめて取く鈴虫乃こあはあはま 倉地啓郷

右 已る身乃幸なきとを去ら取くて寄ましけお取と軒の籠の虫 石井千壽

左三乃句俗也右も三の句しらてつせとあまこしさまこも同まをど也

左持 月かけを軒とよさまで籠れ中は虫おもしろく鳴き出さけり 宮島省堂

●十二月分兼題 水鳥 市歳暮 山家冬月 一首宛
 ●歌合題 海邊雪 楠正成 一首宛 締切必十五日限

來ル三十年一月齋垣内大人ノ家ニ吉事アリ本會ヨリモ聊祝意ヲ表センタメ左ノ題ニヨリ
 本會員諸君漏ナク出詠ヲ煩シタシ 備作和歌會幹事

題 松竹契久 十二月中ニ幹事ノ中へ御送附ナク 用紙半紙堅詠草書式左ノ如シ

廿二辛		名上	
表	初句	二句	三句
裏	四句	五句	直題大人題
住 所		備作和親會員氏名	
(兼貴品)			

國語會

一〇点 諸人おかはりてゆとふねをやけ大圓居て國此ためなれ
 勅語さてゆはり簡としあをみかく言葉ろたのくきこゆる
 雲れ上にさみのこゝるもどさくへき代と成玄社嬉のりけれ
 いぬとかて國此光をゆすならん赤きみさるれば人此とひつゝ
 及び國の榮えを計るまとのをは神も嬉しども愛取はずらん
 いぬしるは安れ河原も似るるる國の御法とよかる集むは
 明けく治まる御代乃ためえとて知らせる法に民代何ゆまる
 民草れ宮ち何とひゆさま此まこと論ふ代ろ空れしゆまける
 大君れ光くみの露またみくさの言れ葉まけく取れる御代哉
 七年乃そのしはささま控の花え今もろらて世お薫るなま
 とさ人乃をまて識まて善といふとさ言れ葉や世お句よらん
 くさくの賢き人とおめゆり大和しは根れ本やかさ光ん

塚村 高 興
 同 大
 黒川 輔 臣
 徳永 頼 琴
 同 人
 秋山 誠 明
 同 人
 押坂 榮 平
 瀧波 総 子
 築山 球 龜
 安原 多 年
 井上 常 徳

大君のよき畏みは御覽と識るゆゑをぞれしかるけり
開けゆく御代取ればはる民もよはるまで國は基つらぬ
民とをよるは政はからずはひらけゆく代のためしあまげり
千早振神代おほえてはとほるこゑのまじは尊とかま見
民草の言の葉にねく露をしを玉とえらるるみそろかしこき
大君の惠のつゆおほみ草はことばとしけるむさしれはそら
神つとひえかま玉ひいふる事を思ひやらるるゆゑとぬ也けり
民くされゆれば白玉みかき夜ははる圓居る畏こかまける
民草の言葉の花を雨夜めりよもつるは國のはしち取まけり
さみくさの茂りくいていやゑかたに國乃風をや吹おこすらん
國はぬめ君のみためぬ打ゆとひえかきりまられる此まどぬ哉
天のける鶴も千とりた打むれて君か八千代を友音おろ取く
大君はめしはゆよく民草のつとひてはかる國はさるえを

同上 常 人
小野 中正
同 山 人
中塚 正 齋
三宅 知 規
同 人
植田 亮
同 人
中島 行 宣
同 人
武 太 老
高 取 長 貫
遠藤 正 心

千萬の民乃取らよと撰はれてはとへる人ぞをまれなりける
國さみをねもふ人のみりどひきて政事をせかふるうれまは
君の代のさるねをいける民草乃言葉の花はさるまじれもま
み民ともま何事は事ま何かるはさふとまき君の惠取まけり
取取うれま國民あつめま流り事はあらせ玉ふみ代本逢身は
國民の何とひえかま玉天は下治むるみさもひらけけるな
玉敷のみ庭のうぢみくさくははは花のささふ得むり
大御代のめくみ乃露まうるはひて國の掟をさかるゑくみさ
くみは爲るまこ死人の代どひきてまきを識れる所なるか取
すめ國おのくそ心ばはくを一切みな去て去るま光す哉
大君乃みま何まとは國さみもよまてあめりる御代ろ畏こき
まはぬみま代りて國は政事はかりにはるこのゆゑとぬるな
民草のよき葉ま々くさるはつと國の風をもふきおこすらん

難波 敬 明
正 本 久 治
篠 原 吉 一
岡 田 諒
有 木 喜 多 治
徳 山 仙 太 郎
國 富 直 香
小 原 和 一
笹 岡 良 風
奥 西 廉 子
沖 田 み さ
倉 地 啓 郷
宮 島 省 堂

山賤かゆきけひおとも今どおくもたきわぬす谷の芝もし
 さえ渡る水音さびみあさまさきおくまも白去里けいぬと
 朝のくも隅田川此のせさにてとま上白く霜をおきける
 今朝みまはかよひ去人の跡もなくふはよくはまき霜乃板橋
 とむすから霜おく橋の面風も渡りまあとれどはて淋しも
 小夜ふけて月さえ渡る霜の上よさかくつふれま谷の板はし
 冬枯れ野川まきたすいたまの上みみゆるけさの初まも
 鐘の音もさむく聞えて明わたる谷けいさるまも置ける
 板とまのいたくもけさは霜おきておまも白くみえ渡る哉
 天 橋の名乃ゆきとどま守人れ夜床お寒きまをけいろる
 ぬまをゆく車の音もまをる能て朝まもまろき門けいたはし
 三〇 人 くらふる人たおもなき橋れ上乃落葉をやりすけさ初霜
 誰しかもすきゆきまけん板はしを渡りけりどみする朝霜

押坂榮平
 瀧波総子
 同 井上常徳
 同 小野中正
 同 中塚正齊
 同 三宅知規
 植田五亮
 中島行宜
 武太老

夜嵐乃さな渡りける面とみえく置霜しるまもさむりのはし
 踏わけ去跡をみねれく板はまいたくおぬるけさの霜哉
 さも更くゆきとまにま棚はしれまもの上まも風れ寒さ
 夕月とまを影さお見えなくお置まどはせる橋乃まものな
 川風乃さにくる橋の上よのみおぬ渡しぬるけさのはりまも
 ふみゆくも惜しき心地れするゆくま真白お結ぶ橋乃上れ霜
 里とほき谷の木かけのほし乃上白くわたせるけさ初霜
 誰しのも渡りてえけん朝まもみ跡をどまもるのと板はし
 朝まぬ旅た何人をわさりけりなちをみ跡ある里れいさはま
 置しもおぬしわどもなま朽木橋けさころ我まわたり初霜
 ふく風も身おまみ渡る橋の上おおくしも白し雪かぞろ思ふ
 打とらふ鴨れ羽風のさほくくさな渡りさるまを板はし
 けさみれは雪るとはあり白妙お霜れきわははまの寒けさ

藤田安良
 高取長貫
 同 立花勇一郎
 同 秋山坂溪
 遠藤正心
 難波敬明
 正木久治
 藤原正親
 同 篠原吉一
 岡本山謙

白妙乃雪が雨らぬかどとそか愛は痛くもあける橋は上りまは
 月さにて瀬波音寒く取るまよみまを置くけえ板はまは上り
 狐なく野末小月のかげさゆと橋は上まろくみゆるまもか取
 夜を深み月のけさむくまゆる哉まも置とるをいた橋は上
 柿人のあどさる今はみゆる時てまもおきまけま谷はかけ橋
 水鳥のなく聲さゆる朝をらけ野川のまままをまろくみゆ
 月さにて置初しをば花なれや渡るまとしき宇治はいたはま
 人たはま里は小川のいさとしおまものみ白くまぬ渡りけり
 橋は上り置まもまろくま小車乃またちれ敷のみぬまらりけり
 見渡せと落葉つもれるままは上り雪とみる迄まもろ置ける
 さはま夜の朝けみみれえ板橋おおき渡まらるまもの寒けさ
 まものおく丸木は橋をさどとにけり渡る時社布や空かりけれ
 月影は寒き眺光もまどととてや橋又ゆことのしも乃れけれと

有木喜多治
 徳山仙太郎
 國富直香
 藤森恒泉
 小原和一
 同 藤 人
 笹岡良風
 神田みさ子
 倉地啓郷
 宮島省堂
 同 田 人
 倉地教親
 手島雪峯

白かれはも昨日は秋乃白つゆはけさとや橋よしと結へる
 冬乃夜の月影さえてはまの上まおく霜白くみえをたるか
 朝はらけみ見たまはまは真白也夜半のちらまお霜やおき
 空わたる乃乃羽音さあるまておくまも白ま門のいさばま
 川さりまよりの風おこを望けん橋は上しりくあける朝まも
 みるさへも寒けありけり白妙みしもれさ渡すせさは長はま
 夜風おふりま雪ととまらぬ迄おまを白しさおのいさとま
 有明の月をけりひて白まへのまもあき渡すくろあねのはま
 木枯の聲さえ見ま小夜更まかままもしるま門はいぬはま
 ありあけの月影影るとみる迄にまもあきわさず瀬多の長橋
 朝まま木々れそままみゆる也れく霜白ま谷のあけとし
 ゆり人も日影もらとま山里は谷乃はままあけるあさま
 すきゆきし人は何處あみえぬまも霜まらとる谷のくさ橋

津田成風
 貞島牧太郎
 富田朔太郎
 稻垣喜隆
 安東正谷
 久山壽野子
 小林盛章
 津田川 渡
 喜多島直養
 同 末 人
 皆木正義
 同 田 人
 長瀬茂平

二〇点

朝霧のたすかはひなる橋の上をなほくみゆるけさ乃初霜
 岩はまを行かふ人の跡たにてかくまぬ白し夜や更けぬらし
 妻木こる賤や朝どくわたせけん霜おあどある谷のかけはし
 有明は月ふみわさるこち去て寒き身ままむ橋の上はまむ
 夜あらまはさは渡りたる跡みにて置霜しる去板は十のうへ
 野きつねのあとのみみえて谷陰の小橋まねけるけさの和霜
 行かよふ人たあとさへみゆる哉霜おきわさす棚を去れ上
 行かよふ人たあてさへみゆる哉霜おきわさす棚を去れ上
 冬立といふはかりなふ今朝は入や橋の上白くかけ初霜
 曉みなさしきりな乃あどみにてかくまぬ白し初霜
 ゆきあひの人とたぬて橋の上の白さをみまは霜を置ける
 有明は月たひかて少影みにてさなからさむきは去の上は霜
 有明は月たひかて少影をひておくまも白きさとのいふま

同 藤 人
 津 川 渡
 植 田 敬 風
 赤 木 美 陽
 倉 地 啓 郷
 沖 田 女 子
 田 中 續 三
 豊 福 喜 光 子
 丹 下 正 細
 有 木 喜 多 治
 岡 田 太 謙
 難 波 慶 子
 難 波 敬 明

二〇点

杣人やわたせろ光けんなくしもは杣乃跡ある谷けいふはし
 有明乃月ままかひて朝日かてとせせるとしよおける初まも
 紅葉ちる立田のうはははしの上もけさも真白も霜を置たる
 木こそする人のもまたき渡りけむ霜おあどある谷のけ橋
 ろま人をまむ渡りけんけさみれと霜おあどある谷のけ橋
 鶏の聲もみみしむあかひたおまもおき渡す瀬田乃なかはし
 行かよふ人なまはともふられ是初しも白き野路のいふま
 天冬のよもとく明おけ置おあす初しをしろ死板を去れ上
 舟船とあふ牛はあといふねをしろく消てはこれる去の板橋
 人行のよふ人もとたは去棚を去よ月かけ寒しもうおきける
 水はゆもけさこさえり、白妙もしもおき渡す前はなはま
 今之まもちあはは橋は月さにてしもれさ渡す夜半乃寒け
 冬枯み行かふ人やなかるらんまもみ跡なきのへいふはま

勝 浦 繼 太
 藤 山 正 喜
 遠 藤 正 心
 中 島 行 宣
 植 田 亮
 三 宅 知 規
 安 原 多 年
 同 人
 築 山 球 龜
 押 坂 葵 平
 押 坂 勝 子
 同 吉 人
 塚 村 高 興

三〇点

消かてみひるさへしもみはよける日陰よりけ谷此老橋
夜を寒み行かふ人此跡もなく板とましろもまの柄けは乃
さ去くまの曉おきお見またせはおくまもしろし門はいな橋
人、有明は月きえ乃こる橋の上よかくまもしろくよと明おけ
地、水せくみきと、消て橋の上乃一きは去ろきけきのまも故
天、有明の月影うすく寝るまへ、ま控れとみぬゆくしまたいさ橋

追人加

自妙は朝もあなるまを此上をあらしのみ社さの渡りけれ
馬の上時雨

一〇点

定光眼き空もあかるかける駒の上おいく度うち去くれけ
乗駒のすゝひとみまは黒髪とふきみたまても時雨ふるま
頼みさる駒のおまへへくひ控眼き時雨は早く降りらまたる
松のけおとくよらまを駒を頼み急さくぬれま村まくれ哉

- 藤田安良
- 篠原吉一
- 國富直香
- 植田敬風
- 奥西兼子
- 岡千春
- 岡宇直隆
- 堀村高典
- 同 堀五久
- 黒川輔臣
- 同 藤原大

さまで行里よふりぬとみま時雨はや我こほの上よきふけ
乗こまは早めされともまくれくる雨の足よは及はさうけり
有明の月毛はこぬえ早めてもまくれお袖をしやるやほみち
時雨ふる鈴かは山をこぬくれとおくれおち取ること乃足截
走まゆく駒の足なみえやけまを里をへつあふ時雨の取
跡ねひて乗しあゆまいと早く浮ゑるくもはまくれ也けり
今はしも袖ぬらまけし乗こまは早めとさきま時雨ふるけり
ぬれぬはとみまきし駒は跡をひて山はふもとに時雨ふる也
駒なへていぢく山路ま控ひけり共歩足ま行まくれかな
乗こまおむさごと打え二むらじれこれ雲は跡をおひくる
しはまどて乗こし駒はあれつて止むるまもく時雨きぬ免
駒なるて山こはゆけは風さてみ木の葉ゆしまも時雨ふる也
けふも亦もまみふらすみ時雨して駒を頼み乾きまをなし

- 徳永頼琴
- 同 菅直人
- 秋山山誠明
- 瀧波善經子
- 安原多牟
- 井上常徳
- 同 水谷大
- 小野中正
- 中塚正齊
- 中島行宣
- 武 太老
- 高取長貫
- 立花勇一郎

いそかせく歸らん駒乃先おひとまをふる也山もど乃さど
 歸りくる空のたぐもま乗こまばさきをおひはふる時雨哉
 かた曇りふるのどみまを駒の行むむひの空乃はれ渡るみゆ
 幾度かこほをどと先てなるむれと打まくる也野路のぬつ原
 いそけ駒といふ其聲もしたりきく鞭う切袖おまくれふる也
 天 乗駒おまをし水かふひはもなく夕日ばらままくれふる取
 ひち打くこまを早めと時雨ゆるめ乃足おえ及ばまけま
 のる駒の綱手ゆるへん今おしも時雨をゆるく山はしさみち
 けふもまも我乗こまばあも前ま道さばけま村しりれかな
 乗駒はむちうち急ぐ跡たむて又ふりまきるむらまくれかな
 のまへ行まけのこまも我袖もまくれぬぬる冬は山さど
 むちうちて都へ急ぐ有あけ月毛はこぬにまくれふるなま
 駒なへく山邊の道をぬ來を時雨ぬ袖をぬらまけるか取

難波敬明
 難波慶子
 同 人
 正本久治
 藤原正親
 藤原吉三
 正本久治
 岡田清諒
 同 人
 有本喜多治
 徳山仙太郎
 國富直香
 丹下正繩

笠とまは山をさのみま甲斐もなく時雨お駒は手綱ぬらまは
 駒なをくみむこ覚ゆか先操山まくれぬるま乗乃をみちこ
 のる駒はぬぬまきながら急ぐ也夕くれちか時雨ぬりた
 夕まま駒を早めと手綱ぬる袖ままくれぬれけるな
 紅葉まわかぬまかれを乗駒のおままいまかば夕まくれかな
 のる駒は足おぬらせん急きゆくわどまはるま村まをれ哉
 いそきゆと駒はわのきまかひぬく又細ぬらば村時雨かな
 駒ぬるく紅葉かりしく歸るを遠まかやまふるま之れ哉
 村まを又ままま乗駒をまの木陰おとせんはもま
 乗こぬは手綱ぬるでもぬるま哉松のせ寒くまくれふるこる
 生駒山打ぬくれもまをまをぬるまぬれ吾もぬれけま
 駒とまをまはし休らふのけまなくのち乃時雨に袖ぬらしぬ
 むち打ていそく山路は夕まくれ落葉と見ればまくれぬる

同 田式人
 豊福光子
 藤森恒景
 田中續三
 奥西廉子
 同 人
 赤木美陽
 植田敬風
 倉地敦親
 原田良平
 同 人
 手島雪峯
 安東正令

二〇点

朝はたき駒にうちの上山ゆけと立かみそひく時雨ふる程
生駒山打こぬゆけとんをまき時雨ふたまも暫たゆたふ
むち寄ちて駒いふかする程もあゝ早もふとくる村玄く況哉
我乃れる駒むむち寄ち急げとも時雨はまやぐおひてきふ見
駒と先てまを木陰に立とれと紅葉をそひてまぐれふる也
乗てゆく駒はあ々き此夫よても早を過ゆとむらと之れあ
狩くらまのへる鷹野乃夕まぐれ月毛の駒ふるよりけるか
あくとまらば急々きりまを我駒の行てまゝる村玄くれ哉
駒と先てまは紅葉とあむれ木沈葉交ま時雨ふる也
ふりきぬと駒をどと先てまに程まやめて晴ゆく村玄くれ哉
駒ののり嵯峨野とくれは今日も亦まぐれの雨ま袖ぬらま身
こまどむる蔭もあら野の夕まきま袖ぬらまけを時雨ふる程
さながら駒乃前かふ心地しとい掛けといろく村しくれ哉

安東文彦
津川渡
喜多島直義
長瀬茂平
久山壽野子
倉地啓郷
沖田みさ
小原和六
藤原正親
難波敬明
遠藤正心
高取長貫
藤田安良

三〇点

紅葉うま踊る夕はむらしくれしはまど駒をど、先けるか取
今とて手綱かひくまける駒のあまけあゝる村玄くれ哉
はやめすえぬれさらましを乗駒のあどま晴る、村時雨哉
乗駒は手付取とる手もかつぬれてさかの、原ま時雨ふる也
駒とめくいつれののけお休とん時雨ふてゆく乃ち比松はら
ける駒は立髪さむく風あすてまくれふる也野路乃まひはら
むちうちて道急かままのへりみれさ駒野のあたり時雨降也
人、あらしふくれす此松原のけくれは駒まき登ひて時雨ふる也
地、駒と先てむかしと忍ぶ袖れうへも時雨ふりきぬ志賀は唐崎
天、駒と先ていさ立よらむ笠取れ山はまくれももらまどろきく

追加

中島行宣
植田亮
同 人
中塚正齊
安原多年
藤田安良
國富直香
三宅知規
同 人
徳山仙太郎

●受賞者 逢坂やはゆ便りおおくままとき時雨のあ光も天おけるらま
押坂勝子君 徳山仙太郎君 岡 千春君

岡直廬



岡山県総合文化センター



0000830174